専業主婦！

せりもも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
専業主婦！

【Ｎコード】
Ｎ６９２７Ｔ

【作者名】
せりもも

【あらすじ】
専業主婦、信子の一人語りで、物語は進んでいきます。
教師まで巻き込んだモンスターぶりや、ＰＴＡでの暗闘、ご近所トラブルと、半径３キロの出来事は、ドメスティックな身勝手さ満載です。
でもね。必ず最終章まで読んで下さいね。
ひたすらあなたをダマす為に、書きました。

第一章の1

第一章の１

朝、家を出るなり、煙草の吸殻が捨てられているのを発見した。毎朝、同じ銘柄のが落ちている。

ゴミ捨ての時、にっこり笑って挨拶してやったのに、隣家の主は、無愛想に顎をしゃくっただけだった。せっかく作ったニコヤカな笑顔が、急にまぬけに感じられた。

自転車で買い物に行ったら、若い女が、追い抜きざま、チッ、と舌打ちしていった。

安売りスーパーの狭い通路で、ふと振り返ったら、後ろにいた小さな女が、邪魔だとばかり睨んでいた。

あーあ。毎日、腹の立つことばかり。

そう言ったら、ストレスがたまってるんでしょ。外に出てけば？と真紀子に言われた。

ふん。

私は専業主婦だ。

専業主婦だとカミングアウトすると、決まってイタケダカに攻撃してくる奴がいる。真紀子のような、働く女だけではない。働き盛りの男も、ヒステリックにストレスをぶつけてくる。

家事をする専業主婦を馬鹿にする人というのは、家事そのものも、程度の低い仕事とみなしているのだろう。

ご立派な自分がやるには、あまりにも、ヒマでつまらぬ仕事だと。

従って、そういうヤカラの家は、きっと荒れていることと思う。ゴミ屋敷や汚部屋、今は、ちゃんとしたネーミングまである。

私に言わせれば、自分の身の回りのこともろくすっぽできない人間は、基本のところでなっていない。

その人間性は、到底、信用できるものではない。

そのくせ、仕事、仕事と、そればかり言う。結局、大切なのは、ご大層な「自分の仕事」だけなのだ。
だが、毎朝、目をこすりこすり、汚れた巣から這い出てくるやつに、いったい、どれほど立派な仕事ができるというのか。
基本の生活がなっていない奴の仕事は、いつか国を滅ぼす。
はいはい、ごめんなさい。私は、働く皆さんに寄生する、専業主婦でした。
家事しかできない、つまらない女です。
……。
最後にこう言っておかないと、怖いからね。

午後二時。庭に出て、布団を叩く。
日差しをたっぷりと吸い込んだ布団からは、日向の優しいにおいがする。今夜は、子ども達も、眠りに就くのが早かろう。
これだけ湿気の多い国で、頻繁に布団を干さないなんて、愚かなことだ。
そう言ったら、だって昼間は、働きに出てるんだから仕方ないでしょ、と、青筋立てて真紀子は怒ったけれど、天日を当てて乾燥させた布団と、じっとりと湿気た布団、どちらが健康にいいかということなど、自明の理というものだ。
あまりに気持ちがいいので、取り込んだ布団の上でうとうとすること、数十分。ピーンポーンパーンポーン。という、市の放送で目が覚める。
不審者対策の一環として、小学校低学年の下校時刻になると、住民に、「外へ出て、子ども達の安全を見守りましょう」と呼びかけているのだ。以前は、子どもの声で放送を流していたが、かえって不審者を喜ばせる結果にでもなったのか、この頃は、大人の女の声が響き渡る。
放送が始まったばかりの頃は、私も馬鹿正直に、門の辺りをうろ

うろしていたものだが、用もないのに外に出ていると、道行く人が、このヒマ人めが、とばかりに、じろじろ見るので、やめにした。
それに、この春から、わが家にも、帰ってくる子ども達がいる。ようやく一緒に住めるようになった、かわいい子ども達が、息を切らせて帰ってくる。
呑気に外に出てなどいられない。
慌てて立ち上がる。
朝と違って、ほんの少し眠っただけなのに、すっきりと目覚める。起きてすぐ、活動できる。そして何よりも、頭が明晰になっている。午後の家事の手順が、鮮やかに浮かぶ。
だから、昼寝は必要だと思う。
会社では昼寝はできない。専業主婦はいい気なもんだ。よく、そう言われる。だが、数十分眠って、効率をよくする。むしろ、会社でも見習うべきなんじゃないか？　自分と違うカテゴリーに属する人間を差別し、馬鹿にしてばかりいるから、出世できないのだ。
キッチンのボウルの中には、卵と牛乳、砂糖に浸した食パンが入っている。さきほど、味噌汁の残りとお冷やご飯の昼食を済ませた時に、つけ込んでおいたものだ。これをバターで焼いて、フレンチトーストにするのだ。
甘い卵液を、時間をかけてたっぷりと吸ったパンが、こんがりとキツネ色に焼け、バターの匂いが家中を満たす頃、玄関のドアがバタンと開いた。
「ただいま！」
元気のいい声が、ランドセルを投げ出す音に重なる。
「お帰りぃ！」
この一言を子どもに言う為に、私は、今、ここにいる。
トイレのドアが乱暴に開けられ、弾丸のように、中へ駆け込む音がする。
美弥は、いつもそうだ。よほど、学校で緊張を強いられているのであろう。

すぐに、ジャーと水を流す音がして、さわやかな顔をして出てきた。
これこれ、この笑顔。この笑顔があるうちは、大丈夫。
「いい匂い。今日のおやつ、なぁに？」
「手は洗ったの？　うがいは？」
「まだー」
言いながら、洗面所へ入っていく。小学校一年生の美弥は、まだまだ、素直でかわいらしい。
「ねえねえ、遊びに行っていい？」
フレンチトーストを口いっぱいほおばって、美弥が聞く。
「宿題を済ませてからね」
勉強を先にやってしまうという習慣をつけることが大切である。夕飯の支度を始める前なら、漢字や計算ドリルの答えあわせに付き合ってあげることもできる。
「でもー。約束したー。ランドセルを置いたらすぐに集合って」
「どこに？」
「団地の公園」
つい先日、おやつを食べて宿題を済ませてから公園に行ったら、友だちはみんな、どこかへ行ってしまっていなかった、と、美弥が泣きながら帰ってきたことがあった。子どもたちは、集団で、居場所を変えながら遊ぶのだ。
「誰と遊ぶの？」
「ユリちゃんにヒメちゃんに、サトル君。他にもまだ来るって言ってた」
基本的に、わが家では、放課後の外遊びを重視している。子ども同士で遊ぶ方が、習い事をさせるよりよっぽど、豊かで実り多い時間を過ごせると思う。
長いこと時間をかけて下ごしらえしたフレンチトーストは、あっという間に小さなお腹に消えた。口をすすがせる為に勧めた牛乳をごくごく飲み干すと、美弥は、まるで羽でも生えているかのように、

あっという間に外へと飛び出していってしまった。
子どもの背中には、本当に、見えない羽が、生えているのだろう。
毎日が、楽しくてたまらないのだ。
私は、だから、その楽しい時間を、大事に大事にしてやりたいと思う。

サバの頭を取り、内臓を抜いて、三枚に下ろす。
夫とは、別居している。だから、夕食には、子どもの好きなものを作っていい。
しかし、だからといって、ハンバーグやカレーやカラアゲや、そんなものばかり食べさせていたら、将来が心配だ。全ての保護者は、幼い者の体への責任を、全身全霊で果たさなければならない。
とはいえ、サバの味噌煮よりは、チーズを混ぜたパン粉をたっぷり塗りつけて、オリーブオイルで焼いてやるくらいの甘やかしは、許されるであろう。青魚は健康にいいが、まずは、食べてもらわなければ話にならない。
専用の毛抜きで、丁寧にサバの小骨を抜いていると、六年生になったばかりの雪美が帰ってきた。
妹とは反対に、つぶやくような「ただいま」と共に、ドアが開閉される、静かな音がする。
「お帰り。おやつ……」
「太るからいい」
私がうるさく言うので、キッチンに顔を見せには来るが、そのまま自室に直行しようとする。
「そんなこと言わないで。少し食べてみたら」
「いらない」
まあ、いつものことだ。わかってはいる。けれども、毎日、美弥の分と共に、雪美のおやつも用意してしまう。見向きもされないそれは、結局、私のお腹に納まるのだけれども。

「学校、どうだった？」
もう少し雪美と話したくて発する、いつもの問い。
「フツー」
「雪美、」
「今日、塾だから」
言い置いて、さっさとキッチンから出て行ってしまう。
「塾なんて……」
雪美はこの春から、週に三日、進学塾に通い始めた。
中学受験をするというのだ。
私は、受験はもちろん、塾通いにも反対した。
塾へ行くには、交通量の多い道を自転車で通わねばならない。帰りはなんと、夜の九時過ぎ。私に言わせれば、夜中だ。自動車で送り迎えする保護者もいるようだが、私は車に乗れないし。
春とはいえ、夜はまだ肌寒い。ライトをつけ、重いペダルを踏みしめ踏みしめ、よろよろと帰ってくる雪美を思うと、涙が出そうになる。少なくとも小学生のうちは、夜になったら、暖かい安全な家で守られているべきだ。
「お父さんが、塾へ行ってもいい、って、言ったから」
そうなのだ。塾に行きたいと言い出したのは、雪美本人なのだ。それなら金は出すと、近藤も賛成した。
繰り返すが、私は反対だった。今でも、塾という選択は誤りだったと思っている。
小学校の国語・算数くらいなら、私にだって、充分教えられるのに。
塾では、中学入試を前提に、志望校の入試問題に類似した問題を、マシーンのように、無機質に詰め込まれるという。小学生の今から、そんな勉強法をしていたら、大学受験の前に、燃え尽きてしまうのではないかと、大変心配だ。
だいたい、なぜ、地元の公立中学ではいけないのか。この地域の公立中学校は、授業ができないほど荒れているわけでもないし、通

っている子ども達は、おおむね、礼儀正しい。近藤は、みそくそ一緒の公教育の弊害をえんえんと述べ立てたが、そんなに公立学校が信じられないのなら、小学校から私立へ放り込めばよかったのだ。そこまでの資力はないくせに、半端に中高一貫校なぞ、片腹痛い。

暖かいキッチンを出た雪美が、部屋から塾カバンを取って来て、そのまま出かけようとする気配がした。

慌ててエプロンで手をふきふき、玄関へ走る。

鼻先でドアが閉まろうとしていた。

「気をつけて行ってくるのよ！」

ドアの透間に身をこじ入れるようにして叫ぶ。心配で心配で、仕方がない。

「慌てて行っちゃ、駄目だからね。少しくらい遅れてもいいから、焦って走ったらだめよ」

雪美を追ってスリッパのまま外へ飛び出し、慌てて戻ってきて、サンダルに履き替える。自転車をずるずると引き出している雪美の傍らにぴったりとくっついて、なおも言い募る。

「帰りは暗くなるからね。必ずライトをつけて、歩道を走ったってかまわないから、車にぶつかるよりは、歩行者をはねた方が、まだ……」

「うるせぇよ、ババァ」

雪美は自転車にまたがり、走り去っていった。

外遊びから帰ってきた美弥は、姉の帰りを待つことはできない。

まるで狼のようにお腹を空かせていて、青魚だろうが白身の魚だろうが、頓着せずに口に詰め込む。

「おいしい？」

魚を丸ごと一匹から、手間隙かけて作った料理だ。聞かずにはいられない。

「チーズが焦げてるとこがおいしい」

口いっぱいほお張ったまましゃべるのは行儀が悪いが、「おいしい」という言葉が出た時点で、たしなめるのはやめにする。
「ご飯が終わったら、宿題を済ませてしまいましょうね」
「宿題、出なかったよ」
「え？　嘘。教科書の朗読とか、漢字の書き取りとか、計算ドリルとか……」
「出てないよ」
いやにはっきりと断言する。
教科書は、ノートと見まごうばかりに薄くなり、その上学校は、宿題まで出さなくなったのか。
保護者がしっかりと勉強を見てあげなくては。
「じゃ、ご飯の後で、今日習った漢字を教えてくれる？　足し算の競争もしてみようか」
「ううん、どうしようかな……」
既に入浴をすませ、お腹も満ち足りつつある美弥の目は、とろんと潤んだようになっている。
仕方がない、眠いのに無理に勉強させるのも酷かな、まだ学校に上がったばかりだし、焦ることはないかもしれない……。
血のつながりゆえの情けが、将来を憂う気持ちに待ったをかける。毎日、葛藤を繰り返し、その中で、少しずつ、少しずつ、机に向かわせている。
美弥が、最後に残ってしまった温野菜のサラダに悪戦苦闘していると、電話が、かすかに、グーッ、と震えた。
うちの電話は、コール音が鳴る前に、幽かに震える。
来るぞ、と思っていると、果たして、ルルルルーッ、ルルルルーッという威勢のいい音が、主婦と子どもだけの静かな部屋にあふれた。
電話は、好きではない。家庭という安全なシェルターに、強引に外から接触されるようで、受話器を上げるまでしつこく鳴る続ける呼び出し音には、時に、脅威さえ感じる。

しかし、私は子どもではない。家庭に閉じこもって外界からの接触を絶ってしまうようでは、主婦は務まらない。
「はい」
このご時世、こちらからは名を名乗らない。相手は、一瞬、詰まったようだったが、すぐに問いかけてきた。
「近藤、美弥さんのお宅ですか？」
もう若くはない、女の声。私の胸が、とくん、と鳴った。この声は、知っている。
「はい、そうですが」
「私、希望が丘小学校の似鳥と申します。近藤美弥さんの担任をしております」
似鳥先生には、入学式の時に会っている。大切な子どもを預けている先生だもの、声を一度聞いたら、忘れない。
「あ、どうも。いつも美弥が大変お世話になっております」
丁寧にご挨拶申し上げたが、心臓はもう、割れ鐘のように、どっきんどっきん鳴り響いている。
良い予感、悪い予感。心の中で、めまぐるしく入れ替わる。昔、初めての恋を告白をした時のように。
「美弥さんのことなんですが……」
挨拶を返しもせず、似鳥先生は口ごもる。美弥が、何か素晴らしい偉業を成し遂げたのか。市の展覧会に入選したとか。或いは、……。
薄墨のような不安が流れてくる。
トラブル？
まさか。うちの子にかぎって。
早く、早く。早く続きを話して欲しい。
「実は今日、お友だちの小早川君に噛み付きまして」
「はあ」
あまりに思いがけなくて、間抜けた声しか出ない。
「なんでもね、小早川君の背中に、くっきりと歯型が残っていたとかで。電話がありまして、小早川君のお母様から」

「はあ」
「ですからね、おうちの方から、小早川さんに、お詫びの電話を入れてほしいのです」
「ちょっと待って下さい」
ようやく思考がまわるようになって、私は慌てて口をはさんだ。
「その、美弥がやったというのに間違いはないのですね」
「ええ、それは、小早川君もはっきり言ってますし。それに、周りで見ていた生徒も大勢おります」
証人あり？　それはやばい。
「ええと、噛み付いたのは、悪いことですね。はい、それは、そう思います」
「では、おうちの方から、小早川さんにお電話を入れて下さい」
緩やかな口調で、似鳥先生は言った。こちらが非を認めたからだろう。
「でも、美弥は、理由もなく相手のお子さんに噛み付いたのですか？」
「休み時間で、ちょうど私がいなかった時でね。子ども同士のけんかでしょう。ただ、似鳥君の背中に、歯型が残っちゃってるものですから。保健室にも行きましたし、まだ、傷が残っていると、お母さんがおっしゃるのです」
似鳥先生は再び、小早川家で詫びの電話を入れるように促した。
「とにかく、怪我をさせてしまったのは、確かなのですから」
怪我？
「相手のお子さんは、病院へ？」
「いえ、そこまでは。ただ、かなり深い歯型が残っていると、お母さまが」
歯型がついたくらいで、病院へ行くわけがない。
「一方的に、美弥が悪いのでしょうか」
「電話があったのです。小早川君のお母さんから。何分、怪我をさせてしまったわけですから。今夜のうちに、是非、お電話を」

何が何でも、私から詫びを入れさせたいようだ。
　言いたいことは、山ほどあった。しかし、たかだか三〇人のクラスメートで、一学年に二クラス、この子たちとその親と、六年間、中学も地元なら九年間、つきあっていかなくてはならない。
　先生だって、二年間は持ち上がりだ。
　それに……。そう。私は、モンスターではない。
「わかりました。これから、電話します」
「そうして下さい」
あきらかにほっとした口調で、似鳥先生は言った。
　「似鳥先生？」
受話器を置くと、美弥が、そばに寄り添い、私を見上げるようにして聞いた。
　黒目がちな瞳が、心配そうに揺れている。
　私は、美弥を、ぎゅっと抱きしめた。
「今日、お友達とけんかしちゃったの？」
「うん」
「小早川君って子？」
「小早川……さとる君」
私はそれが、放課後、一緒に遊んだ子の名であることに気がついた。
　いずれにせよ、放課後には、小早川君の背中の「歯型」は、それをつけた美弥との遊びを妨げるほど、痛みはしなかったということだ。
「いつもは、仲、いいんだ」
「うん」
「でも、学校で、噛み付いちゃったんだよね？　何でかな」
「……」
見ると、両目が、涙でもりあがっている。
むやみに人に噛み付くような子ではない。それは、私が一番よく知っている。先生が何と言おうと、その信念は、決して揺らがない。
　よほどの事情があったのだ。

「美弥のこと、ブスだって。ブスじゃないもん、って言ったら、引っかいたの」
「引っかいた？」
美弥はうなずき、左の袖をあげた。薄いブラウスの下の腕には、まるでミミズ腫れの見本のような引っかき傷が、長く伸びていた。
「まあ。痛かったわねえ」
なぜ気づいてあげられなかったのか。これはお風呂で、さぞやしみたに違いない。
美弥は、しゃくりあげるように、やっとのことでうなずいた。その拍子に、両目から、膨張限界を超えた涙が溢れ出した。
私はもう一度、美弥の体を、ぎゅっ、とした。
美弥が、私の体を抱き返し、エプロンに顔をこすりつける。
「でもね、やっぱり、噛み付いちゃ、駄目だよ」
神さま。相手が先に手を出しても、こう言わなくちゃ駄目ですか？
右の頬を叩かれたら、左の頬を差し出せと、私は、教えたくない。
「ごめんなさーい」
ぐしゅっ、っといい、美弥は声をあげて泣き出した。
「いいえ、美弥が悪いんじゃない」
言わずにはいられなかった。
「先に手を出したのは、その子じゃないの。美弥は、やられたからやり返しただけだもの。美弥の手にだって、こんな立派なミミズ腫れが残ってるじゃないの。思わず噛み付いたって、仕方がないことだわ。反射神経ってやつよ。美弥は、反射神経がいいのよ。やられっ放しにしてたら、将来、イジメに繋がるわ。冗談じゃない。自分を貶めちゃいけないのよ」
美弥はあっけにとられたように口を開けて、私の顔を見ていた。
「いい、美弥。似鳥先生がうるさいから、これから、その、小早川君って子のお母さんに電話をかけて謝る。でも、それは、大人の取引。大人にはね、時として、全然悪くはなくても、謝らなきゃいけない時があるの。噛み付いたのは、そりゃ、少しは美弥も悪いけど、

でも、相手の子も充分悪いもの。けんか両成敗ってやつよ。美弥だけが悪いんじゃない」
憂慮すべきは、この先の六年、乃至九年間一緒という閉塞状況なのであり、二年生に進級するときはクラス替えなし、担任持ち上がりというこの現実だ。
理解したとは言いがたい表情ながら、美弥は頷いた。私は、美弥に頷き返し、受話器を取り上げた。
電話が繋がり、相手が小早川ママであることを確認すると、私は、一気に詫びの言葉を述べた。
膝が、少し震えた。
「さとる君の、お怪我の具合はいかがでしょうか。まだ、痛みますか？」
わざと、怪我、と言ってやった。
噛み跡くらいで、大袈裟な、という気持ちが伝わるように、慇懃無礼に。
「噛み付かれたのですからね。五ミリくらいの深さの噛み跡が、紫色に残っていますよ」
尊大な答えが返ってきた。
私は恐縮を装った。
「それは痛かったでしょうねえ。あの、病院には行かれました？治療費は、是非、うちで負担させて下さい」
病院になど行っていないのは、似鳥先生に聞いて知っている。私だって、ミミズ腫れくらいで救急外来にすっ飛んでいったりしない。
「病院は行ってないですけど……。でも、いきなり噛み付くなんて。それも、服に隠れて見えない背中を」
まるで自宅での虐待を匂わせるようなもの言いである。それを言うなら、美弥の傷だって、ブラウスの袖で、すぐにはそれとわからないところにつけられていた。
しかし、美弥の傷について言うことは得策ではない。
噛み跡について、病院に行くほどではないと認めている以上、な

るべく下手に出てこの場を丸く治め、入学すぐの一エピソードとしてもらうことが、肝要だ。
謝った謝らないで、六年間（九年間！）根にもたれたら、本当にかなわない。女の子なのに、なんて乱暴な、それにあそこの家は、絶対謝らないし、などという誤った噂を、他の保護者に流されても困る。
似鳥先生には、そうとう強くねじこんだのだろう。さもなければ、ベテランの先生が、美弥に話も聞かず、いきなり謝れと言ってくるわけがない。
モンスターペアレントじゃないか。
敬して遠ざけるにしかず、というところだ。
「なんですか、けんかをしてしまったそうですね。私はその場にいなかったものですから、ちょっと状況はよくわからないのですが」
私は言った。ケンカなのだ。子どもの。
それだけは、きちんと確認しておかなければならなかった。
美弥の、小さな名誉の為に。
「学校での出来事ですもの、もちろん、私だってその場にいなかったんですけどね。でも、美弥ちゃんがさとるに噛み付いたところを見ていた子は、大勢いるんですよ」
「本当に、暴力はいけないことです。美弥にも、きつく言いました」
「まあ、子ども同士のことですからね」
こちらが低姿勢で謝罪を述べたので、相手の態度も軟化してきた。
「さとるはあまり気にしていないようです。おおらかな子ですから」
「学校から帰ってから、一緒に遊んだようですね」
「え……」
虚を突かれたような声を出す。知らなかったようだ。
まだ入学したての一年生なのに、帰宅後、自分の子どもが誰と遊んだかも知らないのだ。
その程度の親だ。その程度の親が、自分は子どもをかわいがる立派な保護者だとアピールしたくて、夜、担任に電話をかけ、うちに

苦情を述べている。
　相手のスタンスがわかると、ぐんと余裕が広がった。
「明日、改めてきちんと謝るように、美弥には言っておきます。本当に申し訳ございませんでした」
「何分子ども同士のことですからね。こちらとしても、そう強く言うわけではないんですよ。ただ、外から分からない場所に、噛み跡をつけられたら、親として黙っているわけにはいきませんからね」
「申し訳ありません」
「家庭に問題があると、いらいらしたりするお子さんは、多いですからね。でもそれを、きちんとした家庭の子に八つ当たりされたら、かなわないわけですよ」
「……」
さすがに返事はしなかった。
「ま、長いおつき合いになるわけですから。私の方も、ここだけの話にします。お互いそういうことでいきましょう」
何が、「家庭に問題がある」だ。私は、ハラワタが、煮えくり返る思いだった。
　私には、近所関係で、親しくして頂いている親が、何人かいる。その人たちから、小早川ママの評判を聞いてみようと思った。
　そして、評判芳しからぬようだったら（マトモな親とは、とても思えなかった）、今夜のことに、背ビレ尾ヒレつけて、話してやればいい。
　人の家（ひとんち）の子を、悪者に仕立てるからには、それなりの覚悟があってのことであろう。
「ごめんなさい」
受話器を置くと、息を詰めるようにして気配を潜めていた美弥が、再び、謝った。
「いいのよ、美弥。あなたはちっとも悪くない。さっきも言ったけど、これは、大人の取り引きなの。子どもは、関係ないわ。でもね、やっぱり噛み付いたのはあまりよくないから、明日、さとる君に謝

ってごらん」
すでに放課後一緒に遊んでいたのだから、それは無意味に思われた。
しかし、一応。念のため。
「うん」
「さとる君にも、謝って欲しいよね」
「美弥から先に謝るよ。だって、さとる君に痛い思い、させちゃったんだから」
「美弥も痛かったでしょ？」
「でも、美弥は泣かなかったよ。さとる君は泣いて、保健室へ行ったんだ。保健の先生が、笑いながら赤チンつけてた」
「そう……」
泣かないで偉かったね、とほめるべきか。
しかし、こういう場面では、泣いた者勝ちなのだ。もしくは、声の大きい者勝ち。先に騒いだ者勝ち。
大人の世界は醜く、えげつない。
だが、それを教えるには、美弥は、あまりにも幼すぎる。純真すぎる。
「朝一番で謝るといいよ。忘れちゃうから」
「そうだね。朝、学校へ行ったら、すぐ、謝るよ」
やるべきことがわかって、美弥は、晴れ晴れとした顔で言った。

次の日、学校から帰った美弥を待ちかねるようにして、朝の成果を聞いてみた。
実は、一日中気になって、家事が手につかなかったのだ。
「謝ったよ」
あっさりと美弥は答えた。
「そう。偉かったね。さとる君はなんて？」
「さとる君も、ごめんねって」
拍子抜けするくらい、あっさりと美弥は答えた。今日のおやつは、

アジの骨を油で揚げたおせんべいだが、それを食べるのももどかしそうである。
外に遊びに行きたくて行きたくて、そわそわしている。
「今日は、誰と遊ぶの？」
「ユリちゃんとヒメちゃん」
「さとる君は？　遊ばないの？」
ひやりとした。親から禁じられたか？
「ううん。塾があるから、後から来るって」
「ああ……」
そんなものなのだ。そんなもの。
心配なんて、無用の長物。次の日になればすっかり忘れてしまう。
そして、仲良く遊ぶ。
けんかしたって、泣いたって、一晩寝れば、屈託なんて、消え去っている。
むしろ、親の方が、引きずってしまうものなのだ。

第一章の2

第一章の２

その日は、雪美のクラスの保護者会だった。
この春まで、子ども達とは離れて暮らしていたので、クラスの保護者会には初めて出る。
同席した親も、知らない親ばかりだ。行ってみると、先生の机を前に、凹字型に並べられた机に、十人前後の保護者が、二～三人ずつ、固まって座っている。全て女性、母親だ。
雪美のクラスは、三十八人学級だから、これは、かなり出席率が悪い。半分切っている。これでは、実社会では、まともな会議は、成立しなかろう。
それとも、後から遅れてやってくるのであろうか。
知り合いがいないので、私は、空いている席に一人で坐った。凹字型の、先生の机の近くが、両方とも空いていたので、右側のとっぱなに座った。
保護者会は二時かっきりに始まった。
美弥のクラスの、ベテランの女の先生と違って、雪美のクラス担任は、小林先生という、若い男の先生だった。若い、と言っても、三〇代初め、というところか。
威勢のいい声で、クラスの日常を報告していく。総じて問題もなく、いいクラスのようだ。
当たり前だ。うちの雪美は、いい子だし。
ただ、給食を残す子が多い、と言っていた。少しにしてくれと言う子が多くて函に残ってしまい、おかわりを募っても、欲しがる子が殆どいない、ということだった。
「僕も一生懸命食べるんですがね」
体格のいい小林先生は、残すという行為が、いかにも無念そうだっ

た。
「特にこの年齢の女子は、避妊……じゃなくて、ダイエットをしている子が多くて、あまり食べないようですが、これは、健康にもよくないことです」
確かに避妊、と聞こえた。しかし、どの親も、何の反応も示さない。俯いている人が大半で、顔を上げている人も、全くのポーカーフェイスだ。
先生も、何事もなかったかのように、年間予定に話を移した。
ひょっとして気のせいだったか？
私は混乱した。しかしまあ、単純な言い間違いなら、なにも目くじらを立てることもないわけだし。
それとも、何か？　避妊、よくあることなのか？
このクラスは、小学六年生……。
聞き間違いに違いない。
話は、行事予定、給食費・雑費の年額、教科ごとのノートの種類と続いて、もらったレジュメのほぼ最後までいきついた。
「今までのところ、何か質問はありませんか？」
無反応。
あまりの反応のなさに先生が気の毒な気がしたが、私が挙手すると、逆に質問ばかりになりそうな気がする。それで、黙っていることにした。
子どもたちの学校生活については、保護者として、ひとつひとつ、丁寧に、対応していくしかない。それに、これまでの先生の話はとても分かりやすかったし。
「では、ＰＴＡさん」
小林先生は、私の向かい側に並んで座っていた二人に目配せした。
それから、立ち上がって、教室から出て行ってしまった。
途端に、教室はざわざわし出した。
「さあ、役員決めです」
全員がぴたりと口を閉じる。

「それじゃ、まず、クラス委員から。やりたい方」
私は身をこわばらせて、下を向いた。役員なんて、やれると思わないし、やりたくもない。
金輪際、力いっぱい、やりたくない。
まさか、保護者会の後で役員決めがあるなんて、思いもしなかった。
不覚だった。知っていたら、来なかったのに。
出席者がばかに少ないわけが、ようやくわかった。「役」もとい「厄」を避ける為に、年度始めの保護者会には出席しないのだ。
一瞬の間を置いて、だが、意外なことに、挙手があった。それも、後ろの方に並んで座っていた二人が、目を見合わせて頷きあうようにして、ほぼ同時に。
向かいの席の司会者が、満足げに頷いた。
「次、広報」
おずおずと、髪の長い内気な感じの女性が手を挙げる。
「はい。じゃ、文化厚生」
あまりの積極性に、詰まりかけていた息が、ようやく元に戻った。
いいクラスじゃないか。無関心な親も大勢いるようだが、少なくとも、学校を気にかけ、進んで役員を引き受けて下さる方々がいる。
「文化厚生！」
向かいの席の、司会者が、やや尖った声を出した。
「誰か、やりたい人」
二名の司会者は、昨年度のクラス委員ということだった。そのうちの一人は、私が言うのもなんだが、かなり年輩のようだ。目をこらすと、机の上のネームプレートには、小野寺と書いてある。「小野寺」という文字の繊細さと違って、その女性は、子どもが、それも男の子が最低でも三人はいて、毎日怒鳴り散らして暮らしてます、といった風情だ。
小野寺さんの声に、いらつきが混じった。
だが、出席者たちの多くは、少しも動揺した様子ががない。もち

ろん中には、一人二人、目を合わせないように下を向いている人もいるのだが、殆どの親は、リラックスし、どこか楽しそうに、隣の人とおしゃべりなど始めた。
しだいに教室ががやがやとし出す。
私は、気が気ではなかった。
「丹野さん……」
とうとう、小野寺さんが、個人名を呼んだ。後ろの隅に座っていた、なんとなく陰気な女性が、身をこわばらせた。
「丹野さん、どうです？」
ずばりと、指名する。
「えっと、私……」
丹野さんは、身も世もあらぬというふうに、体をねじる。
「お電話をもらってから、ずっと考えてたんですけど……」
ひええぇ。予め電話して、根回ししてたのか。だから、クラス委員も広報もあっさり決まったのか。きっと電話で、こんこんと因果を含められたに違いない。
そんな電話が子どものクラスメートの親からきたら、私には断ることなどできはしない。うちに電話が来なくて、本当によかった。
「でも、私たち、この春引っ越してきたばかりだし、学校のことも近所のことも、何もわからないし……」
「みんな、何もわからずに引き受けてきたんです。もう六年生ですからね、ここにいる殆どの方が、何かしら役を経験していらっしゃいます。それに、同じことをやるなら、何も知らない方が、シガラミがなくて、やりやすいと思いませんか？」
「でも、仕事が……」
「仕事は理由になりません」
小野寺さんはずばりと言った。
「今は、働いていない方の方が少ないですし、広報の内山さんだって、お仕事を持っていらっしゃいます。大丈夫、私だって、仕事の傍ら、クラス委員をやってこれたわけだし」

フルタイムで働いてか？　だとしたら立派なことだ。
私は真紀子のことを思った。
二人の子どもの母親である真紀子は、役員は逃げ切ると、常々と言っていた。九時・五時半のフルタイムで、残業・休日出勤ありの専門職、通勤に一時間半かかるキャリアウーマンである真紀子は、子どもの学校に来ることさえ不可能であろう。
生意気な女であるが、そこだけは、私も真紀子に賛同していた。もっとも、真紀子に不可能なのは、「母親業」という根幹なのでは、と思わないでもない。
しかしだからといって、専業主婦が子どもの学校の雑事を全て引き受けるというのは、これは不公平だと思う。仮に、外に出て働いていないという理由で学校の用事を全て引き受けたとしても、働くお母さん方から、給料を貰えるわけでもないわけだし。
それどころか、今まで家にいた人が、外で働こうと思い定めても、まず、子どもの預け先がない。保育園や学童保育に問い合わせても、すでにフルタイムで働いている人たちの子でいっぱいだと断られてしまう。
職探しの間の託児さえ、あてがない。
その上、ＰＴＡを引き受けて、何かいいことがあるというのか。
小野寺さんが、大きな声で言う。
「私、思うんですよね。フルタイムで働いている方のほうが、もう、勤続年数、長いでしょ？　だから、有給とか補償されているわけだし。パートのお母さんだと、休むと、収入が下がるわけですよ。もしかするとクビになっちゃうかもしれない。生活に即、ひびくわけじゃないですか。丹野さん、お仕事は？　フルタイム？」
「パートです」
「じゃ、時間に余裕があるじゃない。大丈夫、私も、パートで働きながら、ＰＴＡの本部役員をやったこともありますよ」
なんだかすごい論理矛盾のような気がするが、小野寺さんは、何の迷いもなく、さわやかに言い切った。

丹野さんは何か言いかけて、困ったようにうつむいてしまった。
すると、小野寺さんの隣で黙っていた旧役員のもう一人が、席を立って、丹野さんに近づいていった。続いて、小野寺さんも席を立つ。
旧役員二人は、顔を寄せるようにして丹野さんの机の左右にしゃがみこんだ。丹野さんの両隣にいた人たちが、急いで自分の机を、邪魔にならない位置にずらす。
旧役員二人は、困ったような表情を浮かべている丹野さんに、こんこんと何かを言い含めている。
周囲は、いっそうざわざわとしだした。
耳を澄ませてみると、少し離れた隣の人たちは、上の子の中学の話をしている。制服が傷んできたので新調したいが、いつがいいか、と一人が言うと、私立高校の入試で面接がある場合があるから、少なくとも二年生の冬までは待った方がいいと、もう一人が答えていた。
まるで、クラス委員を、丹野さんに押し付けようとしている現場に、居合わせていないかのような気楽さだ。
「あの……」
私は身を乗り出して、中学の話に夢中の二人に、そっと話しかけた。
「お二人は、何か役をやられたんですか？」
二人は同時に口を閉じ、私をじっとみつめた。
「一年生の時に」
三井というネームプレートを前にした一人が言うと、もう一人も頷いた。
「早くやっちゃった方がいいんですよ。どうせ何かやらなくちゃならないわけだし、何年も針のムシロに座るの、いやですもの」
「ここにいる人で、何もやっていない人の方が、少ないんじゃないかしら。学年が上がるに従って、そうなるわけです」
ひえぇー、そうだったのか。
「でも、今日、来てない人もいるわけでしょ？」

「そもそも、保護者会にさえ来ない人に、役員を押しつけるわけにはいきませんからね。そういう人は、あなたに決まったと伝えようとしても、電話にさえ出ないという話ですよ。直接家に行っても、逃げ隠れするそうです。そんなんじゃ、決める方の小野寺さんたちも大変だし、第一、何もやらない人を役員にしても、困りますからね」

「保護者会にさえ来ない人」に、わずかに侮蔑の匂いが感じられた。

「文化厚生が一番ラクですよ。委員長にさえならなければ」

「委員長になったら、本部役員は免除ですけどね」

それから二人はまた、楽しそうに、中学の話に戻っていった。

「決まりました」

ざわめきを突き破って、小野寺さんの胴間声が響き渡った。

「文化厚生、丹野さんが、お引き受け下さいました」

ね、という風に、頷くと、真っ赤な顔をした丹野さんが、力なく頷き返した。

引き受けた、という印象ではない。強引に説得されたというにふさわしい。

ぱらぱらと、まばらな拍手が巻き起こった。私も、感謝の気持ちをこめて、拍手をした。

丹野さんには気の毒ではあるが、ここにいる人の大半が役を経験している以上、その矛先はいつ、私に向くとも限らない。強引であろうが、説得ずくであろうが、とにかく丹野さんが引き受けてくれたことに、ほっとした。

これで終わりか。やれやれ、ずっと緊張していたので、肩が凝った。

ほっとして立ち上がろうとした時、小野寺さんが、再び口を開いた。

「では、最後に、選出委員を」

選出委員？

「ＰＴＡ本部役員を選出する委員のことですよ」

私のもの問いたげな目線を察して、隣の三井さんがこそこそ教えてくれた。
「本部役員？　クラス委員じゃなくて？」
なんと、まだ「厄」があるのか。
「今決めたのは、クラスの委員です。その上に、ＰＴＡ会長とか書記とかいう本部役員がいて、その本部役員を選出する為の委員が、選出委員です」
「はあ？」
「来年の一月に、本部役員を決めるための互選会というのがあって、そこへ出す人たちを、クラスから募るのですが、誰をそこへ出すかを決める委員です」
三井さんの話はわかりにくかったが、ようするに、今決めた、クラス委員二名、広報・文化厚生各一名の他に、年末には、六年生を除いた各クラスで、さらに二名の、来年度のＰＴＡ本部役員候補を選出しなければならない。本部役員ともいえば、学校に日参、校長とサシで交渉、なんていう重責なので、誰もやりたがらない。それでは困るので、各クラスから強引に二名ずつ「推薦」させる。年明けには、推薦された人たちを集めて、「互選会」を開いて、「公正」に、会長はじめ、来年度の本部役員を決めるのだそうだ。
来年度の本部役員を決める係、それが、選出委員というわけだ。
雪美のクラスは六年生なので、「互選会」に出す人を決める必要はない。しかし、選出委員は、学校中で最も恨まれる役なので、決まらない場合の押し付け役は、卒業していく六年生の親が勤める。
完璧な憎まれ役じゃん。
クラス委員もいやだったが、選出委員なんて、とんでもない、場合によっては、地域にいられなくなるのではないか。背中に気をつけなければ、夜道を歩けなくなりそうだ。
逃げる逃げる逃げる！　私の頭の中は、「逃げる」の文字でいっぱいになった。
だが、逃げ場はなかった。気がつくと前後の入り口はぴたっ、と

戸が閉められ、こそこそ出て行ける雰囲気では到底なかった。そもそも、席を立つことさえ困難な重圧が感じられる。
「選出委員、やりたい人―」
どこかおどけた感じで、小野寺さんが言った。いるわけないよね、と、私には聞こえた。
「いつも決まらないのよ」
三井さんがぼそりとつぶやいた。
「はい、いませんね」
丹野さんの時と違って、いやにあっさり、小野寺さんは立候補者を募ることをあきらめた。
屈みこんで、机の下から、ごそごそとティッシュペーパーの空き箱を取り出す。
「ではクジで」
ラクと言われた文化厚生であれだけ手間取るのだもの、憎まれ役の選出委員など、電話での説得はムリと、初めから諦めていたのだ。
選出委員は各クラス一名、つまり、ティッシュの空き箱には、一枚の当たりが入った、クジが入っている。
でも、クジって……。
こっそり数えてみると、ここにいるのは、十二人、そのうち四人は新役員。
「今までに何か役をやった人は、抜かします。何もやってない人、手を挙げて」
もうどうしようもない、私は手を挙げた。雪美はこの春からの転入だもの、誤魔化しようがないではないか。
同じように、肘を曲げておずおずと挙手したのが、三人。
たったの、三人。
思えば、この瞬間に、私は、悪魔に射止められてしまったのであろう。弱気になったのが、いけなかったのだ。
私は、最後だった。一枚残っていたポケモン四分の一折り紙を開いてみると、真ん中には赤く太く、「〇」と書かれていた。

最後の望みを打ち砕く、絶望のマーク。
「決まりましたね」
やけに楽しげに、小野寺さんが言った。
「それじゃ、新役員のみなさん、挨拶をヨロシク！」
クラス委員や広報委員の挨拶なんて、耳に入らなかった。
なんでよりによってこの私が、「〇」！　それもこんな救いのないポケモンの折り紙に、赤いマジックインキで、一片の羞恥心もなく図太く書かれた、堂々の赤丸！
「近藤さん？」
私のネームプレートを怪訝そうに覗き見て、小野寺さんが呼んでいる。
赤丸の書かれたポケモンの折り紙を握り締めたまま、私はふらふらと立ち上がった。
「選出委員になりました近藤です。よろしくお願いします」
やっとのことでそれだけ言うと、足の力が抜けて、再びぺたんと座り込んでしまった。

最後に、どこかに潜んでいたらしい先生が再び現れ、保護者会はお開きとなった。
ＰＴＡ役員決めと学校は関係ない、親が役員かということと、子どもの成績は、関係ありませんよ、と言いたいわけだ。
何をきれいごとを。
嫌われ役を押し付けられたんだから、少しは雪美を優遇してもらうくらい、当然のことじゃないか。
他のみんな、解放されたように小さなグループに集まり、おしゃべりに興じている。
小野寺さんに、フルネームと電話番号を紙に書かされた。
「雪美ちゃんのお母さんの名前を、書いてください」
小野寺さんはそう言った。

強制、と言ってもいいだろう。すごくむかついて、私は乱暴な字で、自分の名前を書いた。
小野寺さんは、私のネームプレートを見つめ、怪訝そうな顔をしたが、何も言わなかった。
そもそも電話番号などというものは、個人情報の最たるものであろう。保護法とかなんとかいっても、ＰＴＡにかなうものではない。
ああ、あ、引き受けちゃった。
ここへ来るまでは、そんなこと、考えてもいなかったのに。そもそも、役員決めのことさえ知らなかった。
呆然として教室を出る。下駄箱の前で、何か言いたげな風情の女性を目の端で垣間見えたが、話しかけてこなかったので、そのまま靴を履いて外へ出た。知らない人だし、心情的に、私は人さまに構っている場合ではなかったのだ。
夢遊病者のような足取りで家にたどり着くと、玄関ドアの前の人工芝の上に、赤い真新しいランドセルが投げ出してあった。美弥のだ。朝、さんざん言ったのに、馬鹿なあの子は、鍵を忘れて行ったのだ。
ＰＴＡ役員ともなれば、子どもを置いて外へ出る機会も多くなろう。その間、一体誰が、二人の子ども達のめんどうをみてくれるというのか。
アメリカあたりでは、ローティーンの子どもを一人で家においておくだけで通報されるというではないか。
格安のナニーや学生の子守りアルバイトが普及していない日本では、主婦は、なかなか外へは出れないというのに。
特に専業主婦は。
といって、子どもが学校へ行っている時間に会合があったら、働いているお母さん方が、絶対に出席しないに違いない。放課後の保護者会の出席率ですら、あの惨状だ。当然、全部、専業主婦が背負い込むことになる。
みんな、同じように学校に子どもを預けているというのに、そん

なの、不公平だ。
働いているお母さん方は、自分たちだけの家計の為に働いているのであろう。それならなぜ私が、クジに当たって、その人たちの分まで、「厄」を背負い込まなければならないのか。
でも、夜や休日の会合に出席することは、子どもたちを一人でみている現状では、無理というものだ。
鍵を開けていると、どこでその音を聞きつけたものか、美弥がとんで現れた。
「あら、美弥、お帰りなさい。鍵、忘れたでしょ」
私の声は、とがっていたに違いない。
ああ、子どもにやつあたり。
子どもの為のＰＴＡのことで、肝心の子どもに、やつあたり。
「うん。ごめんなさい」
足を組み替え、組み換え、もじょもじょしている。
案の定、音を立てて鍵が開くやいなや、私の脇をすり抜け、家の中へ、トイレの中へと、走り込んでいった。
私は、ダイニングの椅子に崩れこんだ。
ものすごく、疲れている。さすがに、年齢を感じる。
真紀子に電話を掛けようか。
働く母親の彼女は、私の愚痴なぞ、へ、とも思わないに違いない。専業主婦はヒマなんでしょ、引き受けて当然、働くお母さん方の分まで頑張りなさい、などと言われたら、マジでキレてしまうだろう。
美弥がトイレから出てきた。
「美弥、ＰＴＡの役員になっちゃった……」
私は思わず口にしていた。
「役員って？」
何かを感じるのか、美弥は私に擦り寄ってくる。
「係、のようなもの、かな？」
「美弥も、係になったよ」
「そう。何の？」

「新聞係。やりたい人、って先生が言うから、美弥、はいっ、って、手を挙げたの」
「自分から進んで手を挙げたの？」
私は目を丸くした。こっちはなんとか逃れようと懸命だったというのに、いったい、誰に似たのだ？
「そうだよ。自分から手をあげて、美弥、新聞係になったの」
「……」
「大丈夫だよ」
何が大丈夫なのかわからないが、美弥は、私の背中を、とんとんと優しく叩いた。
「きっとうまくいくよ」
「でも、他のお母さんたち、協力してくれるかなあ。保護者会とか、あんまり来てくれないんだよ？　どうやって、お願い事とか、すればいい？」
何もわからない子にこんな相談を、と思ったが、この時の私には、美弥が、まるで神さまのように思えたのだ。ちょうど、近所の神社の神さまに相談するような気易さで、私は美弥の前に愚痴を並べた。
「みんなで選んだ係なのに、協力してくれなかったら、ひどいよねぇ」
「もし、失敗したら、どうしよう」
「失敗したら、責任とって辞めますっ！　って辞めちゃえばいいんだよ」
「責任とって辞めます……」
こんな小さな子に、目からウロコを落とされたような気がした。
そうだ。クジに当たっただけなのだ。何も自分から志願してなったわけではない。
しかし、子どもを学校に人質に取られている、という弱みがある。ＰＴＡにおける失敗が、どれほど学校の迷惑になるかわからないが、役員を辞めます、などと言えば、雪美ちゃんの保護者は困ったちゃん、くらいの噂が、先生方の耳に届くかもしれない。

そしたら、雪美の立場は、美弥の立場は、どうなる？
中学受験のことはよくわからないけど、中学受験を目ざしている雪美の立場は？
「美弥や雪美に、迷惑がかからないかな？」
「へーきだよ。美弥は、へーき」
「でも、おねえちゃんは？　受験に不利な材料になっちゃうかも」
「そんなこと、あるわけないじゃん」
もちろん、、美弥のご託宣には、何の根拠もない。しかし、私は、気持ちが軽くなるのを感じた。
「そうだよね。いざとなったら、夜逃げしちゃえばいいんだもの。美弥、転校しよう」
「え？　それはちょっと……」
困惑したように、いいよどんだ。
入学したばかりで、懸命に慣れようとしている学校だもの、酷な言い方だったかと、少し反省した。
たかがＰＴＡ。引っ越しは極端だが、所詮は、狭い学区のなかの評判ではないか。
「大丈夫だから」
美弥が、私のお腹のまわりに手を回し、ぎゅっと抱きしめた。
この子達が味方になってくれるなら、何があっても頑張れる。
複雑な、お母さん達の人間関係の中で、嫌われ役になることだって、できる気がする。
誰に嫌われたって、私には、美弥や雪美がついていてくれるのだから。
あたたかい美弥の体温を体で感じ、日なた臭い頭の匂いをすぐ鼻の下で嗅ぎながら、私は、そう感じた。
それどころではない状況だが、私は、幸福だった。

第一章の3

第一章の3

そして、記念すべき第一回の委員会。

十二人出席すべきところ、集まったのは六人だった。その中で、私は、見事、アミダを引き当てた。

何のアミダかって？　もちろん、委員長を決めるアミダである。

そんな大切なものを、アミダで決めるな！

委員長は、学校や本部との連絡係とかいうことで、本部役員が主催する部会にも出席しなければならない。ヒラの役員よりずっと拘束時間が長い。しかも、仕事の多くが、平日の昼間にある。

フルタイムで働いていたら、まず、こなせまい。

でもだからって、なんで私が。

出席している他の五人のお母さん方は、眉間に立て筋が寄っていたり、口の脇がぐっと下がっていたりして、なんだか、怖い。

はっきり言って、みんな、フケてる。フケた女たちが、互いに厄を押し付けあっている。

怖い。

この人たちとうまくやっていく自信は、私には、ない。

出席したからいけなかったのだ。十二分の一ならまだしも、六分の一の確率だ。

シカトすればよかった。

正直者が馬鹿をみる。

アミダから目を上げた旧委員長から、私が委員長に「決まった」と告げられたとき、マジで窓から飛び降りてやろうかと思った。でも、ここが二階なのを思い出して、やめた。二階から飛び降りても、痛いだけである。

発作的に死んでしまいたいと思ったのは、長い人生、後にも先に

も、この時だけである。
　どうすりゃいいんだ。怒りと困惑、うまく厄を逃れやがった、いや、サボッて出てこない母親たちへの憎しみが、胸のなかでとぐろを巻いて、目の前がすうーっと暗くなった。
　気がつくと、何だか固い布団の上に横になっていた。
「あ、大丈夫ですか？」
優しい声が降ってくる。
「え？」
慌てて起き上がろうとすると、そっと押さえつけられた。
「急に起きるのは良くないですよ。じっとしてて」
汚れた天井、薄いグリーンの布を張った衝立、そこに貼られた視力検査のCの字。
　私は、小学校の保健室のパイプベッドの上に寝かされていた。
「気がつきました？」
さっきとは違う、さばさばした声がして、衝立の向こうから、女が顔を出す。日に焼けた顔にソバカスの浮いた、健康そうな顔だ。
　白衣を着ている。保健の先生だ。
　ということは……。
　アミダで委員長を引き当てたショックで、ひっくり返ったということか。
　子どもたちを預けている学校で、なんという失態！
「ごめんなさい」
とりあえず、謝る。ここは学校だ。保健室は、保護者の為にあるのではない。
「どこか苦しかったり痛かったりするとこ、あります？」
「いいえ、特に」
「起き上がれます？」
「もう、大丈夫です。お見苦しいところをお見せしてしまって、申し訳ありません」
「持病はあります？」

保健の先生が、改まった口調で聞いてきた。
「何にもありませんよ。全くの健康体です」
きっぱりと言ってやった。
「健康診断とか、受けてます？」
「もちろん」
本当は、主婦になってから、健診など受けたことがないのだが、真実を語るかどうかは、プライバシーの問題だ。
それに、健康診断なんか受けると、かえって具合が悪くなる。年が多くなると、検査項目も増えて、ヘンなものを飲まされたり、血をどっさり採られたり、かえって、体に悪い。
「軽い貧血だと思うんですけど、学校では、病院にお連れすることができないんです。あとで、ちゃんと病院に行ってくださいね」
はいはいと、私は言った。
会議があるとかで、保健の先生は、慌しく部屋を出て行った。私はゆっくり起き上がり、帰り支度を始めた。
「ショック性の貧血ですよねえ」
低いぼそぼそとした、でも、決して聞き苦しくない声が言った。
保健室で気がついた時、大丈夫か、と、最初に気遣ってくれた声だ。
振り向くと、ボタンダウンのブラウスに、柄の入ったグレー系のフレアスカートと、まあ一言でいえば、かなり野暮ったいなりの母親が立っていた。
「あれ……」
どこかで会ったことがあるような……。
「雪美ちゃんのクラスに娘がいます。それと、美弥ちゃんのクラスに息子が」
思い出した。美弥のクラスの保護者会の後、下駄箱のそばで、何か話しかけたそうにしていた母親だ。
あまりに影が薄かったので、つい、無視してしまったのだった。
「もしかして、ずっと付き添っていてくれたの？」

「ええ。私も、さっきの選出委員会にいたんですけど……。おねえちゃんのクラスでは、近藤さんが引き受けて下さったけど、弟の拓也のクラスでクジに当たってしまって……」
私は必死に、さきほどの委員会出席者を思い出そうとした。
　私の他に、確か五人の人がアミダを引いた筈。みんな、青筋立てたおっかない顔をしていたような気がするけど、その中に、こんな、おどおどした、気の弱そうな人がいたかな？
「委員長なんて、ほんと、大変ですよねえ。何にもわからないのに、いきなり、ですもんねえ」
「本当ですよ。私、この学校の正門から中に入ったのは、四月の美弥の入学式に来たのが初めてで、今日で、まだ三度目なんですよ！」
「普通は、そんなもんですよ。役員にでもならない限り、保護者会と参観以外は、来ませんもの。呼び出されるまで学校に来ない人もいるし」
私は、真紀子が、子どもの担任の顔も知らないと豪語していたことを思い出し、ため息をついた。
　働いていたら、ＰＴＡなど、論外であろう。それはわかるが……。
　今日の委員会の出席率の悪さから考えると、実質的な活動は、委員長であるこの私が、一身に引き受けるという最悪のシナリオが脳裏を駆け抜け、思わず愚痴が口をついて出た。
「会議とか学校との連絡係とか、拘束時間も長いのに、アミダクジで決めるなんて、無茶苦茶です」
「本当にねえ。働いている方には、絶対、無理ですよね。昼間の評議会に出られませんもん」
「評議会？」
「ええ。平日の昼間にあるそうですよ。本部と各委員会の情報交換会なんですけど、半日くらい話し合ってることもあるそうです」
「ひぇー」
「大変ですよね。私でよかったら、何でも手伝いますから」
「ありがとう」

私は思わず、名も知らぬ、この若いお母さんの手を握り締めそうになった。
「私、角館しのぶと言います」
小さな紙を差し出す。薄いピンクを基調とした色彩で、角が丸く落としてある。
受け取って見ると、かわいらしい熊のキャラクターが微笑んでいる上に、小さな丸っこい字体で何か印刷してある。
目をすがめて読んでみると、名前とメールアドレスだった。
ママ名刺だ。噂には聞いていたが、これが、ママ名刺！
「名前で呼んで下さいね。ユイママ・タクママと呼ばれるのも、苗字で呼ばれるのも、なんだかあんまり私らしくない気がして」
「あ、そうよね。私の名前は、信子。一年間、よろしくお願いします。せいいっぱい、頑張ります」
「頑張るのは、駄目」
しのぶさんはいたずらっぽく微笑んだ。
「こういうのは、楽しまなくては」
私は、この自分より若い母親に、なにやら、非常にのびのびとした、ふてぶてしさを感じた。明るくて、滅多なことでは潰されないふてぶてしさだ。
だが、不安が消えたわけではない。
「わからないことだらけなの。いろいろ、教えて下さいね」
「私でわかることなら」
「何から始めたらいいのかな」
「宝くじを買うの」
「宝くじ？」
「今日のこの、くじ運の良さを生かすのよ。グリーンジャンボには早いけど、スクラッチはつまらないし……サッカーくじがいいわ！
今ならビッグが買えるから、近いうちに、ぜひ！」
「……どうやって買えばいいの？」
私も、やぶれかぶれになって言った。

「コンビニに機械があるから」
「だって、あんなの、使ったことないし」
最近は、通販の支払いもコンビニ払いだ。気がつくと、どのコンビニエンスストアにも、入り口近くに、支払機がひっそりと置かれていたりする。
しかし私は、夫が稼いでくれた大切なお金を、機械ごときに吸い取られるのがなんとも心もとなく、店員さんを通して支払えるものでなければ、通販の利用も諦めている。
「一緒に行ってあげる！」
自らはくじを外れた嬉しさからだろう、しのぶさんは躁状態だった。私は曖昧に頷いた。
でも、まあ、悪い人ではなさそうだ。ずっと私に付き添っていてくれたことだし、委員の仕事も手伝うと言ってくれていることだし。
厄はついたが、ママ友ができそうな気がして、嬉しくなった。
「落ち込んでいても仕方がないもんね。これもご縁よね。たった一年だし、来年の今頃は、もう、笑っているのよね」
自ら進んで新聞係を引き受けた美弥のことを思いながら、私は言った。あの子たちの評判を貶めるようなことは、金輪際、できない。
しのぶさんは、怪訝そうな顔をした。
「雪美パパがなさるのではないの？」
「さあ。主人とは別居中だし。あ、離婚しているわけではないのよ」
悪い噂がたったら、子ども達がかわいそうだ。でも、わざわざ言うほどのことではなかったかもしれない。私は慌てて付け加えた。
「それにこの学校は、ＰＴＡ会長もお母さんよね」
学校によっては、父親が会長を買って出るところもある。関西に住んでいる知人の娘が通っていた学校が、そうだった。
商店会の主だった人とか、市議会議員だとか、そういう人が積極的に引き受けてくれると言っていた。
だが、さきほどの委員会で聞いた、会長はじめ役員の名前は、みな女名前だった。

「私がやるしかないわ」
「偉い、信子さん、偉すぎる。でも、あまり無理しない方が」
「するわけないじゃない。ＰＴＡなんて、しょせんボランティアだもの」
そもそもＰＴＡは、戦後、進駐軍が残したものだと聞いたことがある。
それが、実に五十年以上もの間、旧態依然として、母親たちを縛り続けてきたのだ。
アホらしいといえば、アホらしい。
「それにしても、クジ引きとはね。来ない人勝ちよね」
私の心を代弁するようにしのぶさんは言った。
「ＰＴＡなんてなくしちゃえばいいのに」

その晩、塾から帰ってきた雪美をつかまえて、私は言った。
「あなたのクラスから出たＰＴＡ役員でね、私、委員長になっちゃったよ」
「へ？　ばっかじゃない？」
「馬鹿って……」
私はむっとした。
「しょうがないじゃない、アミダで当たっちゃったんだから」
「でも、ババァは、そうゆうの、好きでしょ？」
「そういうの、って、どういうのよ？」
「井戸端会議。主婦の集まり。いつも、道でくちゃくちゃしゃべってるじゃん。知ってる？　セキショっていうんだよ」
「セキショ？」
「だから、関所。おばさんたちが集まって、しゃべくってると、怖くてそばを通れないってこと」
「あはは、うまいこと、言うのね。誰が言ったの？」
「だれでもいいじゃん」

口を尖らせ、そっぽを向く。
「でも、あいにくと、ＰＴＡって、おしゃべりだけじゃないのよ。私には、次の本部役員を選ぶという仕事があるのよ」
「はんっ！」
雪美は鼻でせせら笑った。
「そんなの仕事じゃないよ。昼間、学校に来ているお母さんなんて、みんな、ヒマなんだよ。会社行ってないからヒマで、だから、つい、子どもの学校に来ちゃうんだ。そいで、自分の子どものクラスを覗き込んだりして。廊下から、うちのクラスを覗き込んでるオバサン、いっぱいいるよ」
口を歪め、憎々しげに、雪美は言い募る。まるで真紀子が乗り移ったかのようだ。
「子どものストーカーだよね。迷惑してたよ、お母さんが教室を覗き込んでいた子」
何と言って反論したらいいのか、わからない。
「とにかく、私のクラスを覗き込むのだけは、やめてよね。覗き込まれたら、恥ずかしいから。学校の中で見かけても、絶対、話しかけてこないで」
「あなたのクラスになんか行かないわよ。見かけたって、知らん顔してる」
私は、ヒマじゃないし。
「それと、受け持ちの先生に、私のことを話しに行かないで。私は私でやるから、邪魔をしないでほしいの」
「それって、どういう……」
雪美は、頭の悪い奴だと言わんばかりに、眉をひそめた。
「私は、私立中学を受験するの。塾の勉強だけで手いっぱいなのよ」
「塾ばかりというのも、どうかしらねえ」
「今は、その話じゃないのっ！」
雪美は、私をぐっとにらみつけた。
「私が言いたいのは、学校の人間関係にまで、手が回らない、って

こと。ＰＴＡで学校に来たついでに、先生に話しかけて、もし、ニラマレるようなことがあったら、学校、行くのやめるからね」
「へっ？」
私の言動が原因で、雪美が、学校の先生にニラマレる？
そんなこと、あり？
「先生だけじゃなくって、友だちにムシされたら、もう、死んでやるから！」
「簡単に、死ぬなんて、言ってはダメ」
とりあえず私は言ったが、雪美は意に介した様子は全くなかった。
ふんと、肩を聳やかし、自室に消えてしまった。
ばたんと、ドアが閉まる音を聞きながら、私は、自分の言動が、雪美の学校生活に与える影響について、考えずにはいられなかった。
すっかり忘れていたが、ＰＴＡの「Ｔ」は、「ｔｅａｃｈｅｒ」の略だ。保護者と児童の向こうには、常に、学校と先生がいる。
先生だって人間なのだから、保護者として、くれぐれも、失礼のないように接しなければならない。それは、肝に銘じている。
しかし、私も人間。
先生だって人間。
そして、保護者と先生の利害が対立することは、往々にしてよくあることなのだ。
その場合……。
はっきり言って、私は、学校の先生の人格というものを信じていない。
私のような保護者は、なるべく学校へ行かない方がいい。先生の目に触れないに如くはないのだ。
それなのに、このような、「厄」を背負い込んでしまって。
まず第一に、私は、雪美と美弥の利益を考えよう。
そう、心に決めた。
ＰＴＡの役目なぞ、二の次だ。
もし万が一、私の言動が元で（何の言動かは、予測不能だが）、

先生の不興を買い、雪美や美弥にヤツアタリ的な累が及ぶようなら、即、二人を連れて、この地域から逃亡してやろうと、私は決意した。
そのくらいの覚悟がなければ、ＰＴＡなど、引き受けられない。
クジで当たったのだが。

テーブルの載せられた盆ざるから、柔らかな匂いが、全てのストレスを包み込むように、甘く立ち上っている。
「いい匂い……」
さっそく、美弥が寄ってきた。
盆ざるいっぱいに広げられた梅の実を見て、目を丸くする。
「何、してるの？」
「梅干を漬けるの。梅の、ヘタを取っているのよ」
私は、美弥の目の前で、黄色く熟した梅の実を手に取り、竹串で突いて、ヘタを取ってみせた。
「美弥も、やる！」
「手を洗っておいで。石鹸で、きれいにね」
慌てて、私は言った。
ヘタは散らかすし、手洗いが充分でないと、土用の天日干しまでに、かびてしまうことがある。
本当は、子どもにはご遠慮願いたいところだが、手伝おうというせっかくの志、拒絶はできない。
洗面所で勢いよく水の音がし、すぐに美弥が戻ってきた。
見よう見まねで、ヘタを掻き出す。
「こうでいい？」
「うん、上手」
ちゃんと、実に傷がつかないようにやっている。
今年の梅は、大きくて、ふっくらとしている。豊作だ。
今日は、十キロほど漬ける。折をみて、もう一度あの八百屋へ行って、今度は、叩き売りサービス価格で、もう五キロほど買ってこ

よう。
馥郁とした香りに包まれて、幸せな気持ちで考える。
女と子ども二人の家庭で、十五キロの梅は、多すぎるかな。朝は、時にはパン食もするし、小学校ではお弁当はいらないし。
もちろん子どもは、梅焼酎など飲まない。
「ねえ、パパに届けてあげようか」
私は美弥に問いかける。
近藤は、同じ市内に住んでいる。会社の帰りは随分遅いが、毎日ちゃんと帰ってはいるようだ。朝ごはんくらいは、家で食べているだろう。
「いらないよ」
父親に代わって、美弥が即答する。寄り目になって、夢中で梅のヘタを取っている。
「なんで。紀州梅だよ。ブランドだよ」
もちろん、塩は、赤穂の甘塩。八月初旬にできあがる梅干は、プラダもヴィトンもない我が家の、唯一のブランド品である。
「あの人には、わかんないって。高い梅だってこと」
したり顔で美弥は言う。
姉の口真似をしている。
いや、そんなに高いわけではない。梅は、旬を迎え、一キロ七百円を切らなければ、決して手を出さないし、塩だって、一キロ三百円ほどだ。
「そんなこと言わないで、美弥、持ってってあげなよ」
あの家へ行くのは、私は、ちょっと、遠慮したい。しかし、近藤にも、たまには、子ども達に会う機会を設けてあげないと。
「パパ、しょっぱいもの、嫌いだよ。子どもなの」
美弥は、済まして言う。恐らく、自分たちがこの冬までいたマンションに行くのが、億劫なのだろう。
「じゃ、雪美にでも、頼もうかな……」
実現不可能と思いつつ、言うだけ言ってみる。本音のところ、進路

について、父親と、今一度、相談してほしかったのだ。
だが、雪美は、近藤のマンションへは行かないだろう。
近藤は、あまり子ども達のめんどうを見る男ではなかった。
近藤が大丈夫というので、子どもたちのことは任せていたが、家の中は荒れ放題、学校のプリントはランドセルを出た途端に行方不明、持ち物は、しょっちゅう忘れるといったありさまだった。
雪美は、学校でいじめられていた、らしかった。
この年齢の子どもらは、潔癖で、残忍だ。お風呂に毎日入り、洗濯したての服を着ていかなくては、クサイと言われる。
そういえば、店で売られている洗剤は、フローラルとかなんとか、かなり強い匂いがつけられている。匂いのないものを探すのが、難しいくらいだ。
私なぞは、よその家の干してある洗濯物から、洗剤の匂いが漂ってくると、吐き気を感じる。
同じ洗剤でも、その家によって、微妙に匂いが違う。それはつまり、その家族独自の体臭が幽かに残っているからだ。
私の鼻は、人工的な香料と人間臭さの混ざり合いの奥に、恐怖の匂いを感じる。自分の体の匂いを、クサイと言われる恐怖。清潔ではないと言われ、仲間はずれにされる恐怖。
人工的な香料の放つ匂いの底には、洗いたてを強調しなければならない強迫観念が秘められている。
洗濯も風呂も（立てるのも、掃除するのも）面倒くさがる近藤のもとで、雪美は、まあ、いじめられても仕方のない状態ではあったろう。
一方、美弥は、保育園に預けられていた。
保育園では、プロの手によるきちんとしたケアが受けられると、近藤は強調していた。
素人の専業主婦に育てられるより、よっぽど手厚いケアが受けられる、と。
確かに、離乳食からオムツ外しに至るまで、最近の保育園は、あ

らゆる「サポート」をしてくれる、と聞いた。まあ、そうなんだろう。

しかし、子どもにも、いろんな種類がある。

必ずしも、外注ＯＫ、という子ばかりではない筈だ。

近藤と暮らしていた頃の、美弥のパンツをよく覚えている。

マンションを訪ねて洗濯をしようとすると、美弥のパンツは、必ず、乾いたおしっこや、こすれたような黄色いウンチで汚れていたものだ。

オムツが取れるのは、早い子だった。二歳になるやならずで、もう、とれていた。

それなのに、パンツが汚れてしまう。

目立つお漏らしではないから、誰にも気づかれず、パンツを替えてもらえない。

いつだって、美弥は、にこにこしていた。保育園からの連絡帳には、明るい、よく笑う子です、と書かれていた。

その笑顔の影で、美弥のパンツは汚れていたのだ。

保母さんにうまく甘えることができず、不安で緊張して、でも、弱音は吐かず、向日葵のように明るく笑いながら、少しずつ、美弥のパンツは汚れていった。

だから私が、二人を引き取った。近藤なんかに任せておけるか。

繰り返すが、子どもには、種類があるのだ。外で保育されるのに向かない子も、たしかに、ある。そういう子も、親の都合で、一律に「預けられる」。

子どもを預けることの問題点は、保育時間延長や、病児保育など、親の立場で語られる。

だがしかし、預けられるのは苦手、内弁慶、など、子どもの特性で語られることは、めったにない。

なんか、おかしくないか？

私と一緒に暮らすようになって、美弥の下着は、もう、付けおき洗いが必要なほど汚れることはなくなった。

雪美も、同じ目標を持つ友達と出会い、毎日いやがらずに学校へ通っている。新しい学校で、いじめとはすっかり縁が切れた。
近藤は不本意だろうが、私も無職の専業主婦の身で、多少強引であったかとも思うが、これでよかったと思っている。
ついでだから言っておこう。
私は、夫とは別居しているが、離婚はしていない。
だから、専業主婦。
この言葉、今では、あまりいい言葉ではない。だが、たとえヒマな主婦の手なぐさみと言われても、家族に国産・無添加の梅干を食べさせることができる専業主婦という身分に、私は、誇りをもっている。
「おいしそう。食べていい？」
美弥が、うずうずしている。
私は笑った。
「生の梅を食べると、お腹を壊すよ」
「ふうん」
美弥は、何とも解せない表情で、熟した梅の実を見ている。オレンジ色に熟した梅は、切ないほど甘い匂いを惜しげもなく放つ。
「ちょっとなら？　ねえ、ちょっとだけなら？」
物欲しそうに、こちらの顔色を伺っている。
「じゃ、なめてごらん」
私は、熟して傷がついた梅の皮を軽くむいて、美弥に差し出した。
美弥は、恐る恐る舌を出し、思い切ったように、ぺろっ、となめる。
「わっ、すっぱい！」
「だって、梅干って、すっぱいじゃん」
笑いながら、私は言った。
甘い香りにすっぱい味。
不思議そうな美弥の顔を見ていると、笑いがこみあげてきた。
幸せな時間。

自分の時間は極端に減ってしまったが、ＰＴＡなど、厄介ごとはしょいこんでしまったが、やっぱり、一緒に暮らせてよかった。
それにしても、一五キロの梅干は、さすがに、少し、多いかもしれない。
真紀子にでも送ってやるか。
自分たちだけで食べるのはもったいないほどの、いい梅だし。
現在フランスにいるキャリアウーマンには、船便で送るしかないのが、面倒だが。

思ったとおり、第一回の委員会は、参加者が全体の三分の一しかいなかった。
前日の夕方、私は、次から次へとかかってくる「仕事が忙しくって、出られませぇーん」という電話の応対に忙しく、夕食の時間が四十分も遅れてしまった。
いちいち、電話してくるな！　と思った。
あんたらがいくら仕事をしたって、それはみんな、自分らの生活の為だろ。あんたらの分まで、ＰＴＡやってるこっちには、一銭も入ってこないんだよ。
こっちだって、時間を削ってるんだ。無報酬で。それどころか、その分の時間は、働けないというのに。
自分の割り当てくらい、きちんとこなせ。
子どもを、学校に預けっぱなしにするな！
気がつくと、心の中でののしっていた。
まあ、実際に口に出すわけにはいかないし。
それにしても、いけない。つい、言葉が悪くなってしまった。身についた教養が、泣こうというもの。
しかし、自分大好き、楽が一番、のサボリ魔の母親たちには、これくらいの下品な言葉でないと、伝わらない気がする。
こんな人たちと、一年間、つきあわされるのかと思うと、ぞっと

する。
委員会なんて、いらないのでは、と、心の底から思ったのだが、前任者から引き継いだノートには、次の仕事が書かれていた。
そして、次の委員会の日、参加者は、なんと、私としのぶさんの二人きりだった。
つまり、そういうことなのだ。

第二章の1

第二章

ばすん、ばすん。

夕方、六時近くになると、異様な音が、近隣に響き渡る。

初めて聞こえた時、何かと思って外へ飛び出してしまった。人が、凶器を持って殴り合う音にも聞こえたのだ。

幸い、といっていいのかどうか、それは、隣のうちの子どもが、自分の頭よりもでかいサッカーボールを、塀に、蹴り当てている音だった。

うちの塀に。

ちっとも、楽しそうでない。こわばった顔をしている。

遊んでいるのか？

ボールは時折、うちの庭にも転がり込む。

すると子どもは、表情一つ変えずに敷地内に入り込み、ボールを拾って出て行った。

ええと。

お庭に立っている、その家の人に、何の断りもなしですか？　ボールは、お隣さんの、足元に転がっているのですよ？

隣は共働きで、三十代の夫婦に、小学校三年生くらいの子どもが一人。この家の旦那は、私が挨拶しても顎をしゃくるだけで、挨拶を返してこない。

奥さんの方も似たようなもので、隣人を露骨に避けている。私が庭に出ている時に通りかかっても、決して声を掛けてこない。

隣家を中古で買って、わりと最近引っ越してきた家族なのだが、なんだか、近所づきあいを避けているみたいだ。

子どもは、美弥たちと同じ小学校で、学童保育に通っている。

シュンスケ、という名前だ。「シュンスケッ！」という母親の罵

声が、夜間や休日によく聞こえてくる。
シュンスケは、学童から帰ると、誰もいない家には入らずに、家の前の道路で、力任せに、ボールを蹴りつけている。
それにしてもすごい音だ。虫歯に響くような、低くドスのきいた音。
薄暗い中、まるで何か別のものを蹴っているかのように、ボールを蹴り飛ばしている男の子は、少し、怖い。
それが、夜になっても鳴り止まない。
バスッ、ドカッ。
音の調子が激しくなる。
そっと覗いてみると、母親が一緒になって、ボールを蹴っていた。
髪を長く伸ばし、流行りなのだろうか、下着が透けるような化繊の上っ張りをきているのが、灯火の下に来た時に見えた。
服装だけ見ると、結婚前の娘にも見える。
しかし、あちらを向いた時の背中の盛り上がり具合と、透ける上着からふてぶてしくのぞいている二の腕は、まさしく中年の女そのものだった。
中年女を観賞していても不愉快なので、雨戸を閉める。
わざと音をたてて閉める。
こちらが不快を感じていると、わかってくれれば、御の字だ。だが、そもそもそういう感性のある人なら、暗くなってから、道路でボール遊びなどしまい。
やがて車の音がして、二時間近く続いたボールの音は止む。
お父さんのお帰りだ。
それからすぐに、RV車が、再びエンジン音を轟かせ、出て行く。
家族そろって、ファミレスやステーキハウスに出かけているのだそうな。同じファミレスで、何度も、目撃した人がいる。
子どもが、ほぼ毎晩外食。
ま、いいんですけどね。
お母さんも働いてらっしゃるんだから。

私は専業主婦だから、何も言っちゃ、いけないのよね。
「おかぁさぁーん、おかぁ、さーん」
非難がましいような、耐え難いような、子どもの声が聞こえるのは、深夜十二時過ぎである。
当然、私は眠っているが、あまりの声の異様さに、目が覚めてしまう。
子どもは、暫く泣き続ける。
うぉーん、うぉーん、という、脅しつけるような大声だ。
低く、こちらの体にねばりついてくるような泣き声。
もう、ちょっと、なんでもいいから、お母さん、なんとかしてあげてよ。
再び眠れず、心の中で毒づく。
子どもは、子どもの泣き声に鈍感なのか、美弥も雪美も、目を覚まさない。だから、私も苦情は言わないのだが、いくら暑いからといって、せめて、窓くらい閉められないものだろうか。
この辺の家は古いので、防音は完璧ではない。隣の窓とうちの窓は二〜三メートルほどの幅で向かい合っているので、どちらかの窓が開いていると、家の中の音は丸聞こえだ。
そのことがわかっていない筈はないのだが。
「ほ〜ら〜！　どうしてくれるのよぅ！　しゅんすけっ！」
不意に、ヒステリックな女の声が、やくざの恐喝のように、闇を切り裂く。
私はため息をついて、寝返りをうつ。
あまりに子どもが泣き止まないので、少し心配になっていたところだが、どうやら、母親は在宅のようだ。
ぷつり、シュンスケの泣き声が止み、それはそれで不安なしじまが、夜を満たす。
美弥の通っているソロバン塾の先生から、電話がかかってきた。

学校の勉強は、私ももちろん見てやるが、肉親だと甘えもあって、厳しくできない。かといって、雪美のように塾へやるには、早すぎるし、反対だ。

小学校の算数なら、ソロバンができれば、たいがいなんとかなるんじゃないかしら。

そう言ったら、近所の人が、いい先生がいると教えてくれた。ソロバンだけでなく、国語や算数の文章題のワークシートもやってくれるし、美弥と同じ小学校の子が多く通っているという。

週に二回で、月五千円。

なんということだ。雪美の塾の、四分の一の月謝ではないか。

実のところ、美弥の放課後の居場所がわからなくなりつつあるようで、私には、不安だった。

姉に比べて社交的な美弥は、大勢の友だちと、日替わりで遊んでいる。特定の子と遊んでいると、その子が塾やスイミング、或いは英会話の日に、自分は、フリーになってしまうからだ。

ご存知だろうか。最近の子は、電話で相手の子とアポをとって遊ぶということを。それも、何時から何時まで遊んでその後はスイミング、入れ替わりに英会話が終わった別の子が遊びに加わるというめまぐるしさだ。

遊びの約束など、学校で済ませてくれればいいと思うのだが、この複雑さでは、一度家に帰って、母親にその日のスケジュールを確認でもしないことには、うっかり約束もできない、ということらしい。

もっとも、電話でアポをとって、時間通りに集合場所に行っても、すでにみんな別の場所へ移っていて誰もいなかった、なんてことは、日常茶飯事だ。

美弥も、よく、泣きながら帰ってくる。

行ってみたら、誰もいなかった。

おいてけぼりをくっちゃった。

大急ぎで行ったのに。約束どおり、行ったのに。

今日は、一人で、ヒマになっちゃったよ。

そう言いながら、わんわん泣き喚く。
甘いおやつの出番である。
「じゃあ、美弥もソロバン塾に行く？」
からりと揚げたパンのミミに、砂糖をたっぷりからませたおやつを、ほおばっている美弥に持ちかけると、あっさりと承諾した。
それから、感心なことに、一度だって、行きたくないと言ったことはない。よほど雨のひどい日には、私は車の運転ができないので休ませるが、それ以外は、むしろ喜々として、ソロバン教室へ行く。
新しい友達もできたようだ。
その、ソロバンの先生が、電話の向こうで、言いよどんでいる。慎重に言葉を選んでいる気配がして、私は緊張する。
「実は、美弥ちゃんが、火遊びを……」
「え？　火遊び？」
情けないことに、聞いた瞬間、まだその歳じゃない、と思っていた。
小学一年生の「火遊び」と言ったら、男女の色恋沙汰ではなく、……。
「点数の悪かったテストをですね、燃やしていたらしいんです。ご近所の方から電話があって……」
五十代後半であろう先生は、言いにくそうながらも、はっきりと言った。
首謀者は、同じソロバン塾の六年生の女の子で、途中まで帰りの方向が一緒の美弥は、その子がテストを燃やすのを、そばで眺めていたらしい。
そこを近所の人が通りかかって、幸い、先生の近所づきあいがよかったせいか、学校や警察に通報、ということにはならず、直接、先生の所へ話が行ったらしい。
まずは、よかった。
学校に連絡が行かなかったことにほっとしつつも、美弥がご迷惑をおかけしたことを丁重に謝り、厳重に注意しますと約束した。
「なにせ、家庭にいろいろある子でして……」

私が極めて低姿勢なせいか、幾分ほっとした口調で先生は言った。
失言、という感じだった。
「えっ？」
「いえ、美弥ちゃんのことではないんです。その、六年生の女の子。いろいろ家庭がごたごたしているらしいですよ」
「今では、家庭がごたごたしていない子どもの方が珍しいですよ」
私は言った。
「そ、そうですね」
慌てた様子で先生は言った。

それにしても、友だちに噛み付いたり、火遊びをしたり、美弥も、いろいろ問題を起こしてくれる子だ。姉の雪美は、そんなことはなかったのに。
うちは、おとなしい子ばかりの家系だった。内弁慶で泣き虫。まあ、美弥にも、内弁慶なところはある。それは認める。
だが、友達の親から苦情がくる、習い事の先生から注意を促される、という特質は、明らかに、わが一族とは異質なものだ。
父系からの遺伝に違いない。
これを個性と捕らえるべきか否かは微妙なところだが、間違っても、雪美と比較して非難してはならない。
すでに、ソロバンの先生にきつく言われたらしい美弥は、私が「火遊び」の件をもちだすと、しゅんとした。
「火を遊びに使っちゃ、いけないんだよね。火事になったら、大変だものね。人のおうちが燃えたり、それで誰か亡くなったりすることもあるんだよ。そしたら、美弥が一生働いても、償うことができないんだよ」
もちろん、美弥はただ、見ていただけだ。そのことはよくわかっているのだが、今後二度と、このようなことがあってはならない。
火遊びをしている子がいたら、たとえ年上の子であろうと、諌め

るくらいでなければ。
「ごめんなさい」
美弥は、素直に謝った。
わたしは、美弥を抱きしめて、あなたが悪いんじゃないんだ、と言ってやりたい衝動に駆られたが、ぐっとおさえて、怖い顔をした。
美弥を、駄目な子にしたくない。
危うい状況の犠牲者には、したくない。
「火をもてあそぶのは、とても悪いことだから、罰を与えなくちゃ、なりませんね」
わざと丁寧な口調で言う。
美弥は、はっとしたように、体をこわばらせた。
「一週間、お友だちと遊んでは、いけません。放課後は、うちで、反省してなさい」
「……」
美弥にとって、これ以上の罰はなかろう。
案の定、打ちひしがれたような顔をしている。
しかし、自分のしたことがどういうことか、小さいなりにわかっているようで、反論したりはしない。
「うん、わかった」
素直にそう言って、すごすごと引き上げていった。
少しして、私が皿を洗っていると、ふらりと現れて、ふきんで皿を拭き始めた。
本当は皿拭きは雪美の仕事で、美弥は姉が拭き終わった食器を、食器棚の所定の位置に片付ける役割なのだが、雪美は今日は、塾に行っている。
「あのさ、友達と遊んじゃいけないってさ、」
深刻な思いつめたような表情で切り出す。
「学校で遊ぶのも、ダメ？」
「学校の時間に遊ぶのはいいのよ。当たり前じゃん。でも、放課後、いつまでも遊んでいるのは、ダメ。さっさと帰ってきて、うちで、

反省する」
ついでに勉強もしてほしいものだ。
美弥は、考え深げに、大皿を拭いた。
「じゃあさ、朝早く行って遊ぶのは？」
「ダメ」
「友だちが遊びたいって言ったら？」
「今週はダメだと、断りなさい」
「あ。ヒメちゃんに、本、借りてる。返さないと」
「学校で返せばいいでしょ」
「学校に持って行っちゃ、いけないの。よけいなものを持っていくと、先生に叱られるの」
「じゃ、明日の放課後、ヒメちゃんちに行って、本だけ返していらっしゃい」
「ヒメちゃんのお母さんが、遊んでっていいよ、って言ったら？」
せっかく誘ってくださっているのだもの、ムゲにお断りするのも失礼よねえ。
仔細あり気に傾げた頭が、そう言っている。
テキもサルモノ、なかなか諦めない。小さな頭がフル回転している音が、聞こえそうだ。
「誘っていただいてありがとうございます、でも、今週いっぱい、都合が悪いんです、っておっしゃい。きちんと言うのよ」
ヒメちゃんのお母さんは、優しい。よく、子ども達を家に上げて、遊ばせて下さる。
だから、子どもとはいえ、きちんとしたおつきあいをさせていきたい。
「わかった」
泣き喚くかと思ったが、案外素直に引き下がった。
美弥は、皿を片付け終わると、テレビの前によたよたと歩いていった。
この頃のテレビ番組は、子どもが見ている時間帯でさえ、人を貶

めるような言動をする芸能人が出てきて、眉をひそめることが多い。
お笑い番組でも、私はとても、笑えない。
時計代わりにつけている、朝のニュース番組の、過剰な敬語も不愉快だ。使い方を誤っているものさえある。
犯罪者に敬語を使っているのも、実にしばしば耳にする。また、出演者に対して尊敬表現を用いるあまり、視聴者に対する敬語がなおざりになっていることも、しょっちゅうだ。
えせ上流人のサル芝居。
子どもに見せたい番組もたまにはあるが、垂れ流される害毒と比較すると、新聞の番組表も見ずに、テレビをつけることは、到底できない。
いっそのこと、テレビなど捨ててしまおうかとも思うのだが、美弥たちが、学校での話題についていけなくなるかも、と思うと、それもできない。
なにがいじめの対象になるか、わからない世の中だ。
そういうわけで、うちでは、番組を選んで、テレビをつけている。
今日は、美弥が楽しみにしている「ドラエモン」の日だ。
なんだかスリムになった感のあるドラエモンが出てきて、にぎやかな音楽が流れ出したと思ったら、美弥がまた、台所へやってきた。
床を拭いている私の脇にしゃがみこむ。
「ねえ。美弥のこと好き？」
私は思わず姿勢を正した。
「もちろん。大好きだよ」
「むぎゅーっ、してくれる？」
私は、ぞうきんがけで汚れた両手を気にしつつ、美弥の柔らかい体を、むぎゅーっ、とした。

激しいサイレンの音が、遠くから近づいてくる。
大通りを、消防車が走っている。

しかし、大通りを曲がったこの辺の火事ではなかろう。
私は寝返りをうち、まどろみの中に落ちていった。
かちゃ。
玄関のドアの開く音が聞こえた気がした。
はっとして、跳ね起きた。
誰？　泥棒？　まさか。
胸がどきどきする。
この家に、男手はない。
ベッドから降りて、廊下へ滑り出た。
電気はつけない。
子ども達の部屋のドアはきっちりしまっていた。
古い家の床板がきしまないように、そっと玄関へ向かう。
玄関には、常夜灯が灯されている。
その、薄オレンジ色の明かりに照らされて立っていたのは、美弥だった。
「どうしたの？」
我知らず、大きな声になっていた。
美弥は、ぼうっとして、こちらを見た。
「トイレ……」
「トイレは、あっちでしょ。今、玄関のドアが開く音がしなかった？」
「しなかったよ」
美弥は眠そうだ。
気のせいだったか？
「美弥は、外に出てないよね」
「出てないよ」
ぼんやりと焦点の定まらない目をしている。
未だ、夜の闇を怖がる年齢だ。一人で、暗い部屋に入ることさえできない。
「さ、早くトイレを済ませて、お布団に入って。明日も学校でしょ

？」
美弥は、気だるそうに、頷いた。

塩原の親戚から、破竹をどっさり送ってもらった。
細身の、タケノコである。
ダンボールいっぱいつめられた破竹が、芳しい土の匂いをたて、嬉しい反面、途方に暮れた。
今、わが家は三人。そのうち二人は、小学生の子どもである。
好き嫌いのないように、野菜もいろいろ食べさせているが、いくらなんでもこの量は多すぎる。
いつもおすそ分けする隣の幸島さんと向かいの永瀬さんは、つい先日、プラムを差し上げたばかりだし。
小学生の子どもがいるので、何かとうるさいかと、これでも、気を遣っているのだ。
もっとも、雪美も美弥も、家の中で騒ぐような子じゃないけど。
しかし、永瀬さんも幸島さんも、おすそ分けがあまり度重なると、すごく遠慮なさる。そして、なんとか、お返しをしようとする。
うちは、地方に親戚がいるからいいが、もともと都内に住んでいる人には、度重なるおすそ分けは、負担になるらしい。
たとえそれが、純粋な好意であっても。
都会の生活は、誠にややこしい。
その時、ばすんばすんと、ボールをたたきつける音が聞こえてきた。
そうだ。もう一方のお隣さんにあげればいい。
お隣の酒井さんには、引越しのときに石鹸を頂いたのだが、こちらからは、何も差し上げていない。
あまり近所づきあいをしたくないようだが、小さな子どもを家に残して働いているのだもの、うちのことを、まるで無視をしているというわけでもなかろう。

雪美や美弥と、学年は違うけど、同じ小学校に通っていることだし。
破竹なら、糠でゆでるなどのアク抜きは必要ない。筍ほど、手間がかからないのだ。
働いている家庭だから、それくらいの心遣いを、私だってする。
ボールの音が、どかっ、ばかっという迫力を加えた頃、私は、破竹を何本か新聞紙でくるんで、外へ出た。
母親と息子が、息を切らせて、激しくボールを蹴りあっていた。
「こんばんはー」
ボールの音に消されないように、一際高い声をかける。
母親が、ぎょっとしたようにこちらを見た。
反射的にボールを拾い上げ、胸元で、ぎゅっと抱きしめた。
「あの、これ。今日、親戚から送ってきたんです。破竹です」
私は、新聞紙の包みを差し出した。
手を出さないので、遠慮しているのだろうと、近寄って行った。
「なんで、くれるんですか？」
酒井さんは言った。
「は？」
私には、意味が取れなかった。
しかし酒井さんは、意味を説明しようともせず、子どもを促し、家に入ってしまった。
糠がいらなくても、下ごしらえの必要な野菜をあげようとしたのがいけなかったのかしらん。
薄暗い道路に残された私は、エプロン姿で、破竹の入った包みをかかえたまま、暫く立ち尽くしていた。

第二章の2

「うーん、今の若い人はねー」
「ＰＴＡ役員互選会に前向きに参加して頂く為に」というプリントを印刷していたしのぶさんは、ため息をついた。
「若い人って、しのぶさんだって、充分若いじゃないの」
「あら、うちはお姉ちゃんがもう六年生だし、私って、結構、晩婚だったんですよ」
「……」
私は呆れてしまった。
しのぶさんは、ぺろっと舌を出した。
「年の話は、しないのよ」
田之倉さんが言った。
毎回、連絡網を回しているのだが、それでも、ＰＴＡ活動への出席者は少ない。
私としのぶさんだけのこともあり、あの時は、言葉を失った。
今日は、全家庭数の五百部を印刷しなければならないので、さすがに、他に二人、出てきてもらった。
印刷などの作業のある日は、私としのぶさんだけでは、どうにもならない。どこまで他人任せの丸投げを続けるつもりだと、業を煮やしたしのぶさんが、個人的に面識のある選出委員のお母さんを、強引に引っ張り出したのだ。
来ようと思えば、来れるじゃん。
アミダにあたったばかりに、いったいどれだけの仕事を、私はこなしていると思っているのか。
この原稿だって、ワープロも打てない私が、がりがりと鉛筆で書いたものなので、だから、時間がかかっているし、見栄えも悪い。
それの校閲を、担当の先生にお願いした。ＰＴＡの印刷物は、学校側の検閲がなければ印刷できないと、初めて知った。

担当の副校長先生が、私が校閲済み原稿を受け取りに行く日をど忘れしていたので、二度も学校へ行かなくてはならなかった。
管理職でしょ、あんた。
つまり、原稿を仕上げるのに、すごく時間と手間がかかっているのだ。
印刷くらい、手伝ってほしい。
「酒井さんって、もと、和泉町のマンションにいた酒井さんでしょ？」
もう一人の、後藤さんが言った。
「え？　知らない」
「子どもが三年生の男の子」
「シュンスケ君？」
「そうそう。あそこんち、もと、和泉町のマンションにいたのよ。引っ越したって、聞いてたけど」
「そのマンションって、分譲だったの？」
田之倉さんが聞く。
「ほら、あの、ホワイトハイツ」
「ああ、分譲じゃん。そこを売って、信子さんちの隣ってことは、中古の建売を買ったのね」
「買ったんでしょうねえ」
酒井さんには、引っ越してきた、と言われただけだ。
前に住んでた大里さんご夫婦は、ご主人の田舎へ帰ると言っていた。
家は、売りに出したと思う。
「家が二軒、買えるのか。フルタイムの共働きはお金があるわねえ」
感に堪えないといった様子で、後藤さんが言う。
「うちなんて、私がパートに出ても、家なんて、とてもとても」
「この年で、正社員なんて、もう絶対、無理だし。あつかましい、って、言われちゃう」
しのぶさんが言うと、

「ほら、また、年の話！」
田之倉さんがつっこむ。
「でもさ、ホワイトハイツって、新築で買ったんでしょ？　あそこ、まだ築四～五年ってとこよ。いくら戸建てとはいえ、それを手放して、中古に買いなおすなんて……」
「ふつうさ、家やマンションを買う時ってさ、そこに一生住もうって思うじゃん？　一生に一度の、高い買い物だもの。四～五年であっさり売ったりするかな」
「なんかあったのよ、きっと」
「ご近所トラブル！」
「わっ、こわっ！」
「そういう人達なのよ。だから信子さん、気にすること、ないって」
別に気にはしていないのだが、すごく、いやな気持ちは続いていた。
だから、つい、破竹の一件をしゃべってしまったのだ。
だが、そうか。もともと問題のある家族だったのか。だったらまあ、仕方ないか。
って？
「いやよ、そんな家族がお隣さんなんて」
「そうよねえ。いやよねえ」
「ヘンな人、多いもんねえ。あまり深くつきあわないことよ」
酒井さん一家が近隣住人を避けているのだから、こちらも、避け続ければいいということか。
それってちょと、なんだかなー。
昼間自分たちは家にいなくて、子どもの方が早く帰ってくる。
それなのに、近隣住人と避けあっていて、いいのかな。
「今はさ、近所の人から挨拶されると、何で私におはようって言うの？　って、キレる人、いるらしいよ」
「挨拶しただけで？　なんで？」
「よく知らない人から声をかけられるのって、不愉快なんだって」
「だって、近所の人じゃん。それなのに、キレるなんて」

「こわいわねー」
「こわいわよ」
なんだか、釈然としなかった。
引っ越してきた当初、酒井さんは一家は、三人そろって、石鹸をもって挨拶に見えた。
お父さんもお母さんもにこにこと微笑んでいて、ごく、普通の、幸せそうな家族に見えたのに。
だいたい、近所づきあいしたくないのなら、石鹸なんて、持ってこなければいいじゃないか。
「それはさ、うちは、幸せな家族なんですよって、言いたかったんだよ」
「へ？」
「仕事から帰ると、お母さんは、毎日、子どもと遊んでやってるって、信子さん、言ってたでしょ」
「うん。あれはあれで、うるさいんだけどね。挨拶しても返してくれないから、通りかかる時、すごくいやだし、暗くなってもやめないし」
だから、うちの雨戸をばしんと閉めてやるのだ、とまでは言わなかった。
「つまりさ、私は、働いているけど、子どもと遊んでやってる、いいお母さんなんですよーって、言いたいわけ。自立した、でも、子どものことを思っている立派な母親です、って、吹聴してるわけよ」
「はあー。深いわー」
「っつーか、むしろ、イタイ」
「イタイ？」
「小学校三年の男の子でしょ？　もう、お母さんとなんか遊ばないよ。少なくとも、毎日なんて、ぜぇーったい、遊ばない」
「それはそうね。親よりも友だちと一緒にいた方が楽しい年ごろだもの」
田之倉さんと後藤さんは、合意しあった。

「それにねぇー、夜中に、子どもの泣き声がするのよ」
私はつつましい性格だが、人の口に戸はたてられない、と言うではないか。
「泣き声？　シュンスケ君の？」
聞き捨てならぬとばかりに、田之倉さんが聞き返す。
「おかあさーん、おかあさーんって、二時間くらい、泣き続けてたこともあったわよ。窓、開けっ放しだから、こっちも起きちゃって」
聞き耳を立てているわけではないと、さり気なくアピールする。
「やだ。お母さん、いないのかしら」
「いるわよ。シュンスケーッ、って怒鳴り声が聞こえるもの。あのお母さん、六時には帰ってくるわよ」
「六時に家に着けるなんて、うらやましい」
しのぶさんがため息をついた。
「私が履歴書を送った会社は、片道一時間以上かかるところばかりよ。みんな、落ちたけど」
「そんなとこに勤めちゃだめだよ」
田之倉さんがあっさり言った。しのぶさんは、一瞬、いやな顔をしたが、すぐに笑顔に戻った。
「ねえ、まさか、虐待とか、そんなの、ないよね」
潜めた声で、後藤さんが言った。
「毎晩外食ってのは？　虐待？」
「やだ、信子さん。それは虐待じゃなくて、ゼイタク」
「そっか。とりあえずちゃんと食べさせてるわけね。それなら安心」
「外食かあ。うちは随分、してないなあ。毎晩できるのか。いいなあ、共働きって」
「パートや派遣じゃなくってね」
「ほんとよねえ」
印刷機の調子はよく、半日の予定が、二時間ほどで刷り上った。
作業は快調だった。
四人いれば、さすがに早い。しのぶさんと二人では、半日では終

わらない。
　次は、刷り上ったプリントを、各クラスごとに仕分けなくてはならない。
「あのー」
今まで勢いよくしゃべっていたくせに、妙におしとやかに田之倉さんが言う。
「私、下の子を迎えにいかなくっちゃならないから……」
「あ、私もちょっと仕事が……」
慌てたように後藤さんが言う。
　下の子がいたり仕事があったりするのなら、仕方がない。
「ごくろうさま」
気持ちよく聞こえるように、私は言った。
　二人は、ほっとしたような顔をして、バッグをひっつかみ、あっというまに姿を消した。
　「まったく、信子さんも人がいいんだから」
下を向いて、プリントの束を数えながら、しのぶさんが言う。
「だって、仕事や子育てじゃ、仕方がないでしょ」
「後藤さんのパートは午前中。前にそう言って、午前中にあった委員会を休んだでしょ。今は午後の三時よ。それに、下の子ってさぁ、田之倉さん、子どもが四人、いるんだよ？　お迎えなら、今頃、上のお姉ちゃんが帰ってるって」
「四人……」
世の中、少子化少子化と、かまびすしいが、これが意外と、三人四人という、子持ちの母がいる。
「そういうお母さんに限って、ナントカ委員長とか、本部役員とか、大変な役は逃げ切るんだよね」
「なんで？」
四人もいたら、クジを引く確率もそれだけ高くなるんじゃないか？
「上の子の時はさ、下の子のお世話でできません、って言えばいいし、下の子の時は、上の子の受験で大変っ！　て言うの」

「受験って、なんで、母が大変なの？」
「知らない。とにかく、そう言うの」
「ずるい……」
思わずつぶやいてしまった。
学校に、子どもが何人もお世話になっているのなら、その分、余計に、無料ボランティアにいそしんでもいいんじゃないのか？
「受験でなくても、下の子の時にやりますから、って言うの。そして、末っ子の時に、今までのテクニックを駆使して逃げ切ればいいんだから、楽勝でしょ。かわいそうなのは、何も知らない一人っ子の親よ」
私たちが印刷している「ＰＴＡ役員互選会に前向きに参加して頂く為に」には、本部役員を逃げる場合の権利について書かれている。
本人が重大な病気の場合（医師の診断書提出）
本人が妊娠中の場合
未就園児がいる場合
ちなみに仕事は口実にならない。
介護は、「義親の介護をしながらでも、ＰＴＡ役員をやり遂げた！」と豪語した人が過去にいたとかで、これも口実にはならない。
こんなに厳格に定められているのに、逃げ切るテクニックがあるというのか。
「信子さんは、真面目ねえ」
しのぶさんはため息をつく。
「要するに、クジ引きの日に、来ないのよ」
「あっ、そうか」
私はそれで、失敗したというのに。
本部役員を決める互選会に出席する人は、各学年各クラスごとに選出される。
つまり、クジ引きだ。
ここを休んでしまえば、クジを主催する旧役員が、休んだ人に「当たりました」と伝える煩雑さを嫌がるので、その場に来た人だけ

のクジ引きになる。
そうだった。私はそれで、「互選委員」などというものになり、さらに、「委員長」に祭り上げられているんだった。
さすが、子沢山母さん。パートをしながら、巧みに厄をよけ、たくましく子育てを続けている。
ただ、私にしてみれば、どうしても、踏みつけにされているような気がしてならない。
日本には、繁栄し続ける家系と、淘汰されつつある家系が存在するのではないか。
「それにしても、医師の診断書とか、妊娠とか、これ、プライバシーよねえ」
自分が書いたプリントをしげしげ眺めながら、思わず言ってしまった。
これは、年度の数字を変えただけの、昨年度の丸写しだ。
初めてやるのだもの、前年度をそっくりそのまま踏襲するのは、やむをえない。
しかし、実は、書きながら、強烈な違和感を覚えていたのだ。
婦人科の病気なら人に言いにくいし、精神を病んでいたらもっとであろう。死病であったらどうするのか。診断書を見せられた方も、困るのではないか。
妊娠も、垂れ下がるくらい腹が突き出てきたらまるわかりだが、二ヶ月、三ヶ月の、気持ちも体も不安定な時期に、いわば家族だけでひっそりと見守っている大事な秘密を、なぜ、アカの他人に打ち明けなければならないのか。
無事に生まれればいい。もし、流産や死産であったら、周りの人が、不用意に話題にしないという信頼があるのか。
「つまりそれだけ、要領よく、逃げる人が多いってことよ」
諦めきったように、しのぶさんは言った。
「でも、実際の話、これだけ活動があれば、フルタイムで働いている親は無理よねえ」

キャリアウーマンで働く母親、真紀子の顔が頭に浮かぶ。
先日、電話で、互選委員の委員長になった話をしたのだ。
真紀子は、激怒していた。
なぜ、そんなものを引き受けたのか。
ヒマな専業主婦の寄り合いではないか。仲良しランチでも、食べるつもりか。
そう言われて、つい、私がやることだから、いいじゃないのっ！と怒ってしまった。
まあ、私自身も、ＰＴＡなどなくてもいいんじゃないか、と、強く思ってはいるのだが。
パートや専業主婦など、時間のある人でさえ、なんとか口実をつけて、さぼろうとするし。
みんながそんなにやりたくないのなら、ＰＴＡなんてなくしてしまえばいいのに。
そう思いつつも、「ヒマな専業主婦の寄り合い」と言われれば、やっぱり、反発する。
何度も言うようだが、私は、専業主婦ではあるが、ヒマではない。
今は、一円でも安いラッキョウを求めて、地元のスーパーを渡り歩いている。
もちろん、伝統の健康食、ラッキョウ漬けを作る為だ。
ＰＴＡは、私がやるんだから、と言うと、真紀子は、急におとなしくなったっけ。
「私も、働きたいと思うのよねぇ」
不意に、しのぶさんが、小さい声で言った。そういえば、さっきも、履歴書がどうのこうのと言ってたっけ。
「ずっと正社員で働いていたの。でも、子どもが生まれて、会社を辞めてしまって……。だから、働き続けているお母さんに、すごく、コンプレックスを感じてるの」
「何言ってるの。主婦も、立派な仕事よ」
「でもさ、結局、自分の、自分の家族の為のことしかやってないわ

けじゃん」
「下の、タクちゃん、まだ、一年生でしょ。焦ることないって」
私は、後藤さんのように、そんなとこに勤めちゃダメ、なんて、差し出がましい口は利かない。
育ちがいいのだ。
しのぶさんは、言い募る。
「お金も、欲しいのよ。仕事を辞めてから、私、自分の服は、二千円以上のもの、買ってない。この頃は、千円以下よ。今に、子どもの教育にもお金がかかるようになるし。働きたい、って、強く思う」
そういえば、働こうとしても、正社員の口はない、とも言っていた。
「でも、だからといって、子どもに淋しい思いをさせてまで、半端な仕事はしたくないのよ。パートの収入なんて、子どもを預けたり、食費なんかで、消えちゃうもん。働く生活を維持する為に稼ぐのは、なんか、違うと思う」
しのぶさんは、主婦が外に出れば、クリーニングや外食、買ってきた惣菜など、勢い、家事の外注が増えると説明した。
また、小学校の間であれば、親が勉強をみてやることも可能だが、親に時間がなくなれば、これも、塾という外注産業に頼らざるをえない。
子どもがいない時間にひと稼ぎ、と思っても、所詮は、主婦不在の家事育児の外注分を賄うので精一杯なのだ。
「近く、働き出すの？」
「まさか。こんなオバサン、どこも雇ってくれはしないわよ。履歴書出しても、断り状も来ないわ」
「それはひどいわね。失礼よ」
「そうね。でも、交通費使って、会う前から、断るつもりの面接も、行きたくないよ。それに……」
しのぶさんは、笑った。疲れたような、薄い笑みだった。
「私はやっぱり、家族には、時間が経てば、ちゃんと腐る物を食べさせたいの。お父さんのお弁当も作ってあげたいし」

「腐る？　食べ物なら、当たり前じゃない？」
「ところが、そうじゃないのよね」
しのぶさんは、遠い目をした。
「たとえば、化学調味料は腐らないでしょ？」
「あっ、そうか……」
「レトルト食品なんかは、封を切らない限り、変質はしても腐りはしない。冷凍食品も、凍っている間は、大丈夫」
「そういえば、家で作った炒め物は、次の日には水っぽくなっているけど、買ってきたお惣菜は、モノによっては、何日も味が変わらないわよね」
それに感心した日もあったが、よく考えれば気持ち悪い。味も、なんとなくなじまないし。
　しのぶさんはうなずいた。
「防腐剤が入っているお惣菜もあるよ。あのさ、防腐剤って、食べ物？　栄養補助食品だって腐らなくて、薬局で売ってるよね。薬局って、薬を売るとこだよね、食べ物じゃなく」
「だけどさ。腐るって、いやよね。食中毒も怖いし。あ。でも、腐りかけの桃はおいしい。じゅくじゅくの柿も、黒くなったバナナも」
「腐るって、当たり前のことじゃん？　生き物は、最後は腐って、土にかえるんだよ。だから、命の元になる食べ物は、腐るものでなきゃ、いけないの」
「はあ。確かに、レトルトやサプリばかり食べさせるのは心配よね」
「そういうモノを食べ続けても、平気な人もいるでしょ、そりゃ、中には。でも、私は、自分の家族には、食べさせたくない。少なくとも、毎日は」
　珍しく饒舌になって、しのぶさんは続けた。
「食べることって、生きる楽しみでしょ？　家族には、おいしいものを食べさせてあげたいよ。知り合いのキャリアママにね、すごい料理をする人がいてね。とにかくレンジでチンチンチン、肉や魚はトースターで焼く、トースターは洗わず、数ヶ月で使い捨てね。

煮物の基本は、めんつゆ。もちろん、化学調味料ばりばりのやつ。
そりゃ、仕事、頑張ってるんだなあ、その上家事もって、たいへんだなあ、って思うけど、私は、そんなモノを家族に食べさせるのは、絶対、いや」
「おだしは、煮干やこんぶでとりたいわよね」
私も同調した。
しのぶさんは、なおも言う。
「私ね、電子レンジって、嫌い。火を使わない調理って、生理的になじまなくて」
「あれね。どういう仕組みなのかしらね」
「細胞の水の分子をぶつけあって、摩擦熱を引き出すのよ」
「細胞……？　分子……？」
「化学変化よ。そのキャリアママはね、野菜をゆでる代わりに、レンジでチンするんだって」
あまり使ってはいないのだが、うちにも電子レンジはある。しかし、解凍すれば、外側は変色しても中は半分凍っていたなんて、日常茶飯事だし、温めすぎて、ラップを外す時にやけどをしたこともある。
どうにも、私にはうまく使いこなせない。
「あのね、私、思うのよ」
真紀子の怒りを思いつつも、私は、ゆっくりと口にした。
「世の中には、きちんと家事をする女性にしかわからない真理があるって」
「家事をする女性にしかわからない真理？　家事と女性を結びつけた時点で、信子さん、NGだよ」
「いいのよ。真理だもの」
「強引ね。ま、いいや。教えてよ」
「それはね、家族のことを一生懸命考えて、料理する人にしか、わからないのよ」
「なにそれ。ずるい」
「今にわかるから。それは多分、代々の女に、ずっと受け継がれて

きたものだと思うの」
「母から娘へ？」
「女から女へ、よ」
「石垣りんの詩みたいね」
「なにそれ？」
今度は私が、きょとんとする番だった。
「『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』っていう。昔、国語の教科書に載ってたの。でも今は、女と料理を結び付けているっていうんで、教科書には載せなくなったみたいよ」
「つまらない国よね」
「滅びるわね」
私としのぶさんは、顔を見合わせて、くすっと笑った。

夜、また、火事があった
早寝なので私は熟睡していた。
迫り来る消防車のサイレンがけたたましくクレッシェンドしてくる。さすがに、私も飛び起きた。
とりあえず部屋を覗くと、寝ているのは、雪美だけだった。
美弥の部屋は、もぬけの殻だった。
狭い家の、どこにも、美弥はいなかった。
心臓を冷たい手で、ぎゅっと、？まれたような感じがした。
外へ探しに行こうとしていると、かちゃっ、とドアが開いて、美弥が帰ってきた。
「美弥……」
安堵のあまり、息が詰まり、私は一度、言葉をとぎらせた。
呼吸を整える必要があった。
「美弥、あなた、こんな時間に、どこへ行っていたの？」
「消防車、見てた」
「どこで？　お庭の外へ出たの？」

「ううん。門のところで、消防車、見てた」
嘘を言っている様子は感じられなかった。
何の罪悪感も、その小さな体からは、漂ってこない。
本当に、門のところで消防車を見ていたのだろう。
或いは、どこかから帰ってきて、そして、立ち止まって、振り返って。
そう、消防車を見ていたのは、嘘偽りなく、門の中なのだ。
その一点で、真実を語っていた。
その一点のみ。
美弥は、眠そうにあくびをした。

美弥が歯磨きに立った後、また、朝ごはんを抜こうとしている雪美を、なんとかダイニングテーブルの椅子に座らせて、聞いてみた。
「夜、美弥が部屋を抜け出してるの、知ってる？」
めんどくさそうに、パンにイチゴジャムを塗る雪美の手が、ぴたりと止まった。
「知らない」
知らない？　ふん。
「ゆうべ、外へ出てたみたいなのよ」
「消防車がうるさかったからじゃない」
「前にも、そういうこと、あったのよ」
「そう？」
「そう？　って、同じ二階にいるのに、何も気がつかないの？　夜遅くまで、勉強してるんでしょ？」
雪美は、こちらをじろりと見ると、すぐに目をそらせた。
こうなってしまったら、もう、駄目だ。氷のような沈黙が、テーブルの向こうの、小六女子から、漂ってくる。
「妹が夜、外へ出て行くのよ。心配じゃないの？」
私は言い募る。

変質者に会ったら？
誘拐犯に会ったら？
通り魔に出会ってしまったら！
この物騒な世の中で、子ども達は、常に危険と隣りあわせなのだ。
だが、雪美にとって私は、すでに、透明人間となってしまったようだ。
姿だけでなく、声さえも消えた、透明人間。
それって、いないのと同じことだ。
だが、私はまだ、ここにいる。
私は息をすうーっ、と吸って、語調を変えた。
「どうでもいいけど、雪美、そのジャムには、お砂糖を三〇〇グラム、入れたのよ。それを、あなたたちが二人で、三日で食べちゃうわけだから、単純に計算して、一人一日、五じゅ……」
ジャム付き食パンの最後の一切れが、すでに口の中に消えているのを確認して、言ってやった。
「ごちそうさま」
雪美は、言葉の途中で私を遮った。
まるで、全部聞いたら、それだけの砂糖が即、脂肪に変わってしまう、とでもいいたそうな、性急さだった。
そして、私を、じろりと睨む。
目から殺人ビームが飛んできそうな感じだったが、律儀にごちそうさまを言うところが、子どもっぽくて、おかしかった。
「美弥のことは、ほっといてやれよ、ババァ」
「だから、ババァじゃなくて……」
雪美が、私のことを「ババァ」と呼ぶのは、仕方のないことだと思っている。私が、悪かったのだ。面と向かって「ババァ」と呼ばれると、彼女が幼い日のことが思い出され、辛くなる。
捨て台詞を残して、雪美は、食卓を立った。

二人をゴミ捨てに送り出した後、乾さんに、ばったりとあった。
乾さんのところには、中学生の息子さんが二人いる。
子ども達もそうだが、乾さん自身も、いつも気持ちよく挨拶して下さる。隣の酒井さんをはじめ、道端で会っても、知らん顔を決め込む人が多い中で、常に安らぎの光を放っている、貴重な人だ。
だから、乾さんと会えると、嬉しくてしようがない。
元気よく挨拶すると、乾さんの方から、ゆうべの火事の話を持ちかけてきた。
ちょっと、強調しておくが、乾さんから、この話を始めたのだ。
何が言いたいのかというと、私は、忙しい人を、誰彼構わず、強引に引き止めて、べちゃくちゃおしゃべりしているのではない、ということだ。
先に挨拶をしたのは私だけれど、おしゃべりを始めたのは、乾さんだもんね。
もちろん、私の方だって、相槌を打つのに、やぶさかではない。
ご近所づきあいは、大切です。
乾さんは、お兄ちゃんが、火事を見に行ったと話してくれた。
家ではなく、庭に置かれた簡易倉庫が燃えただけ、ということだった。
放火、という噂だそうだ。
そして最後に、枇杷坂の、小早川さんの家だと、付け足した。
春に、美弥が噛み付いた、さとる君の家だ。

赤紫蘇の葉を、大枝からちぎり取り、たくさんの水で、じゃぶじゃぶ洗う。
刺すような新鮮な香りが、辺りいっぱいに広がる。
幸せを感じた。
冷たいきれいな水をたっぷりと使えること、これは、人類最古最上の、幸福だ。

大鍋いっぱいの湯が、ぐつぐつと煮立った。水を切った赤紫蘇の葉を放り込む。
しばらく煮ると、お湯が黒っぽい赤に染まった。
火を止めて、ぴんと張った布巾にわっと開ける。布巾に濾し取られた紫蘇の葉は、どれも緑色に変わってしまっている。
赤紫のお湯と、緑色になった、赤紫蘇の葉。
色素を、お湯に移してしまったのだ。
いつものことながら、感動する。色が、こんなにはっきりと、葉っぱからお湯へと移っていくなんて。
しかし、最大の感動は、なんと言っても、濾した赤色のお湯に、酢を注いだ瞬間だろう。
ぱっと鮮やかな紅色に変わる。まるで、マジックのよう。あるいは、不思議でしようがない、理科の実験か。
なぜこの場に、美弥か雪美、どちらかがいないのかと、残念に思う。
しかし、仕方がない。
砂糖を入れて甘く煮詰めたジュースを、冷蔵庫で、きんきんに冷やしておかなければならないから。
暑い暑いと言って、学校から帰ってきたら、すぐに、冷たい紫蘇ジュースを飲ませてあげなくちゃならないから。
濃縮した紫蘇ジュースを、冷たい水で割って……。
いけない。水を買っておくのを、忘れてた。
小学生の子どもに、水道の水をそのまま飲ませることには、抵抗がある。
ペットボトルの水に払うお金を惜しんで、水道の水を飲み続けていたら、お腹を壊してしまった過去が、私にはあることだし。
財布を？み、外に出た。
わざわざ水を買いに行かなければならないのはめんどうだけど、歩いてすぐのコンビニエンスストアで売っているのは、便利だ。
不便なんだか便利なんだか、わからない。

「あら、久しぶり！」
アイスのケースを回ったところで、急に声を掛けられ、飛び上がった。
以前、ヨガのクラスで一緒だった、武藤さんだ。
「ほーんと。この頃、会わないわねえ」
嬉しくなって、つい、高い声が出た。
だが、狭いコンビニの中だったことを思い出し、慌てて、声を潜める。
「元気だった？」
「もちろん。あなたこそ、この頃、ちっともお教室に来ないじゃない」
「いろいろ大変なのよ。子どもがいると、ね」
「そうよねえ。信子さん、偉いわ」
実は、ＰＴＡが忙しくて、ヨガの方は、すっかり足が遠のいていたのだ。
市の体育課が主催しているものだから、月謝も安いし。
しばらく同じ教室の誰彼の噂話をした後（もちろん、店の人や他のお客の迷惑にならないよう、小さな声で話し合っていた。邪魔にならぬよう、この時間には、あまり売れそうにない酒売り場に移動もしたし）、武藤さんは、一段と声を潜めて言った。
「小早川さんの火事、知ってる？」
私は、今朝、乾さんに聞いたと答えた。
「なんかね、放火らしいわよ」
「聞いたわよ。でも、物置だけなんでしょ、燃えたの。おうちは大丈夫だったってね」
「それはそうらしいけどね」
なんだか残念そうに聞こえたのは、気のせいか。
武藤さんは、いっそう、声を潜めた。
「放火犯ね、見たって」
「えっ、嘘っ！」

「本当よ。小早川さん本人から聞いたのよ」
そう言えば、武藤さんは、小早川さんと同じ町内だ。
「誰よ、犯人って？」
「それがね……」
武藤さんは意味ありげに、言葉を切った。
「子どもらしいのよ」
「子ども？　まっ！」
「旦那さんがね、火事だーっ、て叫んで、外を見たら、小学校低学年くらいの小さな人影が、逃げていくのを、夫婦揃って見たんだって」
「きっと男の子よ。そんな悪さするのは」
「さあね。小早川さんも、そこまではわからなかったみたい。でも、ほら、あそこんちも、小学生の子どもがいるでしょ？　ちょうどそれくらいの背丈だったって」
「何て子かしらね。世も末よね」
本当に、どこの餓鬼だろう。しつけの悪いどころではない。親もさぞかし、凶悪であろう。
親の背中を見て子は育つ、と、言うではないか。
基本的に、子どもに罪はないのかもしれないが、あまりに自己中心的な親や、善悪の基準が著しくズレている親に育てられた子とは、うちの子は遊ばせたくない、と思う。
親が悪い、親の顔が見たい、と言うと、親が追い詰められるとか言う馬鹿者もいるが、しかし、大のおとなである。
自分の子どものことで、精神的に追い詰められて、どうする。
武藤さんも、激しく頷いた。
「いたずらにしたって、悪質よねぇ。放火は、犯罪だもんねぇ」
「そうよ、そうよ。いくら子どもだって、人んちを燃やしちゃ、ダメよ。そもそも、子どもが火遊びなんてねぇ」
言いながら、脳の一部が、不快に反応した。
火遊び……。でも、美弥は、年上の子がテストを燃やすのを、見

ていただけだ。
火遊びをした、と言うのも、憚られる。まあ、いいとこ、上級生の遊びに巻き込まれて怒られた、といったところに過ぎない。
不快感はすぐに消えた。
で、構わず、続けた。
「火遊びはダメだ、って、それくらい、親が、日頃から、ちゃんと言っておくべきよねえ」
私は美弥に、ちゃんと言ったことだし。
武藤さんの目が、鈍く輝いた。
「実はね、うちもね、ひどい目に遭ってるのよ」
「ええっ！」
「いえね、放火じゃないけどね。ほら、チャイムを鳴らして逃げてくの」
「ああ、ピンポンダッシュ」
「ピンポンダッシュっていうの？　さすがに、子どもと暮らしている人は違うわね。言葉が豊富。そりゃ、放火に比べれば、大したことじゃないかもしれないけど、毎日やられる身としたらねえ。その親も、また……」
武藤さんは、最近の子どもの悪辣ぶりと、その親の無責任ぶりについて、ひとしきり述べ立てた。
「前にも、近くで火事があったわよね」
話がモンスターペアレントと給食費未払いにまで一般化されたところで、私は、武藤さんのおしゃべりを遮った。
さっきから、何となく、心の内に引っかかっていたのだ。
「ああ、見城さんのことね。あの、公園の裏のうちでしょ。公園で遊んでいる子らに、うるさいって、怒鳴り散らしてる、おじいさんち……。あすこんちのボヤも、同じ子どものいたずらしいわよ。警察も消防署も、そう見てるって」
「ボヤだったの」
それは残念。あやうく、そう言いそうになった。

「そう、ボヤだったの。燃えたのは、犬小屋だけだったそうよ」
公園の裏の、その家のおじいさんのことは、よく知ってる。
美弥と友だちも、公園でドッジボールをしていて、しょっちゅう、怒られているそうだ。
別に、その家にボールが入ってしまうわけではない。
ただ、うるさいと、怒られるのだそうだ。
公園で元気に遊んでいる子を怒鳴るなんて、ひょっとして、その人、変質者？
心配になって、唯一のママ友、しのぶさんにメールで聞いてみたところ、見城さんと言って、口うるさいことで名高い、近隣の有名人なんだそうだ。
公園でさえ、遊んじゃいけないって、ことなんでしょうかねぇ。
しのぶさんのメールには、淋し気なコメントが付け加えられていたが、子ども達は、あまり気にしている様子はなく（公園で遊んでいるだけなんだから、当たり前だ）、気が向くと、また、その公園へ出かけ、見城さんに怒鳴られている。
「でも、ここだけの話、あの、小早川ママだって、ソウトウのものよね」
「ほほぅ」
その件に関しては、こっちも、随分、言いたいことがある。
息子が美弥に噛まれた、と苦情を言ってきた件については、実際に、何人かの友達にしゃべって、鬱憤を晴らしたものだ。
みんな、私に同情してくれたし。
こちらの言い分を聞こうともせず、一方的に美弥のことを責め立てたんだから、当然といえば、当然。
「子ども同士のケンカで、どこを叩かれた、どこを蹴られたって、しょっちゅう、学校に苦情を言いに行ってるらしいわよ。ちっちゃな青あざくらいで、病院の時間外診療に連れて行って、医者も呆れてたらしいわ。友達の友だちに、聞いたんだけど」
「ふふん。やっぱりね」

「やっぱりねって、あなた、どういうこと？」
私は、武藤さんにも、この春の出来事を話してあげたが、さすがに、何度も話しているし、時間も経っているので、いささか、臨場感に欠けたのも、否めない。にもかかわらず、
「モンスターペアレントよね」
武藤さんは、自信たっぷりに判定を下した。

第二章の3

「ほうかまぁー！　ほうかまぁー！」

明るい昼下がり、つい、うとうとと昼寝をしてしまっていた私は、子ども達のはやし立てる声で、はっと目がさめた。

いけない。もう、一年生が帰ってくる時間だ。

ドアの鍵を開けておかなくては。

ただいま、と帰ってくる美弥が、素早く家の中に入れるように。

マンションで鍵っ子だった頃、雪美は、鍵を、いびつに曲げてしまったことがある。

鍵が開かない、開かない、というのだが、家においてある予備の鍵を使えば、スムースに開錠できる。不思議に思って、雪美の鍵を手にとると、真っ直ぐに伸びているべき箇所が、見た目にわかるほど、曲がってしまっていた。

夕方帰ってきて、ドアにとりつく雪美の姿が脳裏に浮かんだ。友だちと別れ、一刻も早く、安全で安心な家に入りたかったのだろう。あるいは、後年の美弥のように、トイレに切迫した用があったのかもしれない。

早く開けたい。

しかし、失くさないようにランドセルにぶら下げた鍵は、小さな体では、扱いづらい。片手で鍵を持ち、片手で重いランドセルを支えなくてはならない。

その上で、力任せに、鍵を開けようとする。

ランドセルから鍵を外す余裕はない。

だから、雪美の鍵は、曲がってしまったのだ。

子どもが帰宅して、家に入りたいという欲求は、それほど、強いものなのだ。

曲がった鍵を思い出すたび、もう二度と、雪美や美弥に、あんな思いをさせたくないと、心の底から、乞い願う。

しかし、今日の下校は、ちと早いのではないか？
子どもたちが、下校します、という、例の市の放送も入っていないし。
慌てて玄関に走り、鍵を開けていると、重いドアの向こうから、美弥の甲高い声が聞こえてきた。
「うるせぇー。違う（チゲー）もん。黙れ！」
続いて砂利を蹴散らす音。
敷地に入ってきた子どもらを、追い払っているようだ。
「チゲーわ。黙れ、ばーか！」
そう叫ぶ美弥の声に、僅かに、泣き声が混ざっている気がして、私はたまらず、こちらからドアを開けた。
「放火魔ぁー！」
だから、その罵りをまともに浴びた。
「チゲー、チゲー、バーカ、バーカ！　黙れぇー！」
「やーい、放火魔ぁー！　放火魔ぁー！」
私の姿を見ると、はやし立てていた男の子三人は、素早く門の外へ走り出た。
しかし、玄関先を覗き込むようにして、小憎らしい声で、がなりたてる。
「放火魔、言うなあ！」
美弥は、私に背を向けたまま、両手を握り締めて、吠えるように、叫び返している。
その小さな背中は、まるで、外部の不条理から、自分の家族と家を、守ろうとしているかのように見えた。
「放火魔ぁー！　犯罪者ぁー！」
「こらっ！」
まるで大人のような言い様に、私は、つい、かっときた。
履物をつま先につっかけ、大またで歩み寄った。男の子三人の頭を、順繰りに、ぼかすかと、殴ってやったのだ。
うちの美弥に、「犯罪者」はないでしょ。

子どもらは、何が起こったのか理解できないようだった。
家でも学校でも、体罰というものを受けたことがないのだろう。
きょとんとした顔を見合わせて、それから、一斉に私の方に顔を向けた。
私は、腰に手を当て、できうる限りの怖い顔をして、睨み返してやった。
「パーだから」
こぶしでぶったわけではない。
子どもらは頷き、回れ右をすると、背中の黒いランドセルをぱかぱかと揺らせながら、走り去っていった。
「まったく、最近の餓鬼どもときたら、なぁんて、口が悪いんでしょ」
両手を腰に当てたままつぶやき、振り返って、美弥を見ると、こちらは称賛の目で、私を見ていた。
「つ、つよい……」
「そうよ。私の大事な美弥にイジワルしたら、タダじゃ、おかないんだから」
私は得意だったが、あいつらが、親や先生に言いつけたら、ちょっと、いや、大分、まずいことになるなぁ、と、思った。
ま、いいか。
私は、私の大事なものを守っただけだ。
美弥が、家族と自分のテリトリーを、必死になって守っていたように。
「でも、美弥も、付け入られるようなスキをみせちゃ、ダメよ。スキがあるから、イジワルされるんだから」
「スキなんてないもん。美弥、放火魔、違うもん！」
「放火魔って？」
「学校でもずうーっと、美弥のことを、放火魔だって、言うの。帰りも、ずっとついてきて、放火魔、放火魔、って言うの」
「放火魔……」

「わたる君ちの火事。それと、公園のとこの家の……。あれ、美弥が火をつけたって、言うんだよ」
「まあっ！　で、先生は？」
「静かにしなさい、って言うだけ」
「それだけ？」
「それだけ」
私は、目の前が揺れて見えるほど、憤慨した。
うちの美弥が、とんでもないヌレギヌを着せられ、いじめられているというのに、先生は、静かにしろと言うだけで、知らん顔をしているというのだ。
犯罪者、とまで言われているのに。
「美弥、行きましょ」
「え？　どこに？」
「決まってるでしょ。学校よ。似鳥先生のところに行くの？」
「ええっー」
その声は、明らかに迷惑そうだった。
子どものけんかに、保護者が介入するな。
そういう気持ちが、にじんで聞こえた。
しかし、私は、放っておけなかった。
実際にあった放火事件の犯人呼ばわりするなんて、陰湿ではないか。
こういう小さな（ちっとも小さなことではないが）ことが、深刻なイジメにつながるのだ。
後から後悔しても遅い。イジメの芽は、早いうちに摘み取ってしまうに限る。
「いやなら、美弥は、おうちにいなさい。とにかく、私は、行ってくるから」
家に駆け込み、イージーパンツを脱いで、ストッキングを履いた。ストッキングを履くのは入学式以来だが、とにかく、きちんとした服装をする必要がある。生足丸出しというわけには、いかないのだ。

それからファンデーションを塗って、やや濃い目に、アイラインを引いた。
南の島の部族は、戦いに臨んで、顔に化粧を施す。
負けられない戦に備えて、入念に、口紅を選んだ。

夏休み目前の、放課後の教室で、似鳥先生は、ふんふん、と、ただ頷いている。
「ですからね、いけないと思うんです。放火魔、なんて、しかも、実際に起こった火災の放火犯人に見立てて友だちをののしるなんて」
「わかりました」
ベテラン女性教諭は一際深く頷いて、私の目線をしっかりと捉え、一言だけ請合った。
「ですが、先生も、ご存知だったんでしょ？　美弥が放火魔と言われていたこと。教室の中でも、相当からかわれていたようですから。もう少し、ご指導頂かないと、小学校一年生の女の子じゃ、やられっぱなしになっちゃいます」
「美弥ちゃんは、決して、やられっぱなしになっているような子ではありませんよ」
先生の口元が、僅かに歪んだ。笑いをこらえているようにも見える。
「とにかく、美弥ちゃんは、そんな子じゃ、ありません」
「そりゃ、うちの美弥は、言いたいことはきちんと言える子ですよ。でも、大勢に無勢、しかも、相手は男の子たちですからね。それが、うちまでくっついてきて、しつこくからかうんですよ」
「やりすぎですね。第一、宮部君の通学路は、そちら方面ではありません」
美弥をからかっていた三人組の名は、美弥から聞きだしてある。もちろん、真っ先に、先生に告げた。
「そういうことじゃ、ないんです。放火魔って、つまり、美弥を犯罪者呼ばわりするんですよ。実際に、二軒のお宅が放火されている

というこの時期に」
「二番目に放火されたお宅は、うちのクラスの小早川君の家です」
「知っています。ですから、余計、いけないと思うんです。クラスメートの家が放火されたというのに、その犯人呼ばわりするなんて」
「最初に放火されたお宅のおじいちゃんから、美弥ちゃん、よく怒られてたんですってね」
「はあ？」
「もちろん、怒られていたのは、美弥ちゃんだけではありません。公園で遊んでいて、うるさいと怒鳴られた子は大勢います。このクラスの子の半分以上は、怒られてます」
「公園で遊ぶ子にうるさいと怒鳴るなんて、その人、間違ってます」
私はきっぱりと言ってやった。
先生は、鼻白んだ顔をした。
「二軒とも、美弥ちゃんの知っている家だったのが、まずかったのかもしれませんね」
「では、クラスの子の半分以上が、放火の容疑者ということになりますね」
はっとした。
「まさか、保護者の間に、美弥が放火して歩いているという噂が立っているんじゃあ？」
言ってすぐ、それは違うだろうと、思った。もし、お母さん方の間で、そんな噂が流れたとしたら、必ず、私の耳に入ってきているはずだ。
なんのための、ＰＴＡだ、ということである。
「いいえ、そんな。絶対にありません、そんな噂は」
その点だけは、先生はきっぱりと否定した。
すると、噂は、子どもの間だけということになる。
なぜ、子ども達は、美弥のことを、放火魔などと囃したてるようになったのだろう。放火された二軒について、美弥だけが、特別な関係にあったわけではないというのに。

「子ども達には、いわれのないことで、友だちをからかうのはいけないと、よく言っておきましょう。ただ……」
先生の態度には、言おうか言うまいか、迷っている様子が伺えた。
「ただ、美弥ちゃんには、前科がありますからねえ」
「前科？」
私はきょとんとした。
「塾のテストを燃やしたという……。ご近所の方から、学校へ、電話がありました」
結局、ソロバンの先生の近所の人は、学校にも通報したのだ。
「でも、あれは……」
美弥は、六年生の女の子が、自分のテストを燃やすのを見ていただけだ。
「わかっています。けれども、その場に美弥ちゃんがいたのは、事実ですから。目撃されてますからね。それで、六年生の担任の百舌先生と私とで、その方の家へ話を伺いに行ってきました」
目撃、だって。
話を伺うって、そんなの、六年生の先生だけが行けば、良かったのではないのか？
「学校や子ども達への風当たりは、年々、強くなる一方ですのでね」
私の胸中を察したかのように、先生は口にした。私はふと、似鳥先生が、もうすぐ定年だということを思い出した。
「他にも悪い条件が重なってしまって。私も気になって、子ども達に聞き取りをしたんですが」
「悪い、条件？」
「ええ」
似鳥先生は、口をつぐんだ。言葉を選ぶような表情で、こちらの様子を伺っている。
「美弥ちゃんのことで、最近、何か、お気づきのことは、ありませんか？」

「え？　普通の子です。多少活発すぎるのかもしれないけど、よく遊んで明るい……勉強はあまりしませんが……」
何を答えればいいのだ？　この国は、謙譲の国だ。美弥のことを、あまり褒める訳にもいくまい。
客観的に見て、美弥はいい子だ。素直で明るい、今どき珍しいくらい素朴な子だ。
いや、褒めては、いけない。謙譲の美徳、謙譲の美徳……。
「火事の夜、美弥ちゃんが、夜、出歩いているのを見た、と……。こちらは、保護者からの話です。かなり遅い時間に、公園の方へふらふらと歩いていった、と……。最初に放火された見城さんの家は、公園の近くなんですよ」
「はあ」
「夜歩きは、その一回だけではないようです。何人かの方から、お電話を頂いております。まあ、確かに美弥ちゃんだと言い切ったのは、初めに電話してきた保護者の方だけでしたが、その後も、地域住民の方から、学校へと電話がありまして。姿形から、美弥ちゃんではないかと、副校長とも話していたのですよ」
まだ、はっきりしたことがわからないから、おうちの方には、お知らせしませんでしたけどね、と付け足した。
「でも、二番目の火事の夜は、美弥は、家の庭で、消防車を見ていただけなんですよ？」
「ご存知だんたんですね？　美弥ちゃんの夜歩き」
似鳥先生に言われ、私は、しまった、と思った。
悪いことをしていたわけではないし、ましてや、美弥が、放火などするわけがないのだから、別に言ってしまっても構わないのだが、世の中には、黙っていた方が得な情報というものもある。
その辺が、どうも、私にはうまく操れない。自分で言うのもなんだが、人が良すぎるのだ。
知っていることは、全部、しゃべってしまう。
「夢遊病とか夜驚症とかということもあるかもしれないけど、しば

らく様子を見ようと思っていたんです」
私は慌てて言った。
環境の変化からの一時的なものだろうから、あまり騒がずに、様子を見た方がいいと思っていたのだ。
できたら、学校には内緒にしておきたかったのだが。
似鳥先生はため息をついた。
「夜歩きとか、火遊びとか、そういう噂が、ただ何となく伝わって、今度のからかいに繋がったのだと思います。子どもたちも、理由もないのに、騒ぎ立てたりは、しないものですよ」
何となく伝わった、とは、言いようである。子ども達に聞き取り調査をしたと、言ったばかりではないか。
妙な噂の大元は、先生自身だと告白したようなものである。
先生が、なんでもないことを、大げさにして、子ども達に伝達してしまったのだ。
まるで、伝言ゲームのように。
「それにしてもね。火遊びや夜歩きをご存知でいらして、少しでも、疑念をお持ちにならなかったものですか？」
「何にですか？」
「だから、その……」
「もしかして！」
私は、卒然と悟った。
「もしかして先生、先生も、放火は美弥の仕業だと思ってません？！」
言ってから、一拍遅れて怒りがこみ上げてきた。血圧が急激に上昇したのがわかる、激しい怒りだ。
「仲良しの小早川君の家への放火も？　美弥がやったと！」
こみ上げてくる怒りの、あまりの熱さに耐え切れず、思わず立ち上がった。膝の裏がぴんと伸び、椅子ががたんと倒れた。
「先生ご自身も、そう、疑ってらっしゃるんでしょ。さっきから、ねちねち、ねちねち、遠まわしに」

「落ち着いて、落ち着いて下さい」
初めて、似鳥先生の顔から、ベテランらしさが消えた。
単なる、初老の女に見えた。
狼狽したように、先生も立ち上がる。
「美弥を侮辱されて、落ち着いてなんか、いられますか。冗談じゃない」
私の頭の中は、すでに真っ白だった。
ただ、美弥が、可哀そうでならなかった。
こんな、偏見にみちた初老の女が、担任だったなんて。
「美弥ちゃんが放火犯だなんて、それは、クラスの中の噂に過ぎず、私は、一言だって……」
「言ってるようなものじゃないですかっ！　先生がそんなんだから、クラスのみんなが、図に乗るんです。放火魔だと囃し立てられて、あの子が、どんなに辛い思いをしたか……」
怒りが、奔流のように口から迸る。
「美弥に、謝罪して下さい。あんないい子、他にいないというのに……。いいえ、先生だけではダメです。学年主任を出しなさい！校長は、どこですっ！」
私は、当然の怒りを表明し、明らかな権利を主張した。

「それじゃ、まるで、」
国際電話のせいか、妙に弱々しく、真紀子の声が届く。
結局、「学年主任」からのお詫びはなかった。似鳥先生が、学年主任だったからである。
ならば、副校長を出せ、校長はいるか、と意気込んだが、残念なことに、二人とも留守だった。
飛び出した鼻先をぽきんと折られたような気分で帰宅し、怒り覚めやらず、時差も考えずに、真紀子に電話した。
真紀子は、歩いていた。フランスとの時差は八時間だと言ってい

たから、朝の通勤の途中ででもあったのか。
真紀子の「現在」を聞いても、私の言葉の奔流は止らなかった。
ひとしきり、美弥の担任の横暴を訴えた。
フランスにいる真紀子に訴えたって、仕方がないんだけど。まあ、小なる爆発は、大なる暴発を防ぐってやつ。
「モンスター……」
言い掛けた真紀子に、私は割って入った。
「モンスターペアレントっていうのはね、小早川さんのようなオヤのことを言うのよ」
「はあ？　小早川さん？　誰、それ？」
「美弥の友達のお母さんよ。友だちとけんかして、ちょっとした擦り傷ができたと言って、診療時間外の病院に駆け込んで、学校へ怒鳴り込むようなヒト！　前に話したでしょっ！」
美弥が因縁をつけられた話は、まだホットなうちに、セビレ・オヒレをつけて話したはずだ。
聞いてなかったのか。
今回はそれに、コンビニで武藤さんから仕入れた情報が新たに加わった。
静かに聞いていた真紀子は、冷静にのたまった。
「似てるじゃない。っつーか、学校に怒鳴り込むところは、モンスターと、まおんなじ」
「あのねえ」
私は言ってやった。
「言うべきことは、ちゃんと言わないと。モンスターだかなんだか、勝手に名前つけられちゃうから言わない、なんて、相手の思うままじゃない。こちらの品位を逆手に取られて、正しいことも言わせてもらえないなんて、冗談じゃない。そんなの、姿を変えた恫喝よ。ま、子どもたちの為だったら、私は何と言われようと平気だけどね。あなただって、美弥が放火魔だなんて思わないでしょ？」
「はあぁぁぁぁー」

電話の向こうで、長いため息が聞こえた。雑踏の音が混じる。
不意に思い出した。
「あなた、通勤の途中でしょ。遅刻するわよ。第一、周りをよく見て歩かないと危ないし。そこは、安全な日本じゃ、ないんだから。もう切るわね」
言うことを言ったので、すっきりした。それで、相手の返事を待たずに、受話器を置いた。
真紀子は、キャリアウーマンだ。
インテリア関係の仕事をしているとかで、今は、フランスの事務所にいる。アンティークの家具やなんかを買い付けに、あちこち飛び回っているようだ。
仕事のことは、私には、よくわからない。だが、一年か二年、フランスでのお勤めを無事果たせれば、日本に栄転が約束されていると言っていた。
順調にキャリアを築き上げているようだ。
専業主婦の私とは、根本的に違う生き方をしている。
それなのに、うっぷんがたまると、なぜか、真紀子に電話してしまう。
今回のことなど、しのぶさんにメールしてもよかったのに。
ま、知り合って間もない人に、学校への罵詈雑言を吐き散らすより、真紀子相手に気炎を上げておいたほうが、無難ではあろう。
私だって、今回の件を、似鳥先生の退職金が危なくなるような大問題にするつもりはない。

鉄鍋七分目の油の中で、横長の春巻きが、いい色になって踊っている。
中身は、棒状に切ったかまぼこと、刻んだ韮、チーズ、それと、ピザソースだ。
ピザソースは、早めに使い切ってしまわなければいけないのが難

だが、これが、味の決め手になる。おかげで、好き嫌いの多い雪美でさえ、韮をたくさん食べる。

中身が、生でも食べられるものばかりだから、すぐに揚がる。

薄茶に、ぱりっと揚がった美人の春巻きを引き上げると、続いて、輪切りに切ったゴーヤに小麦粉をまぶしたのを、ばらばらと揚げ鍋に、落とし入れた。

信じてもらえないかもしれないが、雪美も美弥も、ゴーヤをばりばり食べる。特にこの、揚げたゴーヤに塩をふっただけの単純な料理は、大好物だ。まるでポテトチップスのような感覚で、いくらでも食べる。輪切りに切ってあるのも、子ども心にマッチするらしい。

ゴーヤは苦いと言うが、中のわたを丁寧に取り除けば、ほんの少し残った苦味も、快楽のうちというものだ。

ビールによく合う。子どもは、ビールを飲まないけど。

勢いがついて、油の温度を下げてから、茄子をまるごと放り込む。ヘタのひらひらを取って、縦に細く切れ目が入っているので、油飛びはしないし、比較的早く揚がる。

夏の揚げ物は、短時間で済ませるに如くはない。

茄子紺、という言葉の美しさに、しみじみ思いを致しながら、まだ熱いうちに、甘く煮立てただし汁に、じゅっとつける。よーく冷やして味を染ませて、これは、明日のお楽しみだ。

油物が続くようだが、今日で給食は終わり、少しは家庭でスタミナをつけても構わないだろう。

気配にはっと振り向くと、ゴーヤを山盛りに盛ったバットの前で、雪美が、にやっ、と笑った。その足元で、美弥が、春巻きを握っている。

「こらっ！」

「塾、行ってこよー！」

「雪美、おかずばかりでなくて、お握りも食べて行きなさいっ！」

「いらねーよ、ババァ」

「ほれ、塾弁！」

塾の休み時間に食べやすいように、小さく握ってラップに包んだおにぎりや、つまんで食べられるおかずをつめたお弁当のことを塾弁と言うと、私も、雪美が塾に通うようになって、初めて知った。
それにしても、こんなもので、伸び盛りの空腹を満たすなんて。
軽快にカバンを鳴らして、雪美は外へ駆け出していった。
「おいしいね」
残された美弥が、口をもごもごさせながら、悪びれずに言う。
つまみ食いは厳禁だが、揚げ物に限っては、これを許さざるを得ない。
なぜなら、揚げたてが一番おいしいわけだし、揚げている本人が、すぐに食べたいからだ。
首にかけていたタオルで汗を拭き、私も配膳台に背を向け、腰を押し付けた。
「うん、おいしいじゃない」
チーズとソースが口の中で、どろりと混ざり合う。
「おいしい、おいしい」
調子よく、美弥が次の春巻きに手を伸ばす。
小さい体で、この子の食欲は、まったく、底なしだ。
「ゴーヤになさい。夕御飯、食べられなくなっちゃうよ」
「はーい」
「あのね、美弥」
美弥は、立てた人差し指に、輪になったゴーヤを通している。
「美弥は、夜、一人でお外に出たことある？」
指を支点にぐるぐる回していたゴーヤの動きが、ぴたりと止まった。
「……ある」
「何してたのかなぁ」
「……」
「言えない？」
「……うん」
美弥の、秘密？

「危ないじゃない」
思わず、強い口調になった。
夜、と言っても、先日、私が佇んでいる美弥に気がついたのは、九時か十時頃のことだ。まだ、人通りはある。
だが、小さな女の子が一人で外へ出るのは、やはり問題ではある。
それこそ、放火魔がつかまらずにのさばり歩いているような、物騒な世の中だ。
「子どもは、夜は、外に出ちゃ、いけないのよ」
「だって、おねえちゃんは、出てるじゃん」
「雪美は、塾だから」
「塾よりも近いよ、美弥の行くところ」
「でも、夜はダメなの。危ないの」
ほんとうに、こんなに小さい子が、一人で夜歩きしていたかと思うと、今更ながらに胸がどきどきした。
「夜、むやみに出歩くもんじゃありません。夜は、用もないのに外へ出てはいけないんだから」
「コンビニは、一晩中開いてるのに？」
「あれは、おかしいの。」
「おかしいって？」
「知りません。とにかく、だめなものは、だめ。昔から、そう、決まっているの」
「だって、人、大勢歩いてるよ？」
「うちは、だめ」
「おねえちゃんはいいのに？」
「だめと言ったら、ダーメッ！」
論理破綻しながら、とにかく、だめ、を繰り返した。
美弥は、とうとう、首を縦に振らなかった。
この子は、理屈が通らなければ、納得しない、強情なところがある。
その点は、明らかに、父親似だ。

「で、夜、お外で何をしていたの？」
「言えない」
「言えない？　どうしても？」
「どうしても」
「ふうん。ま、いいや。でも、今後、一人で夜、外に出ることは、禁じます」
「ええーっ！」
「だめよ」
私はガンを飛ばす。
「大事な御用があるのよ……」
美弥が一人ごちたが、無視した。
しばらく、沈黙が訪れた。
美弥は、承知していない様子だ。
私は、ゴーヤに振った塩の味を舌に感じながら、どうしたものかと思案していた。
「ねえ、美弥に、放火した？　って、聞かないの？」
不意に、美弥が聞いてきた。
「なんで？」
心底意外に思って、私は聞き返した。
「だって、似鳥先生と話したんでしょ？　先生、美弥が放火魔だって、疑ってるよ？」
「うん、だから、文句、言ってきた」
「文句？」
「うちの美弥は、悪い子じゃありません、いい子です、って」
「そう言ったの？　似鳥先生に？」
美弥は目をいっぱいに見開いた。
「言ったよ」
他にもいろいろ言ってきたが、まあ、それは、子どもが知らなくてもいいことだ。
「いい子、って言ったの？」

「言ったよ」
美弥は、ちょっと嬉しそうだった。
それから、にわかに心配そうな顔になる。
「でも、先生に文句言って、怒られなかった？」
「怒るのは、こっちよ」
私は、美弥の両肩に手を置いた。
「いい？　自分のことを不当に悪く言う人がいたら、たとえそれが力のある人であっても、怒らなくっちゃ。かなわないとわかっていても、怒らなくっちゃ、だめ。心で思っているだけでは、誰もわかってくれないもの」
「でも、先生、怖いもん。言うことをきかないと、大変なことになる」
「だからって、放火魔と呼ばれたら、はいといいなさい、わかりました、ってわけにはいかないでしょうが」
こんなに追い詰められて。かわいそうな、美弥。
そもそも、クラスの子ども達が美弥のことを放火魔などと言い始めたのは、似鳥先生の責任である。
ソロバンの帰りに、上級生の火遊びを見ていたこと、夜、（理由は話そうとしないが、美弥には美弥の都合があるのだろう。もう少し待てば、必ず教えてくれる筈だ）、外を歩いている姿を目撃されたこと。
一と一を足して、勝手に二にしてしまったのは、似鳥先生だ。
先生がそんなんだから、敏感な子ども達が反応してしまうのだ。
おまけに、聞き取り調査をやったとか。生徒を個別に呼んで、一体、何を聞き取ったのやら。
どんどん、腹が立ってきた。
「大丈夫。私がついているから。私は、どんなことがあっても、美弥の味方だよ。世界中の人が美弥が悪いと言っても、私は、美弥の側に立つ。……そうだ。これから、似鳥先生のところに行ってこよ」
「ええっ！」
「美弥、はっきり言っちゃいなさい。私は放火魔じゃありません。

侮辱しないで下さい、って」
「ええー、それは、ちょっとー」
「侮辱しないで、は、言いにくい？　でも、放火魔じゃないって、ちゃんと先生に言おう。私が一緒に行って、証人になってあげる」
「でもー。先生にサカラッたら、どんなメに遭うか……」
かわいそうに、こんなに怯えて。
だが、これは是が非でも、私が立ち会って、美弥自身にの無実を伝えさせておかねばならない。
それも、なるべく早い方がいい。
今日だ。今、しかない。
私は時計を見上げた。
七時近い。もう、学校にはいないだろう。
私は下校時間過ぎまで学校にいたし、あの後、先生も帰宅するようなことを言っていた。
というより、自分は帰宅するから早く帰れと、言われたのだ。
とすると、御自宅へ伺うしかなかろう。
「モンスター……」。
つい先ほどの真紀子の言葉が蘇る。
学校に怒鳴り込むのがモンスターなら、先生の自宅に乗り込むのも、正真正銘のモンスターだと、真紀子は言うだろう。
まったく、腹立たしい。
そんな風にきめつけることで、保護者の権利を封じ込めることなど、できるわけがない。
子どもを守る、という当然の権利が。
子どもが侮辱されたら、学校へ怒鳴り込むくらいのことをしなくて、どうする。
私はリベラルな方だから、本当なら、学校の指導方針への口出しなど、まず、滅多にしない。
だが、謂われなく子どもが侮辱された時と、戦争を賛美するような言動があった時、誰かを差別するような指導があった時は、すみ

やかに学校へ乗り込む。
これは、義務だと考えている。
モンスターペアレントというのは、自分かわいさを、子どもへの愛情だと履き違えているバカ親のことを言うのだ。
彼らが侮辱されたと感じるのは、自分自身であって、子どもではない。
こうしたモンスターペアレンツ対策か、最近流行の個人情報保護の観点なのかは知らないが、生徒や保護者には、受け持ちの先生の住所も電話番号さえも、教えられていない。
年賀状が書けないではないか。
でも、大丈夫。私は、似鳥先生の家を知っている。
教員というものは、定年が近くなると、なぜか、自宅の近くに勤務できるものらしい。
例外に漏れず、似鳥先生も、市内に住んでいた。
となると、主婦の連絡網を甘く見てはいけない。
大分前のことだが、近所の和菓子屋で、和菓子製造のパートをしていたことがある。
薄いビニールの手袋をして、団子を串に通したり、饅頭に餡を入れて丸めたりする仕事だったのだが、とにかく家から自転車で五分という近さだったし、時間が短くて、働きやすかったのだ。
で、そこで知り合った人で、脇立さんという人がいる。娘さんが、市内の違う学校でだが、似鳥先生に受け持たれたと言っていた。脇立さんは、私とは違って、気分転換になるし、知っている人がいない方がいいと言って、家から離れた職場を選んでいたのだ。
この春、美弥が似鳥先生のクラスになったと知った時、私はすぐに、脇立さんに電話した。
「ああ、あの、男の子には甘いけど、女の子には厳しい先生ね」
脇立さんは、すぐに思い出してくれた。
そして、先生の家の場所を教えてくれたのである。
似鳥先生は、目を丸くして、玄関から出てきた。

花柄の前掛けを締めた、ごく、普通のおばさんだ。
「先生、美弥が言いたいことがあるそうです」
どうぞ、中へ、と言いかける先生を制して、私は言った。
この上、家の中へお邪魔したら、食事の支度を邪魔することになり、すると、これはＫＹで、ひょっとして、軽いモンスターにあたるのかもしれない。
たくさん、気遣いをしなければならない。ああ、めんどうな、世の中だ。
「先生、」
美弥が、思いきったように言った。
「私、放火魔じゃありません」
練習してきたように、美弥は言った。棒読みで、明らかに言わされているとわかる口調だったが、まあ、仕方あるまい。
「わかってるわよ。私は、美弥ちゃんを、信じているもの」
美弥の視線に合せるように屈んで先生は言い、その誠実な口振りに、私も、ホントかな、と、信じてもいいような気になった。
こんないたいけな、純情無垢な女の子に、まさか、嘘をついたりはしないだろう。
いやしくも、教職者なのだし。
「私、自分を信じてくれる人を裏切ったりはしない」
出し抜けに、すごくなめらかな口調で、美弥が言った。
「だって、自分を信じている人をダマすのは、すごく、カンタンなことだから。自分を信じている人をダマすことができても、そんなの、シャカイに出たら、ツウヨウしないもの」
すらすらと美弥は言い、私と似鳥先生は、思わず、顔を見合わせた。
「そ、それは、誰かが、そう、言ったの？」
「うん、おねえちゃんが」
「ええと、美弥ちゃんは、私に、嘘はついていないのよね？」
「美弥は、誰にも、嘘はつきません」
今度は自分の言葉で、美弥が答えた。

「でも、信じてもらえて、良かったねー」
明るい口調で、美弥が言う。
「当たり前じゃん、美弥は、いい子だもん」
ライトをつけて、小さな子ども用自転車を追いかけながら、私は言った。
「明日先生が、みんなにも、言ってくれるよ。もう、美弥ちゃんのこと、悪く言ってはいけませんって」
「宮部君たちも、わかってくれるかな」
「わかるさ。止める人がいれば、止まる程度の悪口だよ」
心軽く、自転車をこぐ。夏の空気が、甘く香る。
家の前まで来た時だった。
「もおおおーっ！　どーして、そーなのっ！　いっつも、そうっ！」
山姥を思わせる、猛烈な怒鳴り声がして、隣家のドアが開き、突き飛ばされるようにして、男の子が吐き出された。
「おかあさん、おかあさん、おかあさんっ！」
連呼する男の子を無視するように、ばたんと乱暴にドアが閉ざされる。
「おかあ、さーん！」
子どもの泣き声が、あたりの静寂を破る。
高い声ではなく、おおん、という、低い、地を這うような長い泣き声が、不気味だった。
泣き叫ぶ子どものいる玄関の前を、私たちの自転車は、そっと、通り過ぎた。
赤外線センサーが反応して、明かりがぱっとつく。
逃げるようにして、自分の家の敷地に入った。
「いっつもだよ」
ぼそりと美弥が言った。

「あの子、いっつも、夜、締め出されてるの」
「知らなかった……」
わが家では、暗くなると雨戸を閉じてしまう。それでも、母親の罵声と子どもの泣き声は、しょっちゅう聞こえていたが、まさか、子どもを家の外に追い出していたなんて。
しかも、夜。
「けっこう遅くまで、入れてもらえないみたいだよ」
苦労人じみた口調で、美弥が言った。

第二章の４

こちらの言いたいことを言い、担任の先生に、美弥は、とても素直ないい子だと納得させることができたので、私は、いい気分だった。

美弥を寝かせ、雪美が塾から帰るのを待っている間、懸案だった、ズボンの裾上げにとりかかった。

最近のお母さんたちは、子どもにジャストサイズの服を買う、と言うが、私は、そんなムダは、許さない。

子どもは大きくなるもの。ズボンはすぐに短くなるのだから、大きめのを買って、裾を上げ、二シーズンくらいははかせる。

大きめの衣類を買うのは、子どもが、このサイズになるまで、無事に育てという、願掛けみたいなものだ。小さくなったら、また、大きめの服を買う。

モッタイナイ、とか、エコ、とかカタカナ言葉で言って、ナイロン製の、安っぽいぺらぺらした袋をマイバッグとかなんとか呼ぶ前に、子どもに服を買うなら、針と糸を持って、大きめのを買え、と言いたい。

言葉だけではない、昔からの、知恵だ。

一手間かけて、初めて、物は生きる。

この暑さで、さすがに裁縫箱を開ける気力が出なかったが、今夜は、さわやかに、針仕事ができそうだ。

玄関が開いた。

「おかえりぃ！」

私は叫んだ。

時刻は九時二十分。こんな時間まで、小学生が塾通い。

絶対間違っている。

塾なんか、やめてしまえ。

そう、思うのだが、何分、本人が行きたがっているのだから、仕

方がない。
塾に行きたがる。塾で、勉強をしたがる。
昼間、学校へ行った後で。
疲れ果てていても、追い立てられるように、塾へ行き、しかもそれを、自分の意志だと言い通す。
つまり、日本の教育の何かが、根本的に間違っている、ということだ。
「タダイマ」
幽かに聞こえた気がするが、定かではない。
足音は、子ども部屋に向かう。
すぐに、戻ってきた。
「美弥がいない」
「えっ！」
頭がフリーズしてしまった。
「部屋にいない」
雪美が繰り返す。
私は慌てて美弥の部屋へと走った。
布団には寝た跡があり、けれども、美弥の姿はなかった。
「こっち……」
雪美が呼んだ。階段を駆け下りると、夕食の後、確かに閉めた筈の、勝手口のドアの鍵が開いている。
「お風呂の時ね……」
美弥を寝かせ（たと思い）、お風呂に入っていた時。
禁じられたので、そうーっと裏口から出て行く、パジャマ姿の小さな女の子の姿が、幻となって見えた。
「なんてこと……。あれほど、夜は、外へ出るなって言ったのに」
「美弥は、嘘をつかない。人を騙したりしない」
鋭く、雪美が言った。
美弥は、私を騙したわけじゃない。
そもそも、あの子は、「もう、夜、一人で外へ出ません」などと

は、ちらっとも、言ってはいない。
美弥は、やっぱり、嘘などつかなかった。
納得しなかっただけだ。
「そうよ。美弥は、決して、私を騙さない」
「ふうん。信じてるんだ」
雪美は、一瞬、微妙な表情をした。だが、すっかりうろたえていた私には、それが何を意味するのか、考える余裕は、なかった。
雪美が玄関へ向かう。
「ど、どこへ行くの？」
「美弥のところ」
「え？」
「ついてこないの？」
「行く！　行くわよ！」
私は慌てて、サンダルをつっかけた。
雪美が向かったのは、タイヤ公園だった。
遊んでいるとうるさいとどなるおじさんのいる公園へ行く途中の、小さな公園だ。
コンセプトは、「タイヤ」だ。大人の背丈ほどのタイヤが半分地中に埋まって立っており、あちこちに、転がして遊ぶのに適当な大きさのタイヤが置いてある。
今の季節、スズカケの木が、こんもりと葉を茂らせていた。
風雨を遮る、大きな木の根元にタイヤが一つ、横倒しに置かれており、その上に覆いかぶさるようにして、美弥はいた。
「美弥！」
思わず叫んで、走った。
美弥は、ぼおーっとした声で言った。
「あれ……。なんで来たの？」
「なんでって。夜、一人で出歩いちゃいけないって、あれほど言ったでしょうがっ！」
情けないことに、第一声が、叱責だった。

それほど、心配していたのだ。
私は、まだまだ、修業が足りない。
「おねえちゃん」
私の後ろにいた雪美に気がついた。
「教えちゃったんだね」
「そうね」
すまして雪美が答えた。
美弥の腹の下と思しき辺りから、小さな毛の塊がもぞもぞ出てきた。
情けない声で、みゃー、と鳴いた。
私は、悲鳴をあげた。
「バレちゃった。あーあ、あした、ユリちゃんとヒメちゃんに、怒られちゃうよ」
「ネコ、ネコ！」
「だから、家に連れて来れなかったんだよ」
ため息をつきながら、美弥は言った。
そう、私は、猫アレルギーなのだ。同じ家に、この種族がいるだけで、発熱する。
だが、夜の公園で大騒ぎをするわけにはいかない。ぐっと自制し、美弥の話を聞いた。ところどころ、雪美が補う。
子猫は、捨て猫だった。ユリちゃんの家の裏に捨てられていたらしい。ユリちゃんの家に遊びに行った時、ユリちゃん、ヒメちゃん、美弥の三人が見つけた。
ユリちゃんちは、ネコを飼ってるんだよ、ネコ好きと見込まれたんだね、と、雪美が付け加えた。
でも、ユリちゃんちでは、これ以上ネコを飼うわけにはいかない。ヒメちゃんの家には、小さな妹がいて、やはり、ダメ。
うち？　うちも、ダメに決まってる。
子猫は、ひとりでエサを食べられるくらいの月齢で、飼い猫だったものか、人懐こかった。

そこで、三人で飼うことにしたのだ。
スズカケの木が雨風を遮ってくれる、この、公園で。
エサは、ユリちゃんが持ち出してくれた。
「昼間はいいの。三人でお世話してあげられるから。でも、夜はね、ユリちゃんもヒメちゃんも、都合が悪いの」
「あなただって、都合が悪いのよ！」
「へ？」
「だからぁ、子どもは、夜は、みんな都合が悪いのっ！　一人で外へ出てはいけないのっ！」
「でも、夜、一人だったら、みゅうが悲しむよ。寂しがりなんだ、この子」
「ネコは夜行性だからいいの！」
「明日さあ、ポスター描いてあげるよ。ネコ差し上げますって。明日なら塾、休みだから。ユリちゃんとヒメちゃん、うちに来れる？」
雪美が口を出した。
「うん、予定、聞いてみる」
どうせ、毎日、一緒に遊んでいるのだろうに、美弥は、重々しく言った。
「明日がダメなら、木曜日ね」
雪美が自分のスケジュールの調整をし、アポの指定をする。
何度もみゅうに別れを惜しむ美弥を連れて、公園を後にした。
ネコの毛がついていそうで、今度ばかりは、美弥と手をつなぐのがためらわれた。なかなか歩き出さない妹の手を、雪美が握った。
「人に、あげちゃうのかぁー」
未練がましく美弥が言う。
「保健所に連れてかれるより、マシじゃない」
「そうだよね」
「近くなら、会いにいけるよ」
「いい人がみつかるといいね」

それでも、うちで飼いたい、とは、最後まで言わなかった。
姉妹が仲良く会話している姿を見るのは、久しぶりのような気がした。
雪美が塾に通い出してからというもの、二人の年齢差が、ぐんと開いてしまったような気がしてならなかった。
雪美だけが、大人の世界に足を踏み入れてしまったような……。
それが、こうして同じ話を話している。
夜だからだろうか。手をつないで歩いているからだろうか。
塾に、行く必要があるのか？　中学受験なんて、本当に雪美の為になるのか？
少女を、無理やり、大人へと追いやっているような気がする。
月夜の白い道を、私は二人から少し離れて、歩いた。
静かな、不思議な時間だった。
大通りをわき道に逸れた時だった。
ぱたぱたと軽い足音がしたと思ったら、姉妹と私の間を、通り魔のように、小さな影が駆け抜けていった。
私の脇にぶつかり、ぼんやり歩いていた私は、たまらずよろけた。
「サカイ・シュンスケ……」
雪美が、隣家の家の子の名を、フルネームでつぶやく。
少年は、ふりむきもせず、弾丸のように走り去っていった。
私たち三人は、ひどくぼんやりとして、それを見送っていた。
「おおい！」
大人の乱れた足音が背後から響いてきた。革靴の硬い音だ。
「こっちに、男の子がこなかったか？」
息を切らせながら、スーツ姿の中年の男が聞いた。汗にまみれ、ネクタイは横になびいている。
中年……。しかし、走れる程度には若いのだろう。
「え？」
すぐに答えるわけにはいかない。変質者かもしれないではないか。
変質者がサングラスや黒っぽい服の、いかにもそれらしい格好を

しているわけではない、ということは、子ども安全教室の常識だ。
乱れたスーツ姿というのは、いかにも、怪しい。
三つ揃った不審顔を見て、男は、鼻白んだようだ。
「放火だよ。うちの庭に忍び込んで、カミさんが声を掛けたら、ライターと、テンプラ油をしみこませたテッィシュを落として逃げてった」
男は息を整え、再び、尋ねた。
「こっちに来なかったか？」
「来なかったわよ、ねえ」
なんだかひどく間の抜けた声で、私は答えていた。
「変だな。大通りを折れた所までは見てたんだがな」
「でも、こっちじゃないわね」
「誰も来てない」
「うん」
私が言うと、雪美と美弥が唱和した。
「もう一本先の道を折れたんじゃない？　あそこ、街灯がなくて暗いから」
私がダメ押しをした。
男は、切らした息の合間に、不審か、不平か、ぐちゃぐちゃと独り言のように言って、立ち去っていった。
知らないと言われても、話に応じてもらえたお礼を、きちんと言える大人だったら、私たちの返事も、違ったかもね。
よろよろと歩き去る背中を見ながら、心の中で、そう、つぶやいた。
申し合わせたように、三人、歩き出した。
「放火魔、シュンスケだったんだね」
ぽつんと、美弥が言った。
「なんで、あんたたち、さっきの男の人に、誰も来なかった、なんて言ったの？」
雪美も美弥も、シュンスケと仲がいいわけではない。隣に住みなが

ら、互いに無視し合っているという感じだ。
学年も性別も違うし、小さい頃から一緒だったというわけでもないから、仕方のないところであろう。
互いの家は、付き合いがないし。
実のところ、私自身にも、なぜシュンスケを逃がしたか、わからなかった。
スーツ男への反発、というわけではない。あの程度の無礼な男は、掃いて捨てるほどいる。
専業主婦をやっていると。
シュンスケという子のことだって、かばってやりたいほど、よく知っているわけではない。
ただ、母親によく叱られている、ということだけは、知っている。
強いて言えば、その母親への反感だろうか。
両手に、酒井さんの家に持っていった破竹の包みの感触を、まざまざと思い出す。
「なんでくれるんですか？」
投げつけられた奥さんの言葉。丁寧語以外の敬語を一切排した、下賤な言い回し。
毎朝、八時に車で出勤し、午後六時に帰宅する、酒井ママ。
あまり、楽しそうには見えない。
専業主婦の私は、確かに、目障りな存在であろう。
夜中でも開いたままの窓から、それが、びしびしと伝わってくる。
その夫は夫で、毎朝、ゴミ捨ての途中、うちの前に、煙草を投げ捨てていく。
共働きの余裕を見せ付けたいのだろう、フィルターまでまだ、だいぶ残っているのが、踏みにじられて落ちている。
毎朝同じ銘柄の煙草を家の前で発見し、私は悩んでいた。
つまり、同じ人が、毎朝落としていくわけで、不気味なことこの上もない。
誰かの恨みでも買ったのか？

すると、酒井夫がうちの前に煙草を投げ捨てる現場を目撃したと、上橋さんが教えてくれた。
上橋さんは、主婦仲間で、一緒に、早朝ウォーキングをしていた。私の方は、今は挫折しているけど。
ははん。納得した。
働く妻のイライラを、隣の呑気な専業主婦にぶつける手伝いをしているわけね。
夫婦円満で、およろしいこと。
この夫婦が離婚するかどうか、上橋さんと私は、賭けている。
私は、ためらわずに、離婚する方に賭けた。
誰の仕業か知ったばかりで、心に余裕がなかったので、この婦唱夫随ぶりを、判断材料に加える余裕が、なかったのだ。
賭けとしては、失敗したと思っている。
しかし、個人的には、他人の不幸は蜜の味、あらまほしき結果に賭けたとは、思っている。
現在、長期定点観察中である。
そのイヤミな母親が、仕事のストレスだか稼ぎの少ない夫への不満だか知らないが、うっぷんをぶつけている。
隣人と同じように、自分の産んだ子どもにも。
だったら、味方してあげる。この場は、逃げるがいい。
スーツ男にシュンスケのことを教えなかったのは、強いて言えば、そういう気持ち……、かな。
他に特に理由なんてない。
隣がどうなろうと、知ったこっちゃないもの。
「なんでかなあ」
間が抜けた声で、美弥が言った。
目をこすっている。眠いのだ。
「あの子ね。夕飯、食べさせてもらえない夜も、けっこうあるみたい」
ぽつんと雪美が言った。

美弥は、シュンスケと家が近いせいで、あらぬ疑いをかけられたのだ。ようやくそのことに思いが至ったが、雪美の一言で、こみ上げてきた怒りが、すうーっと、消えていった。
「怒られて外へ出されて、塾から私が帰ってくる頃、まだ、外にいるよ」
夜の、九時過ぎまで。
全然、知らなかった。
「それって……」
虐待じゃない？
言いかけた言葉を、私は飲み込んだ。
「夏が終わったら寒いだろうね」
雪美が言う。
私も、そう思う。

いつも行くスーパーで、小早川サトル君のお母さんを見かけた。
げっ、まずい。
美弥、傷害冤罪事件の捏造犯だ。
近所のスーパーで、しかもこんなに暑いのに、アンサンブルのニットを着て、フレアスカートをはいている。靴は、おしゃれなミュールだ。
今日は、学校が早く終わるから、急いで食べ物を仕入れとかなくちゃと思ったのが、裏目に出た。
そうーっと逃げ出したのだが、どうしても、豆腐と牛乳、それから肉か魚、主菜の材料を買わなくてはいけない。
気をつけていたのに、お早めにお食べ下さいのパンコーナーで、鉢合わせしてしまった。
「あら、こんにちは」
「こ、こんにちは」
私の声は、掠れていたかもしれない。

「暑いですわねえ」
「ほんとに」
一通りの挨拶の後、やはり、大人として避けては通れないだろうと思い、聞いてみた。
「その後、サトル君の具合、どうです？」
「は？」
小早川さんは、きょとんとした顔で、こちらを見返した。
「その節は、美弥が、大変なことをしてしまいまして」
「ああ、噛み付いたこと？　春のことでしょ、それ。もう、平気ですよ」
けろっとして言う。
まさか、忘れてた？
人の家のことを、きちんとした家庭ではないと言い切ったくせに、それはないんじゃない？
意地悪な気分になった。
「でも、サトル君も、災難ですねえ。うちの時は、保健室くらいで済んで良かったんですけど。なんでも、病院の夜間外来にいらしたんですって？　悪い子がいるものねえ」
いつかコンビニで聞いた武藤さんの話の受け売りである。青あざができたくらいで、病院に行って医者に呆れられたという、あの話である。
「え？　何の話かしら」
「いえね、私もちょっと、聞いた話ですから」
「病院の夜間外来？　上の子が赤ちゃんの時以来、行ったことないですけど。それに、サトルは、他のお友だちに何かされたことなんて、ありませんよ。お宅の美弥ちゃんに噛み付かれた以外に」
「は？」
「いやあね。勘違いですよ。他の誰かと間違えてるんじゃない？」
「そ、そうかも、しれない……」
ひょっとして、これ、私がバラ撒いた、美弥・冤罪の話？

多少、尾ヒレ背ビレをつけて話したのだが、それが、こんな形の見事な魚になって戻ってきていたとか？
そういえば、小早川さんが病院の時間外診療に行ったと教えてくれた武藤さんも、友だちの友だちに聞いた話だと言っていた。
そうね、上の子のクラスの誰かと間違えたんだわ。なにしろ暑いから、ホホホ、と、笑ってごまかした。
小早川さんが身を乗り出した。
「それより、聞いた？　放火魔のこと」
ぎくりとした。
「大変でしたねえ」
警戒しながらお見舞いを述べた。まさか、美弥の仕業と言う気ではあるまいな。
「うちのは、ほら、物置のボヤですんだから。それより、お宅のお隣に、酒井さんっているでしょ？　どうやら、そこの子らしいのよ、放火して歩いてたの」
「ええっ」
大げさにのけぞってみせた。
「ここだけの話、服部さんのお父さんが見たんだって。追いかけたんだけど、逃げられたみたい。でも、確かに、娘のクラスメートだったって言い切ったんですって」
「服部さん？」
あの礼儀知らずのスーツ男か。
あの時は、逃げていったのは娘のクラスメートだなどとは、口に出さなかったが、なけなしの分別が働いたということか。
「服部さんのうちも、最近、放火されたのよ。あ、未遂か。うちと見城さん……御存知でしょ、公園の裏のうち。犬小屋を燃やされただけらしいけど……の後で」
「見城さんって、えっと、おじいさんのいるうち？」
公園で遊んでる子どもを叱り付ける怖いおじいさん、とは言えない。
「見城さんのところは、三世代同居なの。それでね、見城さんとこ

のカコちゃんとうちのルリ、それから服部マミちゃんは、幼稚園の頃から、仲良しなの」
「はあ」
「同じクラスに、酒井シュンスケ君がいてね、女の子たち三人と、仲、すごく悪いのよ。前に、お前らんちなんか、火ィ、つけてやるって、凄まれたことがあったくらい」
「シュンスケ君が？」
「そう。三年生の間じゃ、凄い噂になってるわよ。あ、お宅は一年生と六年生か。知らなくても無理ないかも」
私が教えてあげたからね、と、得意そうな表情である。
とういうことは……。
美弥つながりの、見城じいさん、小早川わたる君の家が狙われたわけではなかったわけだ。
真相は、酒井シュンスケつながりの、見城カコちゃん、服部マミちゃん、それに、小早川ルリちゃん宅が、狙われたわけだ。
全くの、冤罪ではないか。
ルリちゃんが、わたる君の姉で、見城じいさんが口うるさいジジイだったせいで、美弥は、ひどい目にあったわけだ。
しかし、ここで、怒りを露にするわけにはいかない。美弥のクラスの保護者は、美弥に掛けられていた冤罪を、知らないのだ。
こちらを窺いながら、小早川さんが言った。
「私、酒井さんって、よく知らないのよね」
今度は、隣人である私から、情報を引き出そうとしている。
「うちも、おつき合いないから」
なんとか、逃げようとした。
「そうよね。お母さん、働いてらっしゃるんでしょ？」
働く母と専業主婦はきちんと住み分けている、だけど、お互い理解し合うことは大切よね。小早川さんは、そう、言いたいわけだ。
「あのね、」
根負けして私は声を潜めた。

ま、どちらかというと、私も話したいわけだし。
「けっこう、子どもの泣き声が聞こえるんですよ。お母さんの怒鳴り声も」
「ああら、うちも、つい、子どもを怒鳴っちゃうわ。気をつけなくっちゃ」
「それでね、シュンスケ君、夜、よく外へ出されてるの」
「おしおきね」
「そう。七時くらいから、夜十時くらいまでかな」
「まあ！　夜でしょ？　信じらんない！」
「でも、別に、放置されてるわけでもないんですよ。お母さん、ずっと家にいらっしゃるみたいだし。シュンスケーッ、って怒鳴り声、うちまで聞こえるもの、夜中に」
小早川さんも私も知っている。
ハレの公共の場、スーパーで、他の母親の悪口を言うわけにはいかないということを。
しかし、これで、酒井家に関する情報は、確実に、他の保護者の元を駆け巡るであろう。
「ところで、知ってます？」
今度は小早川さんからの情報返しだ。
「なになに？」
「似鳥先生のところに、怒鳴り込んでいった親がいるんですって」
「まあ！」
「合唱コンクールで独唱をやらせてもらえないとか何とかって、学校に押しかけたその日のうちに、子どもを連れて、先生のお宅に乗り込んでったらしいわよ」
「ひどい親よねえ。常識ってものがないわ」
「まったく。庭で大騒ぎしてたんですって。で、お家に上がりこんで、夕飯まで食べてったらしいわよ」
庭で？
合唱コンクールは二学期だが、私が美弥のことで似鳥先生とご自

宅でお話した頃、ちょうど、指揮者などさまざまなことが決められていた。
「……それって、いつのこと？」
「つい二～三日前よ。給食最後の日。たまたま、隣の人が見ていて、その人、私の知り合いなの」
給食最後の日？
私が、学校へ行った日だ。似鳥先生のお宅へも。
あの後、誰か、苦情を言いに学校へ来たの？
私の後に？
でも、下校時刻まで学校にいたけど、保護者は誰も来なかったし、もう帰宅すると似鳥先生は言ってた。
まさか、それ……。
でも、私はお家には、上がりこんでいない。夕飯どころかお茶一杯だってご馳走になってはいない。
確かに美弥は、合唱コンクールで独唱をやらせてもらえなかったが、そんなことで文句を言った覚えもない。
そもそも、校歌に、独唱パートなんてあったのか。
でも、微妙に、先生の家の庭で、話していたかも。しかも、子連れで。
ちょっと、声、大きかったかも。
だから……。
それって、ひょっとして……？
美弥とサトル君の話が、病院の時間外診療と学校怒鳴り込みにまで発展したことから考えると、一抹の不安が胸を過ぎる。
小学校ママ……。
すごい世界だ。
「モンスターペアレントよね」
「ほんとにねー」
我知らず、茫洋とした表情になって、私も同意していた。
メールの着信音がした。

私は小早川さんと別れ、携帯電話器を開いてみた。
しのぶさんだった。
信子さんちの近所で、子どもたちの頭を、ぱんぱんはたいて歩く、変質者が出るそうです。気をつけてね。あ、でも、そいつが狙うのは、低学年の男の子だけなんだって。美弥ちゃんと雪美ちゃんは、大丈夫。念の為ってことで。

寒くなる前に、突然、酒井さん一家は引っ越していった。
夜遅く、戸外で放置されているシュンスケをどうしようかと悩んでいた矢先だったので、ほっとした。
意見などしようものなら、あの、若作り酒井母に、どのような仕返しをされるかと、いまいち、食指が動かなかったのだ。
といって、虐待と通報するのもねえ。
あのお母さんも、仕事が終わってから、一応、遊んでやってたわけだし。
自分のストレス解消を兼ねてたわけだけど。
引越しの、挨拶はなかった。なんでも市内に奥さんの実家があって、同居することになったとか。
シュンスケの世話は、おばあちゃんが、つまり、お母さんのお母さんが、親身になってみているそうだ。
よかったではないか。
おはようございますを言っても、顎をしゃくるだけで返事もしない、あの尊大な父親は、マスオさん状態になったわけだ。
妻の実家で、さぞや小さくなっていることであろう。
愉快、愉快。
毎朝、うちの前に、同じ銘柄の煙草の煙草が投げ捨てられることもなくなった。
上橋さんとの賭けは、ご破算になってしまった。離婚するかどうか、その後の経過がわからなくなってしまったからだ。

「あーんたのせいじゃない？　酒井さんが引っ越したの？」
突然大きなトラックがきて、酒井家が引っ越して行った翌日、ゴミ集積所の当番プレートを持ってきた上橋さんが、いやな目つきで言った。
「なんで私が？」
胸にやましいところのない私は、むっとして問いただした。
「だって、子どもが道路で遊んでいると、雨戸をびしばしって、音たてて閉めてたじゃない」
「雨戸って、暗くなったら閉めるもんでしょ。悪いわねえ、たてつけが悪くって」
「あらまあ。私はてっきり、ボールの音がうるさいぞって言いたいんだと思ってたけど？」
「いいえぇー。子どもは外で元気に遊ぶべきでしょ？　私は、外の物音なんて、気にしてないわよ」
「家の塀にボールをぶつけられても、平気？」
「あら。うちの前で遊んでいたのかしら。雨戸を閉めてしまうんで、さっぱりわからなかったわ」
私は、さらっと流す。
「もちろん、うちも気にしてなかったけどね。聞こえないも同じこと」
上橋さんは、しゃあしゃあと言い放った。
上橋さんの家も、酒井さんの家の隣だ。うちとは反対側の隣家である。
当然、うちで聞こえている音は、上橋さんでも聞こえる筈である。ましてや、夜、暗くなってからのボールの音は、かなり響いていたと思う。
上橋さんのご主人は、仕事の関係で、不規則な時間に寝ていることが多いし、寝たきりのおばあちゃんもいる。このおばあちゃんが、ちょっとした物音にも怯えて、大きな声で悲鳴を上げたりする。
でも、うるさいなどと言ったら、負けなのだ。

子どもをもつ母親としては、よその子どもが、外で元気に遊ぶのを批判するようなことを、決して言ってはいけない。
他人の前では。
「そうよ。道路で遊ぶくらい、なんだっていうのよ。ねえ」
上橋さんは、なおも付け足した。
なんだ。気にしてたんじゃん。これは相当、うるさかったのだな。
早々に雨戸を閉めてしまううちとは違って、家の前で遊ばれても気にしていないとアピールする為に、窓を開けたままにしていたのだろう。
いい人ぶりっこだから。
「でも、ここ、通らないようでいて、車、けっこう通るのよね。やっぱり、道路で子どもを遊ばせるのは、危ないわ」
いやにしつこい。
私は、ぴんときた。
上橋さんは、絶対、酒井さんが子どもを道路で遊ばせていてうるさいと、あちこちで言いふらしていた筈だ。
もしかして、警察か市役所か知らないが、苦情相談に乗ってくれる所へ相談して、公的な圧力をかけていたのかもしれない。
そういえば、パトカーの巡回がやけに多いなとは、感じていた。
私はそれを、小学校の通学路だからだと思っていたのだけど、他に理由があったのだ。
肩をすくめて、家の中に引っ込んだ。
酒井さんが引っ越して行った理由、それはきっと、さぞやどろどろしたものであったろう。
まっこと、ご近所づきあいとはむずかしいもの。
私は、ひとつだけ、決意したことがある。
もう、上橋さんと、おつき合いするのは、やめよう。
そもそも、酒井さん夫婦が離婚するかどうかの賭けは、上橋さんからもちかけてきたものだ。
意地悪な人なのだ。

この家に引っ越してきて、一番最初に声をかけてくれたのが上橋さんだったので、つい、親しくしていたのだが、考えてみれば、私だって、積極的につきあいたいわけではなかった。だから、一緒にしていたウォーキングも、理由をつけて、やめてしまったのだ。

おかげで、少々、太ってしまったのだけれども。

私が同行しなくなっても、上橋さんは、早朝ウォーキングを続行している。朝早くから、近隣のゴシップを嗅ぎ回っているのだ。

まったくもって、ご苦労なことである。

おお、そうだ。忘れていた。

例の捨て猫のことである。

ポスターを張り出してすぐ、貰いたいという奇特な人が現れた。

似鳥先生だった。

案外、いい先生なのかも知れない。

第三章の1

第三章

雪美が受験をするので、夏休みは、特にどこにもいかず、静かにすごした。

雪美は塾の夏期講習に忙殺されていた。休みは、お盆の一週間きりという、すさまじさである。

美弥は、友達と、学校のプールへ行ったり、市民プールへ行ったり、友達のお母さんに遊園地のプールへ連れて行ってもらったり、とにかく、水に浸かって過ごした。

あ、そうか。

子ども達は、行ったんだった、旅行。

近藤がチケットが取れたと行って、ヨーロッパへ、一週間。

私は、行かなかった。おやこ水入らずで、過ごさせてやったのだ。

出発の前日、庭で梅を日に干していると、雪美がやってきた。

「うへえ、すごい匂い」

「いい匂いでしょ」

一五キロの梅が、紫蘇でほどよく赤く染まり、平たい盆ざるにぎっしり広げられている。

あたり一面、梅の、しょっぱい匂いが漂っている。梅雨の頃の、あの、甘い匂いとは、似ても似つかぬ、堂々たる梅干の匂いである。

やはり今年の梅は、出来がいい。果肉が厚く、ジューシーである。

真夏の日差しに当てられて、しょっぱいエキスが、沸騰しそうになっている。

「何やってるの？」

「ひっくり返してるのよ。裏側まで陽に当てようと思って」

「へえ」

「手伝う？」

「うん」
珍しく素直に、雪美は菜箸を手にした。
二人で一つずつ、梅を裏返していく。
「旅行、一緒に来ないの？」
「チケット、ないもん」
お盆である。おとな一枚と子ども二枚。よく取れたものだ。
雪美の塾の休みに合わせて取ったので、プラチナ級だと、近藤は、自慢げに言っていた。
「パパにチケット、取って貰えばよかったじゃん」
「行きたくないもん」
「ふうん」
しばらく、黙って梅をひっくり返していた。
「私と美弥が留守の間、一人で、寂しくない？」
「っぶぇっつにぃー」
「はあ？」
「だから、別に。寂しくなんかないよ。飛行機なんか、乗りたくもないし。長いこと同じ姿勢で座ってると、腰が痛くなるし」
「向こう行ったら、観光、できるじゃん」
「歩き回るの、疲れる」
「素直じゃないの。行きたくないのは、私の方だよ」
私はちょっと、どきっとした。が、努めて軽い調子で言った。
「あんたこそ。たまには、パパにパパらしいこと、させてやんなよ。おやこが一緒に過ごすって、大事だし」
「ふん」
雪美は鼻で笑ったものだ。
帰国するとすぐに日常は復活し、雪美は塾に、美弥は友だちとプールに、明け暮れた。
そうして、夏を過ごした。

酒井一家が引っ越して行った隣家に、トラックが横付けされた。
うん？　新しい隣人？
そっとカーテンに忍び寄る。揺れるレース越しに、観察する。
物静かな人たちがいいな。子どもは、いない方が望ましい。
できたら、老夫婦だけとか？
雪美は、受験を控えている。
塾には通わせているが、基本的には家庭学習が大切と、私は思っている。
家でも、雪美は、こちらが感心するくらい勉強している。
せめて、静かな環境を与え続けてあげたい。
だが、この家は、かなり古い。密閉度も、従って防音も、完璧ではない。
願わくば、密接している隣家の窓から、騒音が漏れてくるようなことのないように。
新しい隣人が、騒ぐ子どもや、凶暴な声で怒鳴る親ではありませんように。
どうせなら、酒井さん一家の前に隣人だった、大里さんご夫婦のような、物静かな老夫婦であってほしいものだ。
しかるに、トラックには、子ども用自転車が、どっさり積み込まれていた。
一台、二台、三台……。
ん？　何人いるんだ？
その他にも、荷台に乗り切れなかったものか、トラックの前後にくくりつけられている。
子ども用自転車三台、大人用自転車二台、それに、三輪車、幼児のがらがらいうプラカー……。
めまいがしてきた。
にぎやかな饗宴は、この日から始まった。

父親が一人で、引越しの挨拶に来たのは、それからしばらく経ってからだった。
もうその頃には、「ユイラ」「マリン」という二人の名前は覚えてしまっていた。
あまりにも頻繁に、母親が叫んでいた為である。
小三を頭に赤ん坊まで、六人の子持ちだと、新しい隣人は言った。
六人？
その狭い家に。
「ユイラ」と「マリン」の他に、「エレナ」と、セ、なんとか、という名前を並べ立てられ、学年年齢まで、いちいち告げられたが、とてもじゃないけど、覚え切れなかった。
なんだか、ヘンな名前ばかり。
いったい、どんな字を書くんだ？
「微力ながら、日本の出生率に貢献しているというわけですよ」
斉藤と名乗った、百戦錬磨という感じの太った父親は、そう言うと、不敵に笑った。
こいつは手ごわい。
私は直感した。
父親一人で、引越しの挨拶に来るところから、すでに、戦い慣れている。ここで、夫婦、あるいは、一家そろって近隣に挨拶に歩くのは、馬鹿である。手の内を明かすようなものだ。
母親と子ども達は、家でじっと静観の構えである。うっかり挨拶になど同行して、もし相手の事情を知らされ、子ども達を静かにさせなければならない事態に立ち至ったら、大変！　というわけだ。
手馴れている。
きっと、引っ越す前にも、さぞや近隣の人たちとの壮絶なバトルを戦い抜いてきたのだろう。
それも、一ヶ所ではなく。
しかし、私だって、負けるわけにはいかない。
年が明けたら、雪美は受験だ。家で静かに勉強させてやらねばな

らぬ。
「うちには、受験生がおりますの。せっかく本人も頑張ってここまできたんですもの、最後まで頑張らせてあげたいものですわ」
「ほほう。資格試験かなにか……」
「まさか。中学受験ですっ！」
隣家の父親は、芯から驚いたようである。
子どもに関して、隣人がどういうポリシーを持っているか知らないが、世の中には、子どもにお金をかけてあげたい家だってあるのだ。
産んで育てるだけなら、犬にだってできる。
その先の、人間社会でのよりよい生活を送らせてやりたいという願いを、子沢山家族の騒音などで妨げさせられて、なるものか。
私は、なんとかして相手をけん制しようと、やっきになった。
「今はね。塾で勉強させれば家で勉強しなくてもいいなんて家庭も多いようですけど、うちは、ほら、自宅学習を重視しておりますの。わからないところは、私どもでちゃんとフォローしてあげなくちゃいけないし。うちのおねえちゃんは、学校から帰ってきてから、夜、十一時過ぎまで勉強しておりますのよ」
「ははぁ」
隣家の主人は、きょとんとしている。
きっと、子どもに勉強をさせるなど、思いもよらないのだろう。
「うちは、どの子も、元気だけがとりえでして……」
わかりきったことを口にする。
学校や幼稚園から帰宅すると、隣家の子ども達は、赤ん坊を除いて、いっせいに、道路に繰り出す。
歩いてすぐのところに公園も広場もあるのに、なぜ、家の前の道路で遊ぶのか、理解に苦しむ。
彼らは、ボールやキックボードなど、大きな音の出る玩具が大好きだ。
走り回る自転車の補助輪の音、幼児用のプラカーの、凄まじい響

きも馬鹿にならない。
それと、奇声。
ガラスをひっかくような、すごい叫び声をあげる子がいる。
休日は、早朝から、常時十人を超える子ども達が、道路を我が物顔に走り回っている。
計算が合わないわけではない。どうやら、知人友人、親戚縁者も、混じっているようなのだ。
それと、母親。
挨拶にも来ないくせに、この母親は、子ども達の倍くらいの声量を振りまいて、はしゃぎまくっている。
うちのまん前の道路で。
特に騒々しかった次の日、外へ出た私はあ然としたものだ。
なにせ、隣家からうちの前を通り越して、三軒隣の家の前まで、道路にぎっしり、チョークで落書きがしてあったのだから。
「ご一家の活躍ぶりは、十分拝見しておりますことよ。皆さん、お元気がよろしくて、なによりですこと」
わざと、ご一家と言ってやった。
耳につく叫び声は、主に、母親のものだからだ。
「いやあ。自慢の子どもたちですよ」
本当に嬉しそうに、斉藤さんの父親は笑った。
？
皮肉も通じないのか？
手ごわい。手ごわすぎる。
「ま、こちらも、年明け、二月の終わりか、三月には、決着がついておりますから」
私が言うと、斉藤さんは、きょとんとした顔をした。
「だから、受験」
「ああ、そうそう。中学受験ね」
「ええ。もしかして、その先の、高校受験、大学受験、ま、うちは下もおりますからね、その節はまた、静かな家で、勉強させたいも

のですわ」
斉藤さんは、途方に暮れた顔をした。
恐らく、子ども達を静かにさせておく、その方法がわからないのだろう。
「でも、お宅にもお子さんがいらっしゃるものね。いずれは、みなさん、受験……。六人もおられると、大変ですわねえ。でも、子どもさん本人が進学したいと言ったら、親の都合でやめさせるなんてこと、できませんものねえ」
隣家の主人は、遠い目になった。
「今年は、うちの雪美の、生まれて初めての試練ですから、私たち家族としても、できることは何でもして、といっても、たいしたことができるわけじゃございませんけど、でもせめて、静かな環境で思い切り勉強させて、悔いの残らない受験にしてあげたいと願っておりますのよ。それは、でも、どの親御さんも思うことでしょ？だから、お互いさまということで」
「そうそう。お互いさまですからね」
斉藤さんは、けろっとして繰り返した。
何がお互いさまだ！　お互いさまというのは、うちもうるさい場合に言うんだよ。今すぐ静かにしろ！　雪美の受験を邪魔するな！
こみ上げてきた怒りを、ぐっとこらえ、私は丁寧に頭を下げた。

私の皮肉は、伝わらなかったようである。
秋晴れの休日、隣家の住人は、親戚縁者友人たちを集めて、駐車場でバーベキューを開催した。
雪美を塾の模試に送って帰ってきたら、自宅のある路地に曲がった途端、すさまじい煙が、もくもくと立ち昇っていたので、びっくりした。この煙では、焼いているのは、肉だけではあるまい。もっと臭い、煙の立ち易いものも、絶対、焼いている。この凄まじい匂いは、くさや、か？

子ども達が道路にあふれてはしゃぎまわっているのを掻き分けて、私は自宅に走りこんだ。
ベランダに布団を干していたのである。
三十坪ほどの区割りで、小さな家が立ち並ぶ住宅街である。
隣家の駐車場は、うちのベランダから、五メートルほどしか離れていない。
たまったものではない。
布団を取り入れ、二〜三日雨が続いたせいで、まとめて洗った大量の洗濯物も、まだ生乾きだったが、取り込んだ。
洗濯を取り込みつつ、隣に目をやると、煙は、うちの方ではなく、反対隣の上橋さんの方へ、のどかにたなびいていた。
上橋家のベランダには、洗濯物が満載に干してあり、あまつさえ、寝たきりのおばあちゃんの布団さえ吊り下げられていた。
留守のはずはない。
一向に取り込む気配がないのは、煙なんて何よ、子どもと外で遊んであげるのはいいことよね、という決意表明なのか、うちが即座に窓を閉めてしまうことへの批判なのか。
まあ、気にしない人は、気にならないものだ。私の知ったことではない。
布団を、ばんばん叩き、洗濯物のハンガーを、かしゃかしゃと音を立てて、竿から外した。
ちらっと下を見下ろすと、隣家の大人たちは、頑固にグリルを除き込んでおり、こちらを見向きもしない。
模試は午前中だったので、幸い、布団に匂いがしみつくまでには至っていなかった。
雪美も美弥も、花粉症などのアレルギー体質だ。布団を取り込めて、とりあえず、安堵した。
洗濯物を二階のあちこちに引っ掛けて、下に下りてくると、なんだか、生臭い。それに、妙に視界が悪い。よく見ると、煙っている。
久しぶりの晴天、キッチンと食堂の小窓、お風呂、トイレの窓は

開けっ放しにしていたのだ。
特に、キッチンと食堂の窓は、隣家の駐車場に面している。煙さん、おいでなさいと、諸手を挙げて歓迎しているようなものだ。
二つの小窓から入り込んだ煙が、狭い一階中にどぐろをまいている。
しかし、だからと言って、家中の窓を開けると、今以上に臭くなるし。
そう思っていると、なにやら、うるさい。陽気な音楽が流れ込んでくる。
そっとカーテンを寄せると、ＣＤデッキを持ち出して、音楽をがなりたてているのが見えた。
ディズニーのテーマソングが、これほど、不快だったことはない。
大きく深呼吸した。
そりゃ、バーベキューだって、嫌いではない。子どもたちの小さいころは、ディズニーの音楽だって、さんざん鑑賞した。
でも、この生臭い匂いはどうだ？　ネコの額の駐車場で（しかもそこは、布団が干してあるうちのベランダから四～五メートルの距離だ）、炭火を起し、ＣＤをがんがんかけまくるというのは？
くさやの匂いは、絶対、カーテンに染み付いてしまっている。
夏、洗ったばかりのカーテンを、また、洗わなければならない。
いくら私が専業主婦だって、そうそう、予定外の家事をしてはいられない。
いや。
落ち着け。
ここで怒鳴り込んだら、隣人トラブル発生である。
将来に禍根を残す。
落ち着け。怒りを静めて。
私は、良識ある、専業主婦だ。

あれもこれも焼き尽くし、ようよう煙が収まる頃、隣家に集ったよくにた体型・顔つきの人々は、道路に飛び出し、バトミントンやバレーボールを始めた。
ＣＤはかけっぱなし、音楽と、ドスのきいた大人の嬌声のせいで、煙がなくなっても、窓も開けられない。
ふと見ると（私はいつも外を見ているわけではない）、ちょうど、うちの庭にバトミントンのシャトルが飛び込んでくるところだった。
斉藤さんのお父さんとお母さんが、ラケットを持ったまま、こちらを見ている。
どうやら、うちのまん前で、バトミントンに興じていたようだ。位置関係からすると、お母さんの方がミスをしたのだろう。
どうするつもりかな、と思っていると、マリンとおぼしき（マリン……海……？）子どもが一人、何の断りもなく、うちの庭に入ってきた。
うむ。
酒井シュンスケと同じではないか。
人の家の庭に黙って入り込むのは、よくないことである。アメリカ辺りでは、命がけの所業である。
その子の将来を考え、注意するのが大人の努めというものだ。
私は窓をガラッと開けた。
「どうしたの？」
「これ」
子どもは悪びれず、拾い上げたシャトルを見せた。
「人さまのお庭に入る時には、一言、お断りをするものよ」
あくまで優しく、そう教えてあげた。
子どもはぽけーっ、と突っ立っている。
「あのうー！　子どものすることですからぁ」
それまで様子を見ていた斉藤さんのお母さんが、垣根越しに叫んで寄越した。
子どものすることって。

道路でバトミントンしてて、うちの庭にシャトルを入れたの、あんたでしょ。
盗人たけだけしいとは、このことである。

斉藤家のバーベキューパーティーは、それから、毎週続いている。
休日ほどではないが、平日の路上も、子どもと遊ぶおとなの歓声と、デリカシーに欠ける企業が開発した玩具のお陰で、それはそれは騒がしい。
通りかかった車が、クラクションを鳴らし、立ち往生しているが、そのクラクションさえも、気にならないほどだ。
あまつさえ、子ども達は、うちの駐車場に入り込み、車の陰に隠れてかくれんぼをしたりしている。
大人もまた、そんな子ども達に、何も注意しない。
確かに、門は開けっ放しだし、塀は、あまり高くない。車はほこりだらけのボロボロである。
しかし、ローンを払って手に入れた、うちの敷地であるし、車だって、立派な動産だ。
特に車は、家が道路沿いのせいで、過去に何度か、尖ったもので引っ掛かれている。修繕費だってばかにならない。だから、車の脇で、子どもにうろちょろされると、気になってしようがない。
それに、万が一、うちの敷地で子どもが怪我をしたりすると、それはうちの責任ということになるのだろうか？
少なくとも、モンスターな親なら絶対、ねじこんでくる。
どういう仕事をされているのか、斉藤さん夫婦は、両方とも、いつも家にいる。
午前中は赤ん坊をあやす大声が（なんで、こちらが窓を閉めていても聞こえるほどの大声で、赤ん坊に話しかけるんだ？）、午後は、幼稚園児だか小学生だかと遊ぶ両親のはしゃぎ声が、そして夜は、もうこれは、毎晩、運動会をやっているとしか思えない。地響きが

する。
とにかく、外で遊ぶか、家の中にいても窓を開けっぱなしなので、年がら年中、うるさい。

「セイちゃん、えらーい。すごーい」
雪美と美弥を学校に送り出し、掃除洗濯を済ませ、ほっと一息入れていたら、斉藤さんの奥さんが、あまりに長時間、甲高い声で叫び続けるので、外に出てみた。
声が近いと思ったら、斉藤さんの奥さんは、うちの駐車場で、一番下の子の手を引いて、歩かせていた。
えーと。これが、赤ん坊だったかな？　ってゆーか、何か用？
だが、斉藤さんは、私になど、別に用ありげには見えなかった。
しいて言えば、子どもを見せびらかしに来た、とか？
うるさい隣人ではあるが、歩き始めたばかりの赤ん坊は、確かにかわいらしかった。
「でも、子どもを道路で遊ばせるのは、危ないわよ」
ひとしきり、子どもをほめてから、私はさり気なく言った。
本当はそこは、道路などではなく、うちの駐車場で、現にその子どもは、うちのマーチに抱きついているわけだが、あえてそのことには触れなかった。
「大丈夫ですよ、親がちゃんとみてますから。私たち、子育てを楽しもうって思ってるんです」
斉藤さんの奥さんは、にこやかに、そうのたまった。
「子ども達を外で遊ばせるのは、大事だと思うんです。今の子は、家でゲームばっかだから」
正論だ。
子ども達という、錦の御旗を振りかざした、完全無欠の正論である。
私は、全身に力をこめて、愛想笑いを搾り出した。だがそれは、

多分に、ひきつっていたと思う。
斉藤さんは、続ける。
「お宅の雪美ちゃん？　偉いですわね。うちの子たちがわいわい遊んでいる脇を、黙って通って、塾に通ってるんですもの」
愛想笑いが凍りついた。
「うちの子たちったら、ちっとも勉強しなくて。でも、子どもは、元気なのが一番」
おほほ、斉藤さんの奥さんは、一層甲高い声で派手に笑った。
ちょうどそこへ、職場へ行く幸島さんの奥さんが通りかかった。
「おはようございます」
どこか強張った笑みを浮かべて、幸島さんは挨拶をした。
まだ三十代半ばだと思うが、幸島さん夫婦には、子どもがいない。そして、犬を飼っている。大きな、毛むくじゃらの、白い犬である。おとなしい犬だし、室内で飼っているのだが、時折、鳴き声が聞こえる。
うちは、家がすぐに接しているので、万が一、不都合があると悪いと思い、お使い物を差し上げたりのおつきあいはしている。
だが、他の近所づきあいは、あまりしていないらしい。時折、犬友達がやってくるのを見かけるばかりだ。
「おはようございまーす」
斉藤さんはほがらかな声で挨拶を返したが、幸島さんは、軽く会釈をしたきりで、足も止めずに通り過ぎてしまった。
明らかに、息子をほめてもらいたかったらしい斉藤さんは不満そうだったが、出勤の途中なのだから、仕方あるまい。
「あーら、何の騒ぎかしら」
かちゃりと玄関ドアが開く音がして、大きなゴミ袋を持った上橋さんがやってきた。
「歩き始めたんですって。ほら、かわいいわよ」
底意地の悪い上橋さんとは、ここのところ、なるべく付き合わないようにしているのだが、赤ん坊のあまりのかわいさに、私はつい、

返事をしてしまった。
「あらあら、家族に先のある人はいいわね」
上橋さんは言った。
仕方がないので、私は聞いてやった。
「おばあちゃん、お元気？」
「死にそうもないわよ」
「あの、上橋さんのおばあちゃんって、ご病気なんですか？」
心配していることを表すためか、眉間に皺を寄せて、斉藤さんはそう尋ねた。
「もう、何年も寝たきりなの。だから私も、ずうーっと、家にいなくちゃならないの。仕事にも出られなくって」
「まあ。知らなかった」
あれだけ大声で、悲鳴をあげるおばあちゃんに気がつかないとは、斉藤家の騒々しさは、推して知るべし、である。
上橋さんは、苦虫を噛み潰したような顔をして、尋ねた。
「うちのおばあちゃん、うるさくはないかしら？」
「ぜーんぜん。うちも賑やかですからー！」
……上橋さん、あんたの皮肉は、通じてないよ。
私は、突っ込みを入れてやりたくなった。
とはいえ、斉藤さんの奥さんは、無防備過ぎる。
優しいおばさんを装ってはいるけど、上橋さんは、コワいヒトなのだ。
まさか、直球ど真ん中に教えてあげるわけにもいかず、私は、遠まわしに言った。
「おばあちゃん、大きな物音に怯えるんですってね」
上橋さんは、じろりと私を睨んだ。
「戦争経験者だから、仕方ないでしょ。でも、大丈夫。快適に過ごしてますよ。ま、中には神経質な人もいるでしょうけど、気にしないことよ。静かにさせてるなんて、子どもが、かわいそうだもん。ねえ、永瀬さん！」

最後の一言は、丁度、門から出てきたばかりの、お向かいさんに向けられたものだ。
私は、子どもがうるさいなんて、心で思いこそすれ、今まで、一言も言ってはいないのだが。
斉藤さんとこは、うるさい。
これは、上橋さんの、心の叫びであろう。
自転車で、走り始めたばかりの永瀬さんは、いきなり呼びかけられて、ぎょっとしたようにつんのめって、止まった。
「お、おはようございます！」
上橋さんに声をかけられ、明らかに怯えている。
「あなたもそう思うわよねえ」
「は？」
「うちとか、斉藤さんの物音、うるさいかしら？」
「いいえ、うちにも子どもがいますから」
物音、と聞かれて、子ども、と応えた。
そりゃ、窓を開けっ放しで大騒ぎをすれば、隣や向かい合っている家は、うるさいに決まっている。
ただ、言わないだけである。
ところで、永瀬さんの子どもは、もう、大学生である。娘さんは、東北の大学へ進学して家を出たが、上のお兄ちゃんは、引きこもりをしている。
「ほら、気にならないって、さ」
私の方を見ながら、上橋さんは、言い放った。
斉藤さんは、にこにこ笑って、立っている。
「あのう、私、パートに行かないと」
おずおずと永瀬さんがお伺いを立てる。
「あら、ごめんなさい。引き止めちゃったんでなければいいけど」
許可が出て、永瀬さんは、矢のように走り去っていった。
私は、非常に不愉快であった。

「あーら、いいじゃない。おおらかな隣人で」
国際電話で愚痴ると、真紀子はそう、言った。
「とんでもない。これは、家族至上主義だわ。ファッショだわ。子沢山家族の暴力よ。毎日、家で四人の子どもと遊んでるなんて、専業主婦極まれりというところだわ」
「自分だって、専業主婦のくせに」
「あそこは、ご主人も一緒なのよ？　いったい、どういう仕事をしているのかしら。なんだか、働いていないみたいだけど」
「ほらほら、人様のことなんか、気にしないものよ」
「子沢山なら、何をやってもいいってことには、ならないのよ」
「どうやら、専業主婦にも、ヒエラルヒーがあるみたいね」
真紀子はため息をついた。
「だいたい、いつも家にいるからいけないのよ。だからついつい、お隣のことが気になるんでしょ」
「私は、家で、遊んでるわけじゃないのよ。家のことが、いろいろあるのよ！」
「はいはい、専業主婦のヒステリーね。働いていれば、近隣のことなんか、気にとめている余裕なんてないものよ」
諭すように、真紀子は言った。
「だって、雪美がかわいそうよ！」
私は涙声になっていた。
連日、騒音爆音を聞かされ、いささか平静さを失っていたのかもしれない。

第三章の2

だが、外のものすごい大騒ぎをものともせず、雪美は、黙々と勉強していた。

こうなってみると、ありがたいのは、塾である。

子どもの塾通いには反対だったけど、でも、こういう近隣の事情もあるのだ。自宅学習に妨害がはいるのなら、もう、塾で勉強するしかないではないか。

ひょっとして、日本の住宅事情を勘案して、塾というものはあるのかもしれない。

かつて、孟母三遷は、もし、そのような状況に陥れば、義務である、と思っていた。

しかし、築ン十年の古家、そうそう売れるとは思わないし、今更ローンを組んで、新しい家が買えるわけでもない。

そこで、教習所である。

いや、その前に、二学期に入って、雪美の成績が急上昇したことを報告しておかねばならない。

夏休みから数回行われた模試で、雪美は、常に高得点をマークした。その結果、塾側から、志望校のレベルを引き上げることを提案されたのだ。

なぜ塾は、かくまで生徒の志望校レベルを上げることに熱心か。

もちろん、少しでも偏差値の高い学校に、一人でも多く合格させた方が、彼らの評価向上に繋がるからだ。

時給払いの先生などは、給料に直結するだろう。

そのくらいのからくりは、いくら社会に疎い専業主婦の私でもわかるが、今回ばかりは、私も、塾側に与した。

だって、雪美は優秀だからだ。

それは、もちろん、私の家系の血を引いたからだ。

伸びる要素を持った子だから、もっともっと、伸ばしてあげたい。

そう思うのは、当たり前のことではないか。
ただ問題は、今まで通っていた市内の塾では、そうした、最難関校受験に対応できない、ということだ。
その為、塾の本校に通うように言われた。そこには、あちこちから集められた優秀な子たちの為の、最難関校受験クラスがあるのだ。
ベテランの指導陣、きめこまやかなバックアップ体制や豊富な情報量に加え、優秀な子同士の切磋琢磨は、きっといい影響を雪美に与えると、説得に来た近藤は、力説した。
何より、最難関校受験クラスは、ほぼ毎日、授業があるのだ。そして、土・日を含め、自習室は使いたい放題。
いままでの塾は、授業は週二回で、模試のある日以外の土・日はお休みだったから、斉藤家の脅威に晒される日数が多かった。しかし、本校へ通うようになれば、ストレスフルな環境から逃してやることはできる。
私があっさり承諾したので、近藤は、拍子抜けしたようだった。
雪美が家にいる時間が減るのはさみしいが、もっと大局的な目でみてやらないと、かわいそうである。
私たちは、優秀な子を、天から預かっているのだから。
どうせ、高価な月謝は、近藤が出すのだし。
そうなってみると、塾への行き帰りが、心配だった。
本当は、私がずっとついていってあげられればいいのだが、うちにはまだ、美弥がいる。
夜、美弥を一人でおいていくわけにはいかない。
ターミナル駅から塾までは、地下道で三分ほどの距離である。心配はいらないと、塾の先生は力説した。それに、ターミナル駅には、近藤の会社もある。
どちらかというと、家から駅までの方が、心配だった。近藤は、バスで通わせたらと言ったが、その後の長い道のり、或いは、帰りの疲労を考えると、路線バスはなんとも酷な気がする。これから寒くなると、バスを待っているだけでも、風邪を引きそうに思える。

せめて、最寄り駅までくらい、車で送迎してあげたい。
せつに、そう、思った。
私は、免許は、持っている。
僭越ながら、ゴールドである。
だが、もう、ここずっと、車の運転はしていない。
それは、私の運転が下手だからではなく、車社会の弊害を考えてのことである。便利さや快適さが暴力のようにまかり通っているこの国に、一石を投じたかったのだ。
いわば、スローライフのさきがけである。当たり前のことをカタカナ言葉で言うのは、嫌いなのだが、わかりがいいのだから仕方がない。
車での移動に慣れてしまえば、足腰が弱って生活習慣病を誘発し、医療費の不必要な増大を招き、ひいては国家予算を圧迫する。
また、車の排ガスは、地域の住民に喘息を引き起こす。
夜中に胸をヒューヒュー言わせ、顔を紫色に変色させた子どもを、一度でも見たことがあるならば、車に乗ることをためらうのは、当然のことだ。
まして、バスや自転車などの、代替手段があるならば。
私が一向に運転しようとしなかったので、口の悪い真紀子などは、免許を返納した方がいいんじゃない、などと毒づいていたものだ。私自身も、便利なばかりが快適さではないとアピールする為に、免許なぞ返してしまった方がいいかな、と考えたこともあった。
だが、ここへ来て、状況は一変した。
木枯らし吹きすさぶ停留所で、雪美にバスを待たせるわけにはいかない。
ちなみに、雪美は、最初、今まで一緒に勉強してきた琴絵ちゃんと別れるのはイヤだと主張した。だが、塾の先生に説得されたようだ。
いくら仲良しだって、琴絵ちゃんと一生、一緒にいられるわけではない。

同じ中学を受験したとしても、試験はミズモノ、二人はライバルでもある。
同じ学校を受けて、どちらかが受かってどちらかがダメだったら、それこそ、目も当てられない。
それに、女の友情など、はかないものよ。
長く女を張ってきた経験から、そう、アドバイスしてやったが、雪美はいつものように、ふん、と、鼻を鳴らしただけだった。
最終的に、その琴絵ちゃんに、もっともっと頑張りなよ、雪美ちゃんがいい中学に受かったら、私も鼻が高いよ、と励まされて、とうとう、雪美も、本校へ移ることを決意した、らしい。
らしい、というのは、女の子二人の友情について、私は、雪美から、詳しい報告を受けていないからだ。

教習所では、ペーパードライバー講習というのを、受講した。
最初は、教習所の中を走る。
あまりに久しぶりで運転席に座ったので、どちらがアクセルでどちらがブレーキか、忘れてしまっていた。
？　もう一つ、ペダルがあった筈だが？
いろいろあって、なんとか車は走り出した。
「ふむ」
教官がうなった。
教習所は、お金を儲けなくてはならないし、わりと空いている時期なので、路上に出るまで、時間がかかった。
何日も何日も、教習所の中を、ぐるぐる走り回るばかりなので、いいかげん、あきあきした。
最近では、免許取得者の再練習には、教官が助手席に座り、自分の車で、職場やスーパーなど普段よく行く場所まで、運転の練習をさせてくれるサービスもあると聞いた。
私の場合、家から駅まで行ければそれでいいのだ。普段の買い物

などは、今まで通り、自転車で十分、事足りる。
ようやく路上に出ることが許されたので、私はさっそく、それを申し込んだ。
「いや、助手席にブレーキがついていないことですし、あなたの場合は、自家用車は、ちょっと……」
まだ若い教官は、顔を赤らめながら言った。
「ほら、自分の車に傷をつけたくないでしょ？」
「あら、少しの傷くらい……。私の車じゃなくて、夫の車だから。それに、ここの教習車、ベンツでしょ？　ベンツってお高いんですわよね？　うちのは、年代物のマーチですから。」
「絶対、ベンツがいいです。何しろ頑丈だから」
教官は言い張った。
若い教官が、マーチよりベンツを好むのは、仕方のないことなのかもしれない。
その辺を察して、私は折れることにした。
路上に出てからは、わりとすんなりと運転できた。
得意な人もいないと思うが、私は左折が苦手である。
左は、運転席から見えにくく、距離感がつかめないからである。
これはもう、カンで、えいっ、と曲がるしかない。
二度目の左折の時、やっぱり、車体をガードレールにこすりつけてしまった。
大きな音がした。
金属のこすれるいやな音である。
それ以上に、この音の源が、自分であるということが、普段、物静かに暮らしている私には堪えられなかった。
思わず、悲鳴をあげてしまった。
「大丈夫、落ち着いて」
若い教官は、ブレーキを踏んだようである。
車はカーブの真ん中で停車した。
後続の車がクラクションを鳴らす。

「アクセル、アクセル！」
「踏んでますって」
「いや、それじゃなくて、右の、右、右！」
教官は「右」を連呼し、私は慌てた。
後ろからのクラクションはいよいよたけり立つ。
「だから、左じゃなくて、右のペダル！」
「ちょっと待って」
私は、教官を制し、運転席側の窓を開けた。
「ブーブーうるさいんだよ、このタコ！　教習車だってのが、わからねーのか、ボケ！　静かにしやがれ！」
体を乗り出してそう叫ぶと、右のペダルをぐっと踏み込んだ。
車は、急発進した。
大通りに出た時、教官が、路肩へ寄って止まるように言った。
私は、素直に指示に従い、二度ブレーキを踏んで、静かに停車した。
欅の大木が、豊かに葉陰を落とす、のどかでロマンティックですらある、市の目抜き通りだ。
「運転は、止めたほうがいい」
教官は、真摯な口調で言った。
「少なくとも、免許を持っている人を隣に乗せてでないと、運転しちゃダメだ。信子さんご自身のためだから」
青い顔をした教官は、まるで恋の告白のように、真剣にささやいた。
「そもそも、なんで、いまさら、車の運転をしようなんて思い立ったんですか」
「だって、小学校六年生の女の子に、夜、駅から自転車で帰らせるわけにはいかないでしょ！」
塾が終わり、最寄り駅に着くのは、すでに十時を回っている。夜は、かなり寒い。
暗く寒い夜道を、雪美に、自転車で帰らせるわけにはいかないではないか。

教官は、わけがわからないという顔をした。
子どものいない若い人には、わからなくても無理はなかろう。
結局、路上教習にも、時間がかかった。この教官が、教習所の理念に深く賛同して、金儲けに熱心だったのか、それとも、……私は、こっちの理由だったと思うのだが……、私と一刻も長く一緒にいたかったのか。
まあ、これなら、と、しぶしぶ、一人での運転を認められた時には、冬の気配が、街を覆っていた。
間に合った。
最後の教習の時、件の教官は、私のことが心配だから、これからは毎日、事故の記事に気をつけていると、約束した。

全てを制御し、マーチの運転席に座る私は、得意だった。この雄姿、真紀子に見せてやらねば。真紀子は、年が明けたら一時帰国すると言っていた。
「帰りは、バスで帰る。明日からは自転車で行くから」
ところが、車での送迎の初日、駅に着くやいなや、いきなり、雪美から言い渡された。
「だって、帰りは遅いじゃない。それに寒いし。風邪でも引いたら、どうするの」
今年は、雪美はもちろん、美弥も私も、早々にインフルエンザの予防接種は済ませてしまっている。しかし、だからと言って、試験間近になって、風邪にかからないという保証はない。
「大丈夫。バスの中は、暖かいから」
「バス停からうちまで、歩かなくちゃ、ならないでしょ！」
なおも私は、車で迎えに行くと申し出たが、雪美は、その必要はない、とつっぱねた。
もしかして、さっき交差点を右折しようとした時、向こうから来た直進車が、止まって通してくれたのへ、突っ込みそうになったの

で、怯えたのだろうか。
曲がるのに、ちょっとふくらんでしまったのだ。
しかし、あんなのは、普通に運転していれば、よくあることだ。
雪美は普段、あまり車に乗らないから、特別なことのように思うのだ。
「とにかく、いいから。バスは、遅くまであるし」
頑固だった。
せっかく、練習したのに。
莫大な、お金が、かかったのに。
仕方がないから、美弥を乗せて買い物にでも行こうかと思った。
そろそろ、白菜が出回っている。キムチを作らなくっちゃ。
インターネットでみると、キムチって、意外と簡単に漬けられるらしい。国際化の時代だもの、漬物だって、いろいろトライしてみなければ。それが、賢い主婦というものだ。
重い白菜を買うのに、車はやはり、便利であった。
だが、一緒に行こうと誘ったにもかかわらず、美弥にも、あっっさり、フラれてしまった。
友だちと遊ぶのに、忙しいのだそうだ。
そもそも、美弥も雪美も、まるで真紀子が乗り移ったかのように、私の教習所行きには、賛成していなかった。
まあ、この子たちが生まれてから一度も、ハンドルを握ったことがないのだから、運転する私のイメージが湧かないのも、しかたのないことなのかもしれないが。
いや、雪美と美弥はいい。
問題は、いつも道路にこぼれている、斉藤家の子ども達である。
親戚の子だか友達の子だかも含め、常時十人近い子ども達が道路で遊んでいるのだが、私が車を出そうとエンジンをかけても、よける気配がない。
というより、私のことをまるきり無視しているというのが、正解のようだ。

クラクションを鳴らしても平気のへいざ。
あいかわらず、道路のど真ん中で大騒ぎを繰り広げている。中には、キックボードに乗ってよろめきつつ、私の車めがけて突っ込んでくる子もいるのだから、もう、怖くてたまらない。
あのね。
私は、運転、慣れてないのよ。
今日も、教習所の指導教官が、私の名前の入った事故の記事を探しているのよ。
一緒に遊んでいる斉藤さん夫婦も、口では、「車だよー」と言うが、言うだけである。
そういえば、時折外から、「危ないッ！」という真に迫った母親の叫び声が聞こえることがあるが、あれはいったい、どういう状況なのであろうか。
私が運転している時にあんな声で叫ばれたら、即座に正確な判断が下せる自信がない。
この道を、クラクションを鳴らしつつ通るドライバーは、すごいと思う。

夜、テレビの時代劇ドラマを見ていると、インターフォンが鳴った。
最近では、宅急便の夜間配達などもあるが、夜の来客には、やっぱり不安を感じる。
「はい」
「斉藤です。開けて」
させまった女の声がした。
斉藤？　お隣さんのお母さん？
でも、なんだか、違う人の声のようだ。
斉藤さんはすでに、庭を抜け、玄関先に立っていた。
私がドアを開けるのを待ちかねたように、家の中に入り込んでく

る。
「うちのユイラ……。ユイラ、いるでしょ」
「ユイラちゃん？」
最も多く、母親が怒鳴りつけている、一番上の女の子だ。
確か、小学校の三年生……。
「いませんけど。まだ、帰ってないんですか」
もう九時近い。びっくりしてそう尋ねた。
「うそ。ここにいるはずよ」
「なんで……」
「隠してるでしょ、ユイラのこと！」
「斉藤さん、落ち着いて」
「まさか……。まさか、車ではね飛ばして……」
「なんてこと言うの！　そんなことあるわけないでしょ。第一、今日は、車に乗ってはいませんよ。うちの車は一日駐車場に止めてあったの、お宅からだって見えてたでしょ。滅多なことは、言うもんじゃないわ」
腹が立って、一気にまくしたてた。
「上橋さんが……」
斉藤さんは不明瞭な言葉で後を続けたが、私には悪意の源がだいたい見えた気がした。
その上で、当面の問題点を洗い出した。
「ユイラちゃんが、いなくなったのね？」
「ユイラ……」
「お友だちの家とか、電話してみた？」
斉藤さんは、きっとした目つきで、私を見返した。
「うちの子はいつも、家の前で遊ばせています。必ず、私の目の届くところに置いておくんです」
「今日も、外が賑やかだったけど。あなたの楽しそうな声も聞こえてたわ」
斉藤さんの顔が、歪んだ。

「私も一緒に遊んでたのに。いつの間にか、ユイラだけ、いなくなってた。他の子たちはみんな、いるのに。お友達だって……」
「その、お友達の家には、聞いてみたの？」
「もう、電話をかけてみました。でも、ユイラは、どこにも、いない」
「うちにも、いませんよ」
「もう、ここしかないのよ。隠しているに決まってる。きっと、車にはねられて、大怪我をさせられて……。かわいそうな、ユイラ！　ユイラ！」
突然、斉藤さんは、私を押しのけて、家に上がりこもうとした。
「ちょっと、斉藤さん、ちょっと！」
私は驚いて、斉藤さんの後を追った。
斉藤さんは、土足だったのである。
ユイラ、ユイラ、と叫びながら、斉藤さんは、一階を走り回った。トイレや風呂場はもちろん、和室の押入れまで開けてみる徹底ぶりである。
キッチンのシンクの下の戸棚を開けられた時は、この人、正気でないな、と感じた。
一階を見尽くすと、斉藤さんは、二階に駆け上がろうとした。
「斉藤さん！」
二階には、美弥と雪美がいる。私の声にも、それなりの迫力があったはずだ。
階段に足を掛けたまま、般若のような形相で、斉藤さんは振り返った、
血走った目で私を見据える。
「靴、脱いでもらえます？」
いや、私の言いたいことはそんなことではなかったのだが、心のどこかで、ここは、家中を見せた方がいいような気がした。
家中を見せて、子どもがここにはいないことを、はっきりと確認させたほうがいい。

相手は、子どもを見失った母親である。言わば、手負いの獅子のようなものだ。
斉藤さんは、素直に玄関まで戻り、靴をたたきに脱ぎ落とした。
「ユーイーラー！」
悲鳴のような声で叫びながら、階段を駆け上がっていく。
美弥は、眠っていた。
常夜灯を点けたほの暗い室内に、美弥の甘い香りが漂っている。
斉藤さんは、構わず電気をつけたので、私は、殺意さえ覚えた。
「ここには、ユイラちゃんはいないでしょ。美弥が目を覚ましちゃう。電気を消して」
怒りを抑え、やっとのことでささやいた。
部屋に踏み込まれ、クローゼットを開けられでもしたら、本当に美弥が起きてしまうと思ったが、斉藤さんは、黙って電気を消した。
雪美は、こちらに背を向け、机に向かっていた。
イヤーマフをつけ、一心に、計算問題を解いている。
イヤーマフは、私が、四苦八苦して、人生初の、インターネット通販で、購入したものだ。スウェーデン製で、人の声の周波数も、ある程度は、シャットアウトしてくれるという。
もちろん、隣家の騒音対策である。暑いころは、汗ぐっしょりでイヤーマフをしていた雪美が、哀れであった。
雪美は、斉藤さんが近づく気配に、ぎょっとしたように振り返った。
「ユイラ、知らない？」
男女の別さえ感じられない固い声で、斉藤さんが尋ねた。
雪美は、わけがわからぬという顔で、ぽかんと、斉藤さんの顔を見ている。きっと心はまだ、計算の森にでもいるのだろう。
斉藤さんは、猛禽のように雪美の部屋に踏み込み、ベッドの布団を剥ぎ取ったりしている。
「ユイラ！　ユイラ！」
イヤーマフをつけたまま、雪美は、身じろぎもしない。

閉められた窓の外から、今夜は、ディズニーのアフリカ太鼓の音が、暴力的にどんこどんこと流れ込んできていた。
斉藤さんの様子は、なんだかおかしいけど、この際だと思って、私は言った。
「ねえ、斉藤さん、聞こえる？　お宅でかけてる音楽ね、この子の勉強部屋まで聞こえるのよ。ちなみに、うちの窓は、閉まってるから。防音のカーテンもしてある」
「ほんとだ」
斉藤さんはうつろな目で、私を見つめた。
「道で遊ばせる子どもらの声もね。雪美の勉強の妨げになるのよ。お互いさま、と言ったって、うちは、ここまでのことは、お宅にしてないはずよ」
もっともっと言いたかったが、斉藤さんは、聞いていないようだった。
だが、これだけは、斉藤さんの耳に手をかけて穴を広げてでも、言って聞かせたかった。
「雪美は、もうすぐ、受験なのよ」
「ババァの方が、うるさいんだよ。毎晩毎晩、うるさくないか、って聞きにきて」
「なんだ。雪美。聞こえてるじゃないの」
「当たり前でしょ」
「ひどい耳当てね。高かったのよ、それ」
「……」
「初めてのインターネット通販だったから、お金を振り込んでから、品物が届くまで、どれほどはらはらしたことか」
雪美は、黙って肩をすくめた。
部屋に子どもがいないとわかったからか、斉藤さんは、さっきとは別人のように、ぼーっとしていた。活動的な凶暴さは、すっかり陰をひそめている。
私は、斉藤さんを促した。

「さ、行きましょう」
「セイヤ！」
突然、斉藤さんが低くつぶやき、窓をがらりと開けた。
アフリカ太鼓の音が、たちまち大音量となって部屋の中に流れ込んできた。それに負けじと、赤ん坊の泣き声が重なる。
真向かいの窓は、相変わらず開けっ放しである。
私は咳払いをした。
「斉藤さん。ね？　ユイラちゃんはうちにはいないわ。あなた、ご主人はどうしたの？　セイヤ君は、一人で置きっぱなし？」
「お兄ちゃんとお姉ちゃんたちがいる」
斉藤さんは、床に崩れ落ちた。
「いない。いない。ユイラは、ここでもなかった……」
悲痛な声で泣き出した。
「ママー！」
隣家の窓に、小さな頭が五つ並んだ。
「マーマァ！」
母と赤ん坊を含む子どもたちと、合わせて六人の泣き声が合わさり、凄いことになった。
私と雪美は、目を見合わせた。

第三章の3

警察がやってきたのは、次の朝、子どもたちが登校した後のことだった。

テレビドラマで見るように、年配のと若いのの、二人組みだった。年配の方に中年の渋みがなく、若い方もちっとも初々しくないのが、ドラマと大きく違う点だった。ちょっと、がっかりである。

営利誘拐を警戒しているのか、覆面車だった。パトカーだったらよかったのに、と、ちらっと思った。

とはいえ、生涯初めての警察の来訪に、私はおおいに興味を持ち、家の中でお茶を、と誘った。だが、年齢差のある二人の男は、ちらっと目を合わせ、勤務中ですから、と断ってきた。

テレビドラマの定石通りだ。私は、ちょっと晴れがましく思った。

玄関先での、ひそひそ話となった。年配の方が、口火を切った。

「ユイラちゃん、ゆうべは、とうとう、帰らなかったそうです」

「まあ。それはそれは。お母さん、さぞや心配してるでしょうねえ。ゆうべも、半狂乱でしたもの」

さすがに、子どもが帰らないというのは、こちらも心配になる。

たとえどれだけ大勢いても、帰らない子がいるというのは、心配なことだろう。私には、そんなにたくさんの子どもがいないので、本当のところは、わからないが。

あれから、斉藤さんは、もう少し、家で待ってみると言って、帰っていった。

ついていこうかと思ったが、小太りのお父さんもそのうち帰るだろうし、とにかく親戚だか友達だかの多い家だから、私の出る幕ではあるまいと、自重したのだ。

結局、警察に届けたらしい。

年配の刑事は、この寒いのに、夏物もかくやと思うばかりの薄い生地のスーツの前を掻き合わせ、貧乏ゆすりしながら、話を続けた。

「昨日、御昼過ぎ頃、幼稚園に通う子を迎えに行ってから、斎藤さんは、子どもたちと、家の外にいたそうです」
「午前中も、外にいましたよ。この寒いのに、プラカーに子どもを乗せて、うちの前を、がらがら、行ったり来たりしてましたから」
「なるほど。で、斎藤さんのお母さんは、学校から帰ってくる上の子たちを出迎え、その友達も交えて、みんなでずっと外で遊んでいた、と」
「ええ、それはそれは賑やかで、動物園状態？　特に、お母さんの、楽しそうなはしゃぎ声が」
「他に大人は？」
「そういえば、昨日は、お父さんの姿も見かけなかったわねえ。たまにママ友がいることも、あるんだけど、昨日の斉藤ママの遊び相手は、子どもだけだったわよ。まあ、ママ友がいればいるで、これがまた、声が響き渡ってねえ。この辺の家々の壁にぶつかって、こだましてるわよ。親になった女の声って、どうしてこう、よく響くのかしら。必ずしも小さい子の親ばかりじゃなくて、結構いい歳のオバサンの声も、よく響くでしょ？　私ね、これは、縄張りの主張じゃないかと思うの。昔、ヒトが、サルだった頃……」
「あー、それで、昨日のことですがね」
無遠慮にも刑事は、私の思索を断ち切った。
「夕方五時頃、斎藤さんがふと気がつくと、一番上の、ユイラちゃんがいない。友達の家にでも行ったかと思って待ってみたが、夜になっても帰ってこない」
「結局、友達の家にもいなかったんでしょ？」
「それで、心配になった斉藤さんは、お宅を訪れた、ということですが」
「八時半過ぎだったかしらねえ。テレビで遠山の金さんがね、町人のかわいい娘に……」
「斉藤さんは、ユイラちゃんは、絶対、お宅にいる、と確信したそうです。なぜでしょうか」

「知るわけないでしょ。凄い剣幕で、土足で上がりこまれて、後が大変でした。ぞうきんがけが、これがまた……」
「ほほう、土足で。相当、焦っていらっしゃったんですなあ」
「普通じゃなかったですよ。二階にも、ずかずか上がっていって、子ども部屋まで覗くんだから」
「お子さんがいなくなったんです。無理もないでしょう。ユイラちゃんは、お宅のお子さん達と、仲が良かったのですか」
「お子さん達？」
「子ども用自転車が二台、外に止めてあったものですから」
この刑事、少しは見る目があるようだ。
「うちの子たちは、全然遊ばないわよ。あちらは引っ越してきたばかりだし、子どもがたくさんいるわりには、うちの子たちとは、年が、合ってないみたいだし」
「あなたが、遊ばせなかった？」
「まさか。刑事さんは、ご存知ないのかもしれないけど、今の子って、学年が違うと、もう、遊ばないんです。姉妹の友達は、違うみたいですけどね。だから、斉藤さんのお子さん達には、自前の友達が、大勢いるわけですよ。あれ、親戚の子だったかな？　いつも、七～八人で遊んでます。うちの前の道路で」
「七～八人ですか。それだけの人数の子どもらが、大騒ぎをすると、うるさいでしょう？」
「立てておいた掃除機が倒れますね。いえ、昼間なら、いいのよ。でもね、うちには、受験生がいるのよ。どちらかというと、夜ですよ、静かにしてほしいのは」
「夜もうるさい？　それは、大変ですね」
二人の刑事は、目配せをした。
「ところであなたは、包丁で人を脅したことがあるでしょう」
「包丁？」
「子どもが窓から覗いているのを知っていて、包丁を突き出して見せたことは？　どうです、心当たりがあるでしょう？」

「あるわけないでしょ。それじゃ、異常者じゃない。っつーか、もうすでに犯罪者だわね。脅迫罪？　ひょっとして殺人未遂も適用されるかもしれない。わあ、怖い。うちの前の道路は、通学路なのよ。すぐに逮捕して欲しいものだわ」
「……」
刑事は一瞬息をのみこんでから、どこか自信なさげにくちごもりつつ言った。
「斎藤さんの三番目の女の子が……。エ、エレ……」
「エレナちゃん？　変な名前よね、年取ったら、どうするつもりかしら。エレナばあちゃん？　変だわ」
「そのエレナちゃんが、前に、窓からお宅を覗いていたら、包丁で脅されたと言っているんですよ」
「包丁は、物を切る為の道具でしょう？　人を脅すなんて、あなた、失礼な」
「でも、エレナちゃんが言うには、台所で下を向いていたあなたが、不意に顔を上げて、窓から覗いていたエレナちゃんに包丁を向けて、にやりと笑ったとか……」
　とすると、隣の子は、うちの台所と向かい合った窓から覗いていたのだ。
頭の中で、何かがかちゃりとはまった。
「それはね。包丁を研いでいたの。よく研げたかどうか、光にかざしていたんだわ」
「包丁を研ぐ？」
にきび面の若い刑事が、すっとんきょうな声をあげた。私は溜息をついた。
「包丁はね、時々研がなくてはならないの。最近は、切れなくなると、すぐ捨ててしまって新しいのを買う人が多いって、砥石の実演販売のおじさんが言ってたけど、もったいないことするわよねえ。ツクモ神の祟りにあうわよ」
「ツ、ツクモ神って……？」

「お前は黙ってろ」
生活の悲哀漂う中年刑事がしゃしゃり出て、再び主導権を握った。どちらも好みではないのだが、どちらかと言えば、私は、若い方としゃべっていたかった。なにしろ、家にこもっていると、子ども以外の若い男と話す機会など、めったにない。
「しかし、包丁を、隣の家の子どもに向けちゃ、ダメでしょう」
「あのね。私は、エレナちゃんがのぞいているなんて知りませんでしたよ。だいたい、人のうちの中を覗いたら、駄目じゃないですか。いったい、斎藤さんはどんなしつけをしているのやら」
二人の刑事は、目を合わせた。理解不能のアイコンタクトは、一瞬で終わった。
素早い瞬きの後、今度は若い方が、不屈の闘志を目に蘇らせた。
「ところで、あなたは最近、車に乗り始めたそうですね」
「子どもの、塾の送り迎えに、必要ですもんね。だいたいねえ、あんな遅い時間に子どもを、しかも女の子を、一人で帰らせるわけには……」
「道路で遊んでいる子どもたちに、ひき殺してやる、と、叫んだことがあるとか」
「え？　聞こえちゃってた？　いやねえ、ひとり言ですよ」
「物騒なひとり言ですな。近所の人が、複数、聞いています」
「あのね。そもそも子どもを、道路でなんて、遊ばせるもんじゃなのよ。けっこう飛ばしてる車もあるし。あの子達、クラクションを鳴らしても、どいてくれないんだから。親が見てるったってね。いつもってわけにはいかないんです。親が見てない時のことを考えて、子どもは、遊ばせなくてはならないの」
「ほほう。含蓄のあるお言葉ですな」
褒められて、私は嬉しくなった。
「まず、お母さん自身が、子離れしなくちゃね。子どもは、次第に親から離れて、地域のルールに従って遊ぶもんです。口うるさい人のいる家の前では、絶対、遊ばないわよ。五分も歩けば、公園も広

場も、あるんですからね」
しゃべりつつ、そういえば、ゆうべ、斎藤さんも、私がユイラちゃんを車ではねてどうのこうのと言っていたなと、思い出した。
まったく、どうなっているというんだ。
老いも若きも、刑事たちは、相変わらず鋭い眼差しで私を見つめている。年嵩の方が、魅力のないしわがれ声で言った。
「それで、あちこちに、手紙を出したわけですね」
「そりゃ、私は運転が下手よ。でも、ちゃんとペーパードライバー講習に行ったじゃない。すんごいお金をかけて、ちゃんと運転できるようになったんだから。あなた達と違って、若いハンサムの教官がいるから、聞いてみたらいいじゃない。人をひき殺すなんて、あなた、……え？　手紙？」
「斉藤さんのお子さんの通う学校や、幼稚園、それから市役所、警察……」
目から鱗が落ちた気がした。
騒音に悩んでいたのは、私だけじゃなかった……？
「そんなにたくさんいたんだ。斉藤さんが迷惑だった人」
「全部、同じ人でしょう。同じ文面の手紙が、斉藤さんの子どものいる学校や幼稚園に、ピンポイントで届いています。ここは学区境だし、幼稚園ともなると、よその子がどこに通っているかなんて、普通は、わからないものですよ」
「へえー。やっぱり、他にもいたのね。斉藤さんの声が、うるさかった人」
「あなた、直接、苦情を言ったりは、なさらなかった？」
「だって、あっちは、子ども四人でしょ？　文句を言いに行って、玄関に六人、お母さんを入れて七人も、ずらーっと並ばれたら、何も言えませんよ」
私は、じろっと、刑事たちを見た。
「手紙も、書いてません」
「失礼ですが、ワープロとかパソコンとかは？」

「数々の失礼な発言の中で、今のが一番失礼な発言ね。パソコンくらい、打てますよ」
「手紙は、印刷されたものだったのです」
「ははん。パソコンとプリンターなら、上橋さんちにもあるわよ」
「上橋さん？」
「斉藤さんの、うちと反対隣。夏の終わりに、酒井さんが、夜遅くまで道路遊びをしてうるさいって通報してきた人、いたでしょ？」
「え？　酒井さん？」
「今の斉藤さんは、つい最近、引っ越してきたの。その前に住んでたのは、酒井さんって一家。その前は……」
「お隣は、随分入れ替わりが、激しいんですね」
「あなたね。それくらいは、調べてから来なさいよ。　駄目ね、警察は。最近、検挙率、下がってるんですって？」

その上橋さんが、うちのチャイムを鳴らしたのは、昼少し前のことである。
私は、夕食の買い物に出かけるところだった。夕方になると込むので、いつも、空いている昼の時間帯を狙うのだ。
「ねえねえ、聞いた？　斉藤さんのこと」
コートを羽織った私を、家の中へ押し込むようにして、斉藤さんが言った。
仕方なく、私は答えた。
「聞いたわよ。ユイラちゃん、帰ってないんですってね」
「その話じゃなくって」
「え？　子どもが行方不明よりも、重大な話って、あるの？」
「ユイラちゃんのことなら、知ってますよ。遅くまで一緒に探してあげて、でもいなくて、だから、ひょとしてお宅にいるんじゃないかしら、って教えてあげたの、私だもん」
「やっぱりねえ。斉藤さん、半狂乱だったわよ。私が車で跳ね飛ば

して、隠してるって思ったみたいよ。警察だって、訪ねて来たんだから」
やっぱりこの人と付き合うのは、やめよう、と、本心から思った。
「あなただって、私が、酒井さん一家を追い出した、って、刑事に言ったでしょ」
「前に、私に向かって、同じことを言ったのは、上橋さん、あなたでしょ。しかも、メンと向かって」
「陰で言うより、いいじゃない？」
「よかないわよ。それに私は、酒井さんがうるさいって警察に苦情を言ったのは、上橋さんだって、言っただけ」
「やっぱり、あなただったんだ」
「事実でしょ」
しばらく、お互いに、にらみ合った。
上橋さんが、蒸し返す。
「あなたね、車を運転しながら、悪態吐くからよ。お向かいの永瀬さんだって、聞いてたわよ」
「仕方ないじゃない。ただでさえ、運転、怖いのに、子どもらが、ちっとも、よけないんだもん」
「だったら、車になんか、乗らなきゃいいじゃないの」
「そういうわけには、いかないの」
「ふん。じゃ、やっぱり、あれから斉藤さん、お宅に行ったんだ」
「やっぱりって、あなたねぇ！　……斉藤さんはなんでまた、ユイラちゃんがいないからって、まず、上橋さんちへ行ったわけ？」
「うちが信用できるしっかりした家庭だからよ。決まってるじゃない」
お宅と違って、とは、さすがに上橋さんは口にしなかったが、私の耳には、はっきりと聞こえた。
「あれは、七時過ぎだったかな。しばらく、一緒に、あちこち探してあげてたのよ。でも、ほら、うち、おばあちゃんがいるでしょ？
あまり長く、放っておけなくて」

「それにしても、あんなにたくさん、ママ友だか親戚だかが、出入りしてるのに。なんだってまた、わざわざ、上橋さん……？」
イジワルなのに、は、口の中で言う。
「一通りは、電話をかけたみたい。でも、どこにもいなかったって」
「誰も、一緒に、探してくれなかったんだ」
「そういうことになるわね」
「かわいそう、かも……」
ゆうべ、家に戻ったら、ママ友の誰かにでも、応援を頼むのかと思たが……。
「お宅だけじゃなくて、幸島さんや永瀬さんにも聞いてみたら、って言ったのよ」
上橋さんの口調は、どこか、弁解くさかった。
「でも、幸島さんは共働きで帰りが遅いし、永瀬さんは、灯りがついてたけど……」
幸島さんは斉藤さんと反対隣の家で、永瀬さんは、向かいの家である。
「ああ、お兄ちゃんしかいなかったんでしょ。奥さんはパートだし、あのお兄ちゃん、引きこもりだから」
上橋さんは、頷いた。
「そうなのよ」
「ところで、斉藤さんの、お父さんは？」
「その話よ、私がわざわざ来たのは」
「ヒマだからじゃなかったの？」
「失礼ね。忙しいわよ。寝たきりの、おばあちゃんがいるからね。あのね、穂波さんが、見たんだって」
共通の、ウォーキング友達である。もちろん、穂波さんも、今では、ウォーキングを止めている。理由は……。言わずもがなである。
「見たって、何を？」
「うふふ」
上橋さんは、不気味に笑った。

「斉藤さんのお父さんがね。女の人と歩いてたの」
この手の話に、私は、取り合わない。
「そりゃ、人類の半分は、女だからね」
「腕組んで、夜の繁華街を、しっとりと……」
「斉藤さん母だったんじゃないの？」
「違うわよ。あのお母さんが、子どもをおいて、外出できるわけ、ないじゃない」
「それもそうね」
「穂波さんが言うには、奥さんよりも、遥かに、若かったって」
「また、物好きな……」
「おミズじゃなくて、普通の感じの人だったって。かえって、タチが悪いわね。タデ喰う虫も好き好きって、やつ？」
「じゃ、ひょっとして、ゆうべも？」
「ゆうべどころか！　ここ数日、帰ってないわよ」
「なんとまあ」
「隣にいて、あなた、何にも、気がつかなかったの？」
「気がつくわけ、ないでしょ。昔の長屋じゃ、あるまいし」
「長屋とおんなじよ。声、筒抜けだもん」
「斉藤さんも、窓、閉めとけばよかったのにね」
そうすれば、父親が帰らないなどという重大な事実が、隣人……しかも、意地悪な方……に、漏れることはなかったのに。
確かにうるさい一家ではあるが、しかし、私の家には、そこまで、詳細な情報は、聞こえてこなかった。
つい、言ってしまった。
「あなた、この寒いのに窓開けて、聞き耳たててたんじゃないの？」
「ま、失礼ね。そんなヒマ、ありませんよ。私は、おばあちゃんの介護で、死ぬほど忙しいんだからっ」
憤然と、上橋さんは、帰っていった。

夜、真紀子から電話があった。
「それは、心配ね」
ユイラちゃんの話をすると、真紀子の声が、曇った。
「でも、静かになったでしょ」
「あなたね」
私は呆れた。
「隣の子が行方不明という時に、なんて不謹慎な」
「だって、うるさい、うるさいって、相当、悩んでたみたいだから……」
「それは、雪美の勉強の妨げになるからです」
「受験にも、反対してたくせに」
「あの子は、優秀だから、レベルの高い学校へやるのは、親の義務」
「ほ。凄い変わりよう」
「それにね。ちっとも静かでないの。さっきから、ほら、聞こえる？」
「そういえば、なんだか、人の声？」
「海を渡って、フランスにまで聞こえちゃうの？　すごーい。大喧嘩よ。斉藤さんの、お父さんとお母さんの」
怒鳴り声、罵声。
それに、残った子ども三人の泣き声が、唱和する。
「この騒音の中で、雪美は、勉強してるの。すごい集中力よ」
「そりゃ、どんな学校でも、合格間違いなしね」
「ところであなた、何か用だったんじゃないの？　あなたの方から電話してくるなんて、滅多にないことだもの」
「あ、そうだった。急に休暇が取れてね。一時帰国しようと思うの」
「へえ。いつ？」
「明日の飛行機に乗るわ」
「全く、あなたって人は、いつも、突然……。こっちの都合ってものを、考えたことはないの？」
「どうせ、ヒマでしょ？　専業主婦だもん」

「悪かったわね」
ヒマだから訪ねてきたんじゃなかったのかと言った時の、上橋さんの顔が思い出され、悪いことを言ったかな、と、ちらりと思った。

第四章（前書き）

仕掛け発動です。
この章から読み始められると、
ワナに、うまく、はまれません……。

第四章

第四章

近藤雪美が塾の日曜特講から帰ってくると、大通りから、家のある通りへ曲がる角のところで、隣家の、幸島さんの奥さんが、タバコを吸っていた。足元には、大きなシベリアン・ハスキーが蹲っている。

幸島さん夫婦は共働きで、夜遅くや朝早く、家の前の道路で、シベリアンハスキーのタローと遊んでいる。リードを外して、犬の好きなように、走らせている。

犬友達が、一緒のこともある。

眠っている時間なので、雪美の家族は、誰も知らない。雪美は、受験勉強で起きていたりするから、時折、窓の外から、掛け声や、大人がばたばたと走る音、犬用のボールが、きゅっきゅっと鳴る音が聞こえたりして、気がついたのだ。

「あら、ユキちゃん、お帰り」

煙を吐き出して、幸島さんの奥さんは、言った。

「こんにちは」

雪美は、軽く会釈する。

雪美のことを、「ユキちゃん」と呼ぶのは、この夫婦だけである。雪美は、それが、ぼんやりと不快だ。

幸島さん夫婦には、子どもがいない。休日には、大きな車で遊びに行ったり、留守なことも多い。

今日は、こんな、何もないところで、何をしているのだろう、と、雪美は、不思議に思った。

大通りからの曲がり角で、カーブミラーがある以外、本当に、何もないのだ。

雪美の心を見抜いたように、幸島さんの奥さんは、苦笑した。

「関所がね……」
「あ……」
「上橋さんと、お宅の……」
幸島さんは、言葉を濁した。
雪美は、走って逃げた。
雪美だって、外出先から帰ってきて、家の前に、上橋さんがいると、うんざりする。ましてや、おばさんたちの井戸端会議などが開催されていたりなんかしたら……。
幸島さんは、まだ若いし、内気な人なので、それだけで、休日の外出を取りやめることもあると、前に言っていた。
それに、道路で遊ぶ子ども達も、いやだと、吐き捨てるように、雪美に言った。挨拶しても、無視されるし、子どものいない身には、どういう顔で、脇を通っていいか、わからない、と。
雪美は道路でなんか遊ばないので、そんなことを言われても、お門違いというものだった。きっと幸島さんには、近所の子どもは、みんな一緒くたに見えるのだろう。
だが、「関所」に関しては、ソフトな苦情だったのだろう。雪美が子どもだったから、言えたのだ。
なにしろ、「関所」には、雪美の家族も、参加しているのだから。
今日も、きっと、ユイラちゃんがいなくなったことを、延々、しゃべっているのだろう。それとも、連日の、斉藤さんの、ものすごいケンカについて？
そこを通って、家に入らなければならない。
……ああ、憂鬱。
だが、家の前には、誰もいなかった。
玄関の鍵も閉まっている。
買い物の途中で、上橋さんに捕まったのを、なんとか振り切ったのだろう。
拍子抜けした思いで、門まで戻る。
門柱の陰に、合鍵が、隠してあるのだ。

珍しく、斉藤さんの家は、窓が閉められ、しんとしている。幸島さんは、さっき、大通りにいたから、こちらも、静かだ。
門柱をまさぐっていると、呼ばれた気がした。
家の前の道路には、誰もいない。子どもたちも、背後霊のような、そのお母さんたちも。
こんなことは、初めてかも。
きょろきょろしていると、お向かいの二階の窓で、何かが揺らぐのが見えた。
いつも締め切りの部屋だ。
白い顔が、僅かに覗いた。
あれ……。
脳に引っ掛かりが生じたとき、甘酸っぱい、強い匂いがした。
鼻が冷たい、と思ったら、雪美の全身から、力が抜けた。

斉藤ユイラは、泣いていた。
御飯は、ちゃんともらえる。永瀬さんのおばちゃんは、ユイラのママよりも、料理が上手だった。冷凍食品やレトルトなど、チンするだけのおかずなど、一度も出てはこない。
「ごめんね、ごめんね」
二階の、ユイラの所に食事を運んで来るたびに、おばさんは、謝った。
けれども、決して、ユイラを外に出してくれようとは、しなかった。
そんなおばさんを、お兄さんは、時々、ひどく殴った。
それが、ユイラには、一番、怖かった。
お兄さんは、いつも、ユイラと一緒の部屋にいた。眠るときも、だ。
けれども、決してユイラに話しかけようとはしなかった。それどころか、ユイラの方を、見も、しなかった。

手足を縛っていた縄は、三日目には、解かれた。
その頃には、ユイラの体は、恐怖に凝り固まってしまって、逃げ出すことなど、到底、考えることさえ、できなくなっていた。
あの日。
ママと、マリンと、マリンの友達と、ハルンとアムトと、アムトの友達と、エレナとセイヤと、もっといたかもしれないけど、みんなで遊んでいた時、ユイラは、お向かいの永瀬さんの塀の上に登ってみた。
塀は、二メートルほどの高さで、幅は、ちょうど、ユイラの片足くらいの広さだった。
ゆっくり歩いてみると、学校の平均台のようで、楽しかった。学校のより、高さがずっとあったので、スリルがあって、おもしろい。
すぐに、妹のマリンが真似をしてよじ登る。よろよろしていて、ろくに歩けない。マリンの友達は、下で見ていた。
一番下のセイヤが、ユイラを指差して泣き出した。
自分も、あの上に上りたい、と言っているのだ。
あんまり泣くから、ママが抱き上げ、下から支える。
得意そうなセイヤは、ちょっと、憎らしかった。
へっぴり腰のマリンは、登った場所で立ち往生していたし、つまらないので、ユイラは、一人で、塀の上を、ずんずん歩いていった。
すぐに塀は、かくっと曲がり、敷地の奥の方へと続いていった。
ちらとママの方を見たが、セイヤにかかりきりだったので、ユイラは、そのまま、奥へ進むことにした。
初めて見る、永瀬さんの庭だ。
草ぼうぼうで、どっかその辺の、荒地のように見えた。
家も古く、窓は締めっきりである。
誰もいないようだ。
平均台歩きにもだいぶ、慣れた。
随分、早く歩ける。
庭の奥まで行き着いた。

そこでまた、九十度の曲がり角があり、家の裏手へと、塀は、続いている。
家の陰になっていて、ちょっと、寒かった。でも、もう一回曲がったら、道路へと戻れるのだろう。
誰かの視線を感じた。下から見上げているような……。
まさかね。
ユイラは、スカートを上から押さえつけた。
日陰の塀は、ちょっと、湿気っていた。
あ、と思った時、ユイラは落ちていた。
初めて見るお兄さんが、そこにいた。
お兄さんは、言った。
「空から、女の子が落ちてきた」
そのままユイラは、家の中へと、連れ込まれた。

誰かの泣き声が聞こえる。
初めは、猫の声かと思った。にゃーにゃー、にゃーにゃー、うるさい。
いいかげん、静かにしてよ。漢字が覚えられない……。
そう思った時、だんだん焦点が合ってきて、雪美は、知らない部屋にいるのに気がついた。
無造作に、安物のカーペットの上に投げ出されている。なぜ安物かというと、体の下に、フローリングが痛かったからだ。掃除もろくにされていないとみえて、立て続けに、くしゃみが出た。
わ。喘息の発作がでちゃう。
一気に、意識が戻った。
雪美の隣の猫は、人間の女の子だった。うつむいて、泣いている。
「ユイラ、ちゃん？」
女の子は、ぱっと、顔を上げて言った。
「死んでなかったの？」

「……ここは？」
「永瀬さんち。お向かいの」
「ああ、そうだった」
雪美は、永瀬さんの家の、いつもは締め切りの窓から、白い顔が見えたのを、思い出した。
あれは、ユイラちゃんの顔だった。
「何してんの、こんなところで」
「連れてこられたの。おうちに帰りたい」
「帰ればいいじゃん」
「外に出られないの」
「なんで？」
ユイラちゃんは、必死に考えているようだった。
雪美は体を起こした。少し、頭がぼんやりするが、どこも痛くない。
「帰ろ。私、勉強しなくちゃならないし」
ユイラちゃんの体が、固くなった。
雪美の背後を、じっと見ている。
雪美は、振り返った。
そこには、若い男が立っていた。
白い四角い顔、まばらな無精ひげ、四角く切った、奇妙な髪型……。
「誰……？」
男は言った。
「永瀬一朗。ここんちの、お兄さんさ。この辺のババアどもには、引きこもりって、言われてるだろ」
男は、不気味に笑った。いやな匂いがしそうな、笑い顔だった。
「女の子が、二人になったね……」

希望が丘北交番は、大騒ぎになった。

三日も行方不明だった少女が、自ら、やってきたのだ。
「私のおうち、誰もいなかったの」
少女は、泣きながら言った。
「置いてかれちゃったのかな」
泣きじゃくる少女を宥めるのには、時間がかかった。
……おうちの人はね、ちょっと、お留守してるだけなの。すぐに迎えに来るよ。
婦人警官が、優しい声で、諭した。
今までどこにいたのか。誰といたのか。何があったのか。
聞きたいことは、山ほどあった。
しかし、少女は、著しく、混乱しているようだった。
何を聞いても、はかばかしい返事が返ってこない。ただ、家に家族がいなかったと、泣くばかりだ。
ユイラは、一枚の、Ａ４の紙を持っていた。
その紙には、大きな字で、
「斉藤ユイラは返す。代わりに、近藤雪美を預かった。次は、雪美の母と交換だ」
と、印字されていた。

真紀子は、久しぶりに、日本に帰ってきた。
十ヶ月ぶりの日本である。成田に降り立った途端、肌の露出した部分が、湿気を含んだ重い空気に、潤されるのを感じた。夏なら不快に感じた筈だが、今の季節は、懐かしさを感じるほどに、ほっとした。
手違いがあったとかで、なかなか、荷物が到着しない。
待合コーナーで待つことにした。大きなテレビがあったからである。
その、映像の、クリアな精確さに、真知子は、驚嘆した。画面は、薄いデジタルである。動く映像を写す、掛け軸のようだ。古式ゆか

しい日本の、最新技術だと、真知子は、誇らしく思った。
大きな平たい画面に、何の前触れもなく、見知った顔が映った。
つばを飛ばし、地団太を踏みつつ、しゃべりまくっている。小柄な体に、怒りが満ち溢れているのがわかる。
信子だった。
向かいの家の窓を指差し、決死の形相で、入っていこうとしている。警官が、何人も、よってたかって、引き止めている。
真知子の手から、荷物引換券が、ぱらりと落ちた。
画面右上には、「スクープ！　誘拐・拉致監禁事件中継中」という、大きいテロップが入っていた。
スイッチを入れたばかりの携帯電話が、ブーブーと、激しく振動し始めた。

「しかし！」
大急ぎで立てられた、少女連続誘拐事件本部の警部は、唾を飛ばして叫んだ。
相手は、本部長である。
「危険ではないですか？　少女の母親を犯人の元へとやるなんて！　虎の巣に送り込むようなもんです！」
「女の子を、見殺しにするわけにはいかんだろうが。マスコミが、大勢、取り巻いているんだぞ。ったく、なぜ、マスコミが押し掛けてくるんだ！」
「雪美ちゃんがいなくなったと、こちらが把握する前に、マスコミは知ってたんです。どうやら、斎藤ユイラちゃんがいなくなった晩、母親と一緒になって探した上橋という人は、雪美ちゃんの家とも、頻繁に行き来があったみたいです」
「上橋……」
「近所関係が入り組んでますねえ。斎藤家を挟んで、西が上橋家、そして、東隣の家が、ユイラちゃんと入れ替わりに誘拐された雪美

ちゃんの家です」
「帳場（捜査本部）が立ったばかりの頃は、斎藤家の東隣の家の女が怪しいということだったが……」
「今時、包丁を研いでたり、非常に危ない、車の運転をしたりしていたものですから。実際、雪見ちゃんが受験ということで、斉藤家の賑やかさを、よく思っていなかったようです」
「騒音トラブルか。よくある話ではあるな」
「スギさんとツルヤマが話を聞きに行きました」
「だが、違ったな。焦らなくてよかった。その上、雪美ちゃんは、第二の被害者になっている。誤認逮捕などという事態になったら、目も当てられない……」
解放された斎藤ユイラの証言から、犯人は、この三軒と通りを挟んで向かいにある永瀬家の二男、一朗の犯行とわかったのである。
永瀬家の周りは、今、マスコミが、びっしりと取り巻いている。
「じゃ、その、上橋という人物が、マスコミにリークしたというのか？」
「リークというか、ご近所の広告塔らしいですよ。その上、有名なクレームおばさんで、交番にもしょっちゅう、苦情を申し立てていたようです。ボールがうるさい、犬がうるさい、死にかけた猫がいる……」
「死にかけた猫？」
「三丁目に、三味線の師匠がいるんです。渋皮の剥けた、ちょっといい、年増だそうです」
「……。では、情報漏洩は、警察の責任ではないな」
「永瀬一朗の両親は外出中でしたので、警察署に同行してもらい、説得の電話をかけさせました。一朗は、電話には出なかったのですが、もう少し、時間を下さい」
「ユイラちゃんが、三日も監禁されてても、気がつかなかった親だ。説得なんて、無駄だ」
「手順を踏まないと！　それに、あの狭い家で、全く知らなかった

なんて、ありえないと、自分は、思っております」
「知らなかったは、言い訳だろうな。両親は、屈服させられているんだ。ひょっとして、家庭内暴力もあったのかもしれん」
「だとしたら、ますます、危険じゃないですか」
「その危険な中に、少女が一人、監禁されているんだぞ」
「だからって、母親まで送り込むことはないでしょうが！」
「本人が、行くと言っているんだ。実の母親だ。任せようじゃないか……」

テレビカメラは、狭い私道を、ゆっくりゆっくり歩く、母親の姿を捉えていた。
娘の為に、自ら志願して、囚われの身になりにいく、母親。
濃茶のスラックスに、ベージュのコートを羽織っている。ゆっくり、ゆっくり、歩いている。
永瀬家裏側の家の、ベランダを借りた、テレビ局のカメラが、ズームになった。
母親の顔が、アップになる。
近藤真紀子の顔が、全国に流れた。

第五章（前書き）

引き続き、ネタを割っています。
また、
下品な表現が少しあります。

第五章

第五章

真紀子は、警察から渡されていた鍵で、玄関のドアを開けた。
中は、しんとしている。
「来たわよ。雪美の母親よ。雪美を、返して！」
背後で、バネの力で、ばたんと、ドアが閉まった。
「雪美！　雪美！」
「お母さん……」
弱々しい声が聞こえた。
二階からだ。
黒のローファーを脱ぎ捨て、真紀子は、ためらわずに、階段を登っていった。
二階の、南向きの、一番いい部屋に、雪美はいた。
だがそれは、想像していたのとは、およそ、かけ離れた姿だった。
雪美は、回転椅子に後ろ向きに座り、背もたれに顎を乗せて、足をぶらぶらさせていた。
拘束されている様子は、全くない。
「来てくれたんだ」
意外そうに、雪美は言った。
「あ、当たり前、じゃない……」
真紀子は絶句した。
雪美の足元では、両手両足を、ガムテープでぐるぐる巻きにされた男が、転がされていた。
口にも、大きく、ガムテープが貼られている。
何の説明をするでもなく、雪美は、言った。
「今まで、私の用事で来てくれたことなんて、なかったじゃない？」
条件反射のように、真紀子は、答えた。

「仕方ないじゃない、仕事があったんだから」
「そうそう、仕事、仕事」
歌うように、雪美は言った。
「いっつも、いっつも、仕事があるんだよね」
「あなた達の為に、働いているのよ。お金を稼ぐのは、あなた達の為。少しでもいい教育を、つけさせてあげたいの」
「そのコート、プラダだよね」
雪美は意地悪く笑った。
「指輪はブルガリ。小学校の友達のお母さん達は、そんなの、持ってないよ」
「それは、公立だからよ。世の中にはね、雪美。もっと違う世界もあるの。そりゃ、専業のお母さん方よりは時間は取れないけど、私は、いつだってあなたのことを考えているのよ」
「やめてよ」
初めて、雪美の声に感情がこもった。
深くこもった、怒りの声だった。
「何を言っても、仕事、仕事って。私のことも美弥のことも、放りっぱなし。ご飯も作ってもらえない。服も、何日も、洗ってもらえない。だから、小学校四年の時から、臭いって、いじめられてた。知らなかったでしょ？」
「そんな……」
「勉強を見てくれたこともない。参観日に来てくれたこともない。運動会も文化祭も、ちょこっとのぞくだけ。雨が降って延期になると、もう、来ない。……なぜ私が、中学受験したいと言ったか、わかる？」
「それは、やりたい仕事に出会う為。よりよい人生を歩む為」
「ばっかみたい」
雪美は噴き出した。その拍子に、ぶら下げた脚が、転がされた男の頭を蹴り、男は、うめき声を上げた。
「ね、雪美、その人……」

「私が受験をするのはね、専業主婦になる為だよ。お金をたくさん稼ぐ男を捕まえて、楽して暮らす為。いい学校、いい職場を選ばないと、そういう男は、いないからね」
「許さない！」
異様な状況も忘れ、真紀子は、叫んだ。
自分の母親のような、つまらぬ人生を歩ませるために、専業主婦として家庭に埋もれさせてしまう為に、塾に通わせ、お金をかけてきたわけじゃない。
辛い仕事を、続けてきたわけじゃない。
「自立しなきゃ、だめよ。そんな、男の腕にぶら下がって生きるような娘に、育てるつもりは、ない」
「お母さん、仕事、辛い辛いって、言ってたよね。子どもの為に、頑張って働いてるって。……なぜ、そんな辛い道を、自分の娘に歩ませようとするわけ？」
「辛いばかりじゃないわ。仕事がうまくいった時の達成感。大勢の人とバランスをとって付き合っていく、充実感。仕事って、素晴らしいものよ」
「やっぱり、楽しいんじゃん。子どもといるより」
真紀子は、咄嗟に、返す言葉が出なかった。
「ピン、ポーン」
その時、場の空気にまったくそぐわないチャイムの音が、のどかに響いたかと思うと、一瞬の間も空けずに、階下のドアが、ガチャリと開く音がした。
こんなせっかちな人を、真紀子は、一人しか知らない。
雪美も同じだった。はっと振り返る。
その人物は、もう階段を上りきり、開けたままのドアの向こうに立っていた。
両手に、大きなレジ袋を、いくつも提げている。
「ちょっと。なぜ、この大事な局面に、祖母を差し置いて、母親を呼ぶの！　雪美の世話をしてきたのは、この、私よ」

「ババァ」
「お、お母さん！」
雪美と真紀子が、同時に叫んだ。
雪美の足元で、ガムテープでぐるぐる巻きになった男が、絶望的なうめき声を上げた。

話は、少し前、まだ、ユイラちゃんが解放される前まで、さかのぼる。
嗅がされた薬品の影響で、雪美は、なかなか手足に力が入らなかった。それを見抜いたのか、男は、拘束しようとはしなかった。それどころか、ユイラちゃんと二人、二階に残して、自分は、階段を下りていった。
ユイラちゃんも、拘束されてはいないが、泣くばかりである。
雪美は、窓を検めた。窓は、二重になっており、レールに不思議な形の器具が取り付けてある。
器具の穴にあう、ネジがなければ、開かないようになっているのだ。
「ベランダは駄目だ。下へ行こう」
ユイラちゃんは、ぎょっとしたように、いやいやをした。
声を励まし、雪美は言った。
「あんな奴、大丈夫だよ。こっちは二人だよ」
だが、ユイラちゃんは、がたがた震えながら、両目から、ぽろぽろ涙をこぼしているだけだ。
声をたてないのが、不思議だった。
これでは、足手まといになる、と雪美は思った。だが、ユイラちゃんを置いて逃げるわけにはいかない。
こんなに怯えているから。
道を挟んで向かいの、雪美の部屋では、外からの音が、非常によく聞こえることを、彼女は、思い出した。

この部屋も同じだとしたら……。
「た・す・け・てー！」
窓に寄り添い、大声で叫んだ。
「だ・れ・かー！」
「無駄だよん」
階下から、含み笑いが聞こえた。何か食べているのか、妙にくぐもっている。
「この家の窓は、ペアガラスなのさ。うるさい隣人達がいるから、引っ越してすぐ、おやじが、全部、付け替えたんだ。一財産かかったってさ。おまえんちと、上橋んちのババアの立ち話も、うるさかったよ。ケルベロスだな、あれは」
「関所じゃないの？」
小さな声で、雪美は毒づいた。
「でも、おかげで、防音は、完璧さ」
「くそっ」
雪美は、舌打ちした。
下から、どら声が続ける。
「ユイラちゃんは、逃げたりしないよ。言いつけは守るよね、ユイラちゃん」
ユイラちゃんは、びくんと振るえ、がくがくと頷いた。
それにしても、ユイラちゃんの様子は、異常だった。ものすごく、怯えている。
雪美は、ユイラちゃんの方へいざっていった。隣に並び、体育座りで、壁にもたれた。
「大丈夫だよ。あんなやつ、怖くないから」
ひそひそと、雪美は話しかけた。
「逃げよう。ユイラちゃんのおうちは、すぐ、お向かいじゃん」
「おうち、……」
「うん。お父さんもお母さんも、ユイラちゃんが帰るの、待ってるよ」

「マリン、エレナ、ハルン……」
「アムト君とセイヤちゃんもだよ。お姉ちゃん、早く帰ってきて、って」
「お父さん、お母さん」
「だからさ、逃げようよ」
「凄い声で、怒ってた」
「あんな奴、怒っても、怖くないよ」
「違う。お父さんとお母さん……」
「怒ってなんかいないよ。ユイラちゃんがいないって、すごく、心配してるよ」
「だって、毎晩、怒ってるのが、聞こえる」
「は？」
「お兄さんが、窓を開けるの。そうすると、聞こえる。お父さんとお母さんの、けんかする声……」
「は？」
「ユイラが悪い子だから。だから、お父さんとお母さんは、けんかするの。リコン、しちゃうって、お兄さんが」
「ユイラちゃん、それは、違う」
「ユイラ、帰る家が、もう、ないの」
「それも、お兄さんが？」
「そう」
「そんなことないから。ユイラちゃんのお父さんとお母さんは、きっと、仲がいいから、けんかするんだよ。だって、エレナちゃんやマリンちゃん、バルン君やアムト君、それに、セイヤちゃんもいるんだよ？　そんだけ子どもがいたら、離婚なんて、できるわけ、ないよ」
「子どもが多すぎて、ユイラは、じゃま？」
「違う。離婚したら、お父さん、養育費、払いきれないでしょ。小さな子どもの親権は、母親に行きやすいんだよ。上の子達を引き取ったとしても、その子らを育てながら、別の所帯に、幼児や赤ん坊

の養育費を送金するなんて、それは絶対、無理。この場合は、慰謝料もあるだろうし」
ユイラちゃんには、よく、わからないようだった。雪美は、なおも、続けた。
「いいじゃん、お父さんとお母さんなんて、どうだっていいよ。ユイラちゃんには、きょうだいが、五人もいるんだよ？　今の日本で、恵まれてると思わない？　六人で力を合わせれば、親なんて、どうとでもなるから。私なんて、美弥しか、いないんだよ」
「そうだね。六人いれば……」
「とにかく、ここを出よう。ね」
「でも……」
ユイラちゃんは、煮え切らない。
雪美は、じれてきた。
「もしかして、お兄さんに、何か、された？」
「何かって？」
「パンツの中に手を入れられたり、おちんちんをくわえさせられたり、おしっことうんちの穴の間に、強引に、突っ込まれたり……」
ユイラちゃんは、また、別の種類のショックを受けたようだった。
その時、上から声が降ってきた。
「よく知ってるな」
雪美は、ユイラちゃんを説得するのに夢中で、お兄さんが階段を上ってきたのに、気がつかなかったのだ。
だが、彼女は、怯まなかった。
「塾で聞いたのよ」
「最近の塾では、そんなことも、教えるのか？」
「この辺の塾じゃないわ。大きな町の塾よ。教えてくれたのは、先生じゃないけど」
「マセたガキは、嫌いだ」
……あたしだって、あんたなんか、大っ嫌いよ。
心の中で毒づきつつ、重ねて、ユイラちゃんに聞く。

「どう？　何か痛いこと、された？」
「塀から落ちたとき、痛かった」
「他は？」
ユイラちゃんは、目にいっぱい涙をためて、首を横に振っている。
「何もされてないのね。でも、されてても、全然、平気。その時は痛くて気持ち悪いみたいだけど、大したことじゃないし。まだ子どもだから、妊娠する心配もないし、こいつ、引きこもってるから、変な病気も持ってないだろうし」
「うるさい！」
お兄さんはいきなり、雪美の頭を張り飛ばした。
「何するのよ！　もうすぐ、受験なのよ！　図形の定理を、忘れちゃうじゃないのっ！」
「お前、俺が、女を知らないと思ってるな。馬鹿にするな。ちゃんとできるぞ」
お兄さんは、ものすごい目で、雪美を睨んだ。
雪美も、負けじと、睨み返す。
お兄さんが、目をそらせた。
「お前はもう、ババアだ」
そして、いきなり、ユイラちゃんに襲い掛かった。
ユイラちゃんを仰向けに押し倒し、のしかかっていく。
「ババアですって？　この、ロリコンが！」
雪美は、逆上した。
手近にあったもので、一番重そうなのは、ノートパソコンだった。
雪美は、それを持ち上げると、ユイラちゃんの上にのっかった、そいつの頭の上に、力いっぱい、振り下ろした。
……。

真紀子が、足元の男を指差した。
「じゃ、この男の手足にガムテープを巻いたのは？」

「私しかいないじゃん。ユイラちゃんなんて、猫の手よりも、役に立たなかったもん。こいつ、伸びちゃってたから、簡単だったわよ」
「あの、『次は、雪美の母と交換だ』っていう文書は？」
「私が書いたの。そこのデスクトップで。それを、ユイラちゃんに持ってってもらったの」
　信子が割り込んだ。
「聞くけどね。なぜ、『雪美の母』なのよ。『雪美の祖母』じゃなく？」
「私の為に、お母さんが来るかどうか、試してみただけだよ。しつこいよ、ババァ」
雪美の言う「ババァ」は、女性の蔑称「ババア」とは違い、語尾が、尻上がりに発音されている。祖母を表す幼児語「バーバ」に近い。幼児が、遠くにいる祖母に、力いっぱい呼びかけたら、こんな発音になるだろう。
　信子が言った。
「ババァはやめなさいって、言ってるでしょ。あなたが、小さい時のことを思い出して、辛くなるから。ほんとに、もっと早く、うちに引き取るんだった」
「勝手なことを、言わないでよ。だいたい、なんで、お母さんがここに来るの！」
「大事な孫の一大事に、のほほんと家にいられるもんですか」
「警察に、止められたでしょ。お母さん、来年、八十歳になるんだよ？　こんなとこに来ちゃ、駄目じゃない。全く、お母さんといい、お父さんといい……。お父さんは、まだ、南米に？」
「さあ、どこだったかしら。シニアボランティアとかいって、あちこち、飛び回っているわよ。仕事人間だったんだから、定年後くらい、一緒にいてくれると思ってたのにね」
「人生を、有意義に過ごすのは、いいことだけど……」
「ま、あの人のおかげで、私も、専業主婦をやっていられるわけだから」

「ちょっと。この子、将来専業主婦になるって言うのよ。いったい、どういう教育をしてくれたのよ、お母さん」
「まあ。家のことをきちんとこなすのは、立派なことよ」
「専業主婦なんかになって、いざという時、就職なんて、できないんだからね」
「おい。女三人で、何を勝手なことを、くっちゃべってるんだ」
雪美の、テープの巻き方が、甘かったのであろうか。
足元で、大きな芋虫のように身をくねらせていた永瀬一朗が、不意に立ち上がり、口のガムテープをもぎ取った。
いつの間にか、手足のテープは、剥ぎ取られてる。
あっと言う間もなく、雪美の首根っこを左手の肘で抱え込み、じりじりと後じさる。
右手には、おおぶりの、カッターナイフが握られていた。
「みんな、道連れだ」
一朗は、足元のガスストーブの元栓を開いた。
しゅーぅ！
気体が漏れ出る音とともに、独特の臭気が、その場にいた全員の鼻をついた。
真紀子が叫んだ。
「なにするの！」
「どうせ俺は、犯罪者だ。これから先、ろくな人生じゃないからな」
一朗は、顎でテレビを指した。
そこには、ロープで囲まれた、永瀬家が移っていた。
「真紀子さんに続いて、家に入った祖母、信子さんの様子は、全く、わかりません。小学六年生の、近藤雪美ちゃんは、無事なのでしょうか？」
緊迫した様子の女性レポーターが、煽るように、しゃべり立てている。
「機動隊の突入はまだです。繰り返します。機動隊の突入は、まだの模様です」

しゅーしゅーと、不気味な音を立てて、ガスが充満していく。
「俺は、ただ、静かに暮らしたかっただけなのに。それを……。おい、お前、ドアを閉めろ」
一朗は、真紀子に顎でしゃくった。
「い、いやよ」
「こいつが、どうなってもいいのか！」
カッターナイフを、雪美の喉に突き立てる真似をする。
「おやめ！」
信子が叫んだ。
「人質を取るなら、私にしなさい。私は、もう、充分生きたから。そんな小さな女の子を人質に取るより、罪は軽くなるわ、きっと」
「だめよ。私を人質にして、雪美を解放して。私はこの子の、母親なんだから」
「よかったねえ、雪美ちゃん」
一朗が、不気味に笑った。
「お母さんや、おばあちゃんからも、大事にされてて。さっきは、随分、心配してたもんねえ。警察にお手紙、書いてるとき……」
雪美は、こぼれるように大きな目を見開いている。
「お母さん、来なかったら、どうしようって、言ってたよねえ。よかったねえ。おばあちゃんまで来てくれて。三人一緒に、死ねるよ」
「死にたく、ない……」
「その子を、離して！」
「雪美と真紀子は、外へ出すのよ！」
「うるさいっ！　ぎゃーぎゃー、わめくなっ」
一郎が叫んだ隙に、信子が、ガス栓に駆け寄ろうとした。
「動くな！」
一朗は、雪美の頸に巻きつけた左手に、ぐっと力をこめた。
「こいつが、どうなってもいいのか！」
一朗は、カッターナイフを握った右手を前に突き出して、威嚇した。
「三人とも、俺と一緒に、死ぬんだよ。運がよければ、近所の家も、

吹っ飛ぶだろうよ」
信子が、何か喚いた。真紀子の悲鳴が先だったか。
ボンッ
まるで、拳銃の暴発のような音が、鳴り響いた。
「キャァーッ」
そして、真っ赤なゲル状のものが、全てを覆った。

悲鳴を契機に、突入した機動班は、あたり一面、真っ赤という、大変な惨状を目にして、声を失った。
部屋の中は、物凄い匂いがする。
しゅーしゅーという、ガスと、生臭い匂いと、それから……。
機動班の隊長は、真っ先に、ガスの元栓を閉めた。隊員がなだれ込み、窓を開ける。
女三人は、重なって蹲っていた。一番下の小六の女の子に、母親が覆いかぶさり、その背中を抱くようにして、小柄な祖母が、手を回している。
永瀬一朗は、右手を前に突き出したまま、凍ったように、突っ立っていた。
カッターナイフは、足元に落ちている。
すかさず、副隊長が、永瀬一朗の足元の、カッターナイフを蹴り飛ばした。
肩に手をかけ、現行犯逮捕の旨を告げると、一朗は、夢から覚めた人のような、顔になった。
天井から、赤い飛沫が、ぽとりと落ちた。
「なに、これ……。赤い……。ヘンな匂い……」
人質の三人が、順繰りに身を起こした。小六の女の子が、呆然と、真っ赤な部屋を、見回している。
「ほんとだ。臭い……」
「目に沁みる」

「雪美、顔をこすっちゃ、だめ」
祖母が、左手についたそれに、目をやった。
じっと見詰めてから、鼻を近づけて匂いをかぐ。
それから、機動隊長が止める間もなく、ぺろりと舐めた。
「これ……キムチ……」
「キムチぃー？」
母親と娘が、互いにそっくりな目を、くりっとさせて、同時に叫んだ。
祖母は、ドア口を指差した。さきほど、彼女が持ちこんだレジ袋が、ぼろぼろになって、落ちている。
少し離れて、本棚のすぐそばに、中が赤く染まった、空っぽの、大きな漬物瓶が、転がっていた。
「発酵して、蓋が飛んだのね。今年初めて、チャレンジしたのよ。日本のものじゃないし、いくらベテラン主婦でも、ま、こういうこともあるってことね」
「はあ」
「長丁場になると思ってさ。差し入れを持ってきたのよ」
「だからって、キムチ……」
「キムチだけじゃないわよ。ほら……」
祖母は、近くに転がっているレジ袋を手繰り寄せた。
「何しろ急なことだったんでね。おにぎりを握る暇ぐらいしか、なかったわ。でも、干し芋、金柑の甘煮に、梅干もあるわよ。今年の梅は、ふっくらしていて、豊作だったの。真紀子、あなたの所にも、送ってあげたでしょ」
「……フランスでは、お米が高くってね。ワインに入れて飲むのも、合わない気がしたけど」
「夏、お母さんの所へ行った時、飛行機の酔い止めにって、持たせてくれたよね……」
「ご無事で、何よりでした」
起動隊長は、三代の女たちに、敬礼した。

エピローグ

エピローグ

「本当に、私じゃなくて、いいんだね？」
信子は、玄関を、うろうろ歩きながら、聞いた。
「大丈夫かね」
「平気よ、お母さん」
トレーナーとジーンズの上に、中綿ジャンパーを引っ掛けた真紀子が、スニーカーを履きながら言う。
「せっかく、日本にいるんだしね。普段、子どもたちがお世話になっている学校ですもの、ＰＴＡにも、参加しなくちゃいけないわ」
「でも、いきなり、互選会ってのも……」
「大丈夫。なんとかなるって」
ＰＴＡの役員決めの日だった。
一年生から五年生の、各クラスから「推薦」された候補者の中から、来年度のＰＴＡ本部役員を選出するのである。
選出は、話し合いでなされるが、決まらない場合の押し付け役は、この春、卒業していく六年生の委員が勤める。四月のアミダで、信子は、互選会委員長の大役を引き当てていた。
「それに、ＰＴＡ会長は、もう、決まってるんでしょう？」
「しのぶさんが、根回ししてくれたみたいだけど……」
この近隣が、人質事件で大騒ぎしていた頃、同じく互選会委員である、角館しのぶは、役員候補者の名簿と、首っぴきで、会長を引き受けてくれそうな人を探していた。
二人の子どもの、幼稚園時代からの友達関係と、過去、自分が役員をやった際の人脈、近所づきあいまで動員して、役員候補者の中から、時間に余裕があり、なおかつ、頼まれると否と言えない性格の人を、捜し当てていた。

すでに電話攻撃を仕掛け、内諾を得ているという。
「会長さえ、決まったら、後は、なんとかなるもんよ。最悪、クジ引きで決めればいいんだから」
少し前、しのぶが、信子の携帯に、電話をかけてきた。
「それより、あんな事件のすぐ後で、信子さん、大丈夫？　来れる？」
帰国中だから、子どもたちの母が行く、と信子が言うと、しのぶは、くつくつと笑った。
「じゃ、お任せしようかしら。キャリアウーマンのお母さんが、忙しい私にもできた、ＰＴＡ！　って言ってくれたら、とても説得力があるもの」
「会長選びでは、しのぶさんに、任せきりになってしまって、悪かったわ」
「田之倉さんと後藤さんにも、頼んだわよ、もちろん。私は、内気だからね。あの人たちが、ひたすら、プッシュしまくったの」
「へえ」
田之倉さんと後藤さんは、「ＰＴＡ役員互選会に前向きに参加して頂く為に」という、たよりを、一緒に印刷した仲間である。
二人とも、子沢山で、どっしり構えているので、確かに、オシは強かろう、と、信子は思った。
そして、新会長が、気の毒な気にも、なったものだった。
雰囲気を和らげる為のお菓子と、ペットボトルを車に積んで、真紀子は、出かけていった。
真紀子を送り出し、信子は、やれやれと、居間に戻った。
テレビをつける。
ワイドショーの特集をやっていた。「心の闇ラビリンス」という、凶悪事件の犯人の、心理分析をするコーナーで、信子の好きな番組だ。
画面に、見慣れた風景が映っていた。
「あらら」

それは、つい、この近所である。カメラはズームし、永瀬家をアップで映した。
「うちは、向かいなのよ」
信子はつぶやいた。
見たことのあるリビングルームに座る、ピンクのセーターが映った。顔には、ボカシが入っていて、甲高い、幽霊みたいな声でしゃべる。
永瀬一郎容疑者の母（五十六歳）と、テロップが入った。
「おとなしい子どもでした。小学校の頃から、本が大好きで、中学では、毎年、図書委員をやっていました。図書館に、入りびたりだったんです。あの子は……。あの子は、ただ、静かに暮らしたかっただけなんだと思います。静かな落ち着いた環境で、しばらく休めば、きっと、もう一度、社会に出ようという気になってくれた筈です……」
……でも、こんな事件を起こしたら、もう、無理よね。これだけ大騒ぎをしておいて、静かな環境なんて、よく言うわ……。
ご近所のことではあるし、一朗の罪が軽くなるよう働きかけてみるつもりだと、真紀子夫婦は言っていたが、信子は釈然としなかった。
警察に保護された後、虚偽の手紙を書いた件を説諭されて、雪美は家に帰された。一朗をパソコンで殴ったことについては、ユイラちゃんを守ろうとしたことが認められたのか、雪美の年齢が考慮されたせいか、はたまた、永瀬家にいる間中、パニック状態だったと、信子と真紀子が主張したせいか、お咎めはなしだった。
そう。雪美は、ちっとも悪くない。
全ての元凶は、永瀬一朗だ
一朗は、雪美におかしな薬物をかがせた。その上、怯えた雪美が口走ったことが癇に触ったからといって、頭を殴ったのだ。
到底、許せるものではない。
画面が変わり、道路を歩きながら、アナウンサーが言う。

「一朗容疑者の挫折は、就職してからでした」
……うちの前の道路だわ……。
「仕事は、激務でした。残業が続き、朝、定時に、家を出ることができなくなっていきました。会社は、フレックス制だったのですが、午前も遅い時間になると、一朗容疑者は、外へ出られないのです。なぜでしょうか」
割ぽう着姿の、初老の女性が、映った。後ろ姿である。
……やだ、上橋さんじゃないの……。
「この辺？　いつも子どもらが、集団で遊んでますよ。午前中から、夕方、暗くなるまで。うるさい？　子どもの遊ぶ声がうるさいなんて、あなた、そんなこと、あるわけないじゃないですか。でも、親の声は、ちょっと、あれ、ねえ。それから、大きな音の出る玩具って……。そういう、人の迷惑になるようなものを売るっていう、企業の姿勢？　そういうのは、どうかと、思うんだけど」
……まぁた、いい人ぶって。自分だって、うるさいくせに……。
　続いて、パンツスーツの、細身の女性が映った。横顔は、髪の毛で隠れている。
……辛島さんだわ……。
「なんたって、オバさんたちの、井戸端会議ですよ。それも、何時間も、続くんです。まるで、関所だわ。一緒に、井戸端会議に参加しない人の、悪口を言うんです。悪い噂を立てられるのが怖くて、そばを通れない人を、私は、知っています」
……関所か。前に、雪美もそんなこと、言ってたわね。それにしても、何時間も、人の悪口をしゃべってるなんて、コワいオバさん達もいるものね。ヒマなのね、きっと……。私たちなんて、世間話しか、しないもの、かわいいものだわ……。
　道路を歩きながら、アナウンサーが言う。
「そして、夜も……」
再び、永瀬家のリビングルームの、ピンクのセーター。
「せめて夜か早朝、散歩に行ければいいと思ったのですが、それも、

難しい状況でした。大型犬を連れた人たちが、集まってくるんです。そりゃ、夜ですから、大きな音は、たてません。吠えないしつけもしてあるようでした。でも、気配がするんです。リードを外した大型犬たちが、たくさん、道路を走り回っているんですよ。怖くて、外へなんて、出て行けるわけ、ありません……」

……あら、夜中に、そんなことがあったの？　知らなかったわ。うちの前じゃ、ないわよね。まん前だったら、いくらなんでも、気がつくもの……。

「この家の前は、玄関を一歩出ると、明るいうちは、児童公園と、ケルベロスの関所、暗くなったら、ドッグランなんです。こんなんで、外へ出られるでしょうか！」

……私の知らない間に、いろんなことが、あったのね。ところで、ケルベロスって、何かしら？……。

「こうして次第に、一朗容疑者は、ひきこもりへの道を、歩み始めていったのです……」

……その結果が、人質事件よ。私だって、ずっと家にいたら、うんざりするもの、引きこもりなんてしてたら、頭がヘンになっても、無理ないわ。それにしても、道でうるさく遊んでいた斉藤さんちの子ならともかく、なぜ、うちの雪美までもが、さらわれなくちゃ、ならなかったのかしらね。やっぱり、ユイラちゃんの顔を見ちゃったのが、まずかったのね。あの日、私が外出したせいだわ。表で、上橋さんにつかまりさえしなければ、もっと早く帰れて、雪美も、あんな目に遭わないで済んだかもしれない。全く、うらめしいことだわ。真紀子や私まで、危うく死ぬところだったし……。

……でも、雪美は、勇敢だったわ。それに、優しくもあった。年下のユイラちゃんを、身をもって、かばってあげたんですもの……。その辺のことを詳しくやらないかと、信子は、録画リモコンを片手に待っていたが、番組は、終わってしまった。

がっかりしていると、雪美が、階段から、降りてきた。

「塾行く」

「今日くらい、休んだら？　せっかく、お母さんがうちにいるのに。今夜は、お父さんも呼んで、鍋だよ」
「だって、もうすぐ、入試だもの」
「じゃ、駅まで、車で、」
「いいよ、おばあちゃん。自分で行けるから。それに、マーチ、お母さんが乗ってっちゃったじゃない」
「ああ、そうだった。気をつけて行ってくるのよ。ところで、雪美、あなた、ほんとに、専業主婦になるの？」
雪美は、にやっと、笑った。
「まずは、志望校に合格しなくちゃ。専業主婦になるのも、大変だ」
塾弁を持たずに、雪美は出かけていった。
夜遅くなっても、鍋は、そのまま食卓に出しておこう、と、信子は思った。美弥は待てないから、七時には夕食を済ませてしまう。真紀子夫婦も美弥と一緒に食べるだろうが、雪美が帰ってからも、うどんくらいなら、お腹に入るだろう。
雪美と入れ違いに、美弥が、飛び込んできた。
靴を、ばたばたはたき落とすと、トイレに駆け込む。
ざー、と、水を流す音とともに、トイレから出てくると、信子の顔を見て、ほっとしたように、目じりを下げて、笑った。
「これから、広場に行くからー」
「誰と遊んでるの？」
「ユリちゃんとヒメちゃんと、サトル君。でも、直接、広場に来る子もいるの」
「ああ、そう」
「広場にね、似鳥先生が、みゅうを連れてきてくれるって」
「みゅう？」
「ネコちゃんだよ。忘れちゃったの？」
「ああ、そうだった」
飛び立つように、駆け出していった。

補註

補註

第一章

家庭に問題があると、いらいらしたりするお子さんは、多いですからね。

←　↑

母は海外赴任中、父親とは別居……。雪美と美弥が、祖母の家で暮らしているという状況を、揶揄したものであろう。似鳥先生から聞いたか、信子自身が、美弥のクラス会で説明したのかもしれない。

「雪美ちゃんのお母さんの名前を、書いてください」

←　↑

小野寺さんは、信子は、真紀子の代理で来たと知っていた。役員は、もちろん、雪美の母親である、真紀子がやるものだと思ったのだ。

真紀子に電話を掛けようか。

←　↑

あんたの代わりに、こんなに大変な役を、押しつけられたのよっ、くらいは、言ってもよかろう。

「健康診断とか、受けてます？」

←　↑

保健の先生が言っているのは、シルバー健診で、主婦健診ではない。

「雪美パパがなさるのではないの？」

←　↑

しのぶさんの二人の子どもは、美弥と雪美と、それぞれ同じクラスにいる。彼女は、母親の真紀子が、海外赴任中なのを知っていたのだろう。母親が無理なら、父親、と思ったのだ。高齢の祖母が委員長をやる、とは、さすがに思わなかったろう。

近藤が大丈夫というので、子どもたちのことは任せていたが、

←　↑

真紀子が海外赴任してしばらくの間は、父親の近藤氏が、子どもたちのめんどうをみていた。信子も、父親の意思を尊重して、あえて、手を出さなかったものとみえる。

だから私が、二人を引き取った。近藤なんかに任せておけるか。

←　↑

こんな状態では見てはおれぬ、というわけで、祖母の信子が、同じ市内にある、自分の家へと引き取ったわけである。

近藤は不本意だろうが、私も無職の専業主婦の身で、多少強引であったかとも思うが、これでよかったと思っている。

ついでだから言っておこう。

私は、夫とは別居しているが、離婚はしていない。

←　↑

近藤氏は、信子の夫ではない。美弥と雪美の父親である彼は、信子の娘、真紀子の夫ある。子どもたちの祖父である信子の夫は、定年退職後、シニア海外ボランティアをして、第二の人生を有為に生きている。しかし、またも置き去りの信子には、不満である。これが、「別居」の真相である。ま、いくつになっても、「専業主婦」は退職できないわけです。

第二章

私は呆れてしまった。
しのぶさんは、ぺろっと舌を出した。
年の話は、しないのよ」
田之倉さんが言った。

←　↑

そりゃ、来年八〇歳という方に、「私、もう、年ですから」なんて、言えません……。

真紀子は、激怒していた。
なぜ、そんなものを引き受けたのか。……ＰＴＡは、私がやるんだから、と言うと、真紀子は、急におとなしくなったっけ。

←　↑

母親の真紀子には、ＰＴＡ役員など、やる気も余裕も、ないのである。しかし、祖母の信子が、引き受けてくれるのなら、無問題。

雪美が、私のことを「ババァ」と呼ぶのは、仕方のないことだと思っている。私が、悪かったのだ。面と向かって「ババァ」と呼ばれ

ると、彼女が幼い日のことが思い出され、辛くなる。

←　↑

第五章解説を参照

「いろいろ大変なのよ。子どもがいると、ね」

「そうよねえ。信子さん、偉いわ」

←　↑

武藤さんは、信子と同じ年回りと思われる。祖母が孫の世話をすることの困難さを、よく知っている。「さすがに、子どもと暮らしている人は違うわね。言葉が豊富」などと言っているから、孫がいないか、いても遠方なのであろう。

マンションで鍵っ子だった頃

←　↑

近藤一家は、当初、信子夫婦とは別居していた。真紀子は、ずっとフルタイムで働いていたので、子どもたちは、信子に引き取られるまで、鍵っ子だったわけだ。

飛び出した鼻先をぽきんと折られたような気分で帰宅し、怒り覚めやらず、時差も考えずに、真紀子に電話した。

←　↑

子どもがこれだけの侮辱を受けたのだもの、真っ先に母親に報告するのは、当たり前。相手の都合が悪くたって、後回しにはできない。しかしさすがに、実の娘が、異国で、事故にでも遭っては困るから、通話の最後に、気遣いをみせている。

「モンスター……」
言い掛けた真紀子に、
←↑
続く言葉は、「グランドペアレント」である。

あなただって、美弥が放火魔だなんて思わないでしょ？
←↑
母親ですもの、当然よねっ、というわけである。

第三章

おやこ
←↑
「父子」ではない。近藤氏、雪美、美弥、それに、真紀子の「親子」である。ヨーロッパとは、むろん、真紀子のいる、フランスのことである。近藤氏が信子を誘ったのは、日頃子どもたちの世話をしてくれている義母を、観光方々、海外の娘（自分の妻）の所に連れて行ってあげようという、娘婿の優しい気遣いだったのだ、ろう。

「ほほう。資格試験かなにか……」
←↑
受験するのは、このばあさんの子？　すると、もう、いい年だろうから……。資格試験でも受けるのだと、斉藤氏は、推測したのだ。だから、中学受験と聞いて、心底驚いたわけである。

免許を返納した方がいいんじゃない、などと毒づいていた

←　↑

警視庁では、高齢のドライバーに対して、「免許を返納する勇気」を持ちましょうと呼びかけている。また、七〇歳以上のドライバーは、講習が必要なので、高齢ドライバーが運転を続けるのは、実際、めんどうにはなっている。

あまりに久しぶりで運転席に座ったので、……？　もう一つ、ペダルがあった筈だが？

←　↑

信子が運転免許を取った頃には、オートマ車などなかった。マニュアル車には、アクセルペダル、ブレーキペダルの他、クラッチペダルなどというやっかいなものがついている。

「そもそも、なんで、いまさら、車の運転をしようなんて思い立ったんですか」

←　↑

相手が、小学生の母親になら、「いまさら」という言葉は出てこないだろう。だが、来年八〇歳という年齢での、ペーパードライバー講習なら、「いまさら」とも言いたくなろう。

「失礼ですが、ワープロとかパソコンとかは？」

「数々の失礼な発言の中で、今のが一番失礼な発言だわ。……

←　↑

コンビニの支払機にさえ拒絶感を抱いていた信子（第一章）が、インターネット通販を利用する（第三章）までに至っているのである。老婦人だからといって、パソコンできますか、は、失礼極まる発言である。

その上、……誤認逮捕などという事態になったら、目も当てられない

←　↑

七十九歳の老婦人を（しかも次に起きる誘拐事件の被害者の祖母である）、誤認逮捕したら、世間の反応はどうなるか……？　考えるさえも恐ろしいと、本部長は怯えたのである。

第五章

幼児が、遠くにいる祖母に、力いっぱい呼びかけたら、こんな発音になるだろう。

←　↑

二つの「バ」は同じ高さ、同じ長さで発音され、続く「ァ」は幾分高めに、二番目の「バ」を長く伸ばした母音として発音される。

両親のマンションで、鍵っ子だった頃、雪美は、学校から帰ると、一人、部屋の隅に、体育座りをして蹲っていた。学童保育には、行けなかった。いじめる子が、いたのだ。

そこへ、まるで白馬の騎士のように、祖母は、乗り込んできたものだ。ただしこの騎士は、電動アシスト付き自転車に乗り、手作りのお団子やらドーナツやらをたくさん積んで、やってきた。

そして、雪美の宿題をみたり、洗濯を取り込んだり、時間になると、小さな美弥を迎えに行く。妹の保育園までの道を、雪美と祖母は、手をつないで歩いたものだ。

夜、母が帰ってくると、入れ違いで、祖母は帰っていく。自転車で走る祖母の後を、幼い雪美は、いつまでもいつまでも、走って追いかけていった。暗い夜道を、「ババァー、ババァー」

と呼びながら。

補註（後書き）

ダマされた？

こう結ぶつもりでした。

でも、初めて連載を終え、今はただ、
ここまで読んで頂けたことへの、
感謝の気持ちでいっぱいです。
……文字ぎっちりで、とても読みづらい、電子の画面だったのに。

作家（？！）にあるまじき、月並みな表現ですが、こうとしか書けません。
「本当にありがとうございました」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6927t/

専業主婦！

2011年7月8日11時39分発行